

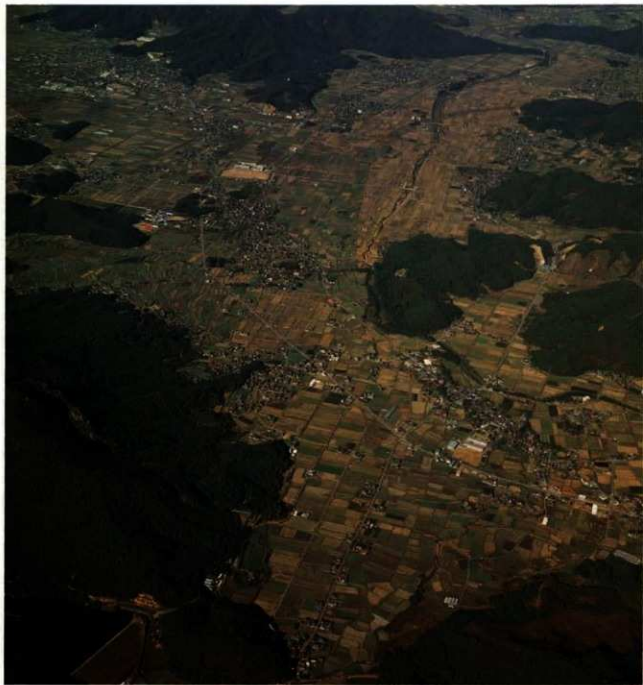
# 七日市遺跡 (I)

(旧石器時代遺跡の調査)

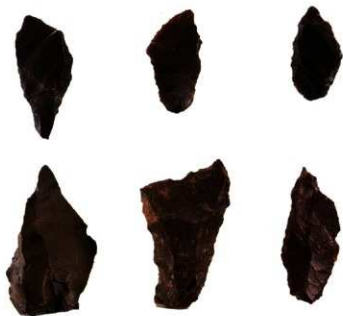
— 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅶ-1) —

1990

兵庫県教育委員会



永上低地全景 (神戸新聞出版センター提供)



ナイフ形石器



刃部磨製石斧

## 例 言

1. 本書は、兵庫県氷上郡春日町七日市・柳原・野村に所在する、七日市遺跡の発掘調査報告書（Ⅰ）（旧石器時代遺跡の調査）である。
2. 本遺跡は、これまでの報告において春日・七日市遺跡あるいは春日七日市遺跡と呼称してきたが、本報告をもって、七日市遺跡と改め統一する。
3. 発掘調査は、近畿自動車道舞鶴線建設（現舞鶴自動車道）に伴い、日本道路公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
4. 発掘調査の期間および担当者は、下記のとおりである。

全面調査 昭和59年6月1日～昭和60年10月9日

担当者	主 査	井守徳男
	技術職員	種定淳介
	技術職員	村上賢治
	技術職員	平田博幸
	技術職員	久保弘幸
	技術職員	山田清朝
	技術職員	藤田 淳

上記期間のうち旧石器時代遺跡の調査は、昭和59年10月3日～昭和60年10月9日にわたって実施した。

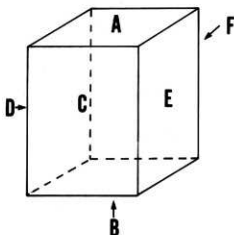
5. 遺跡の測量基準点は、国土座標（第Ⅳ系）点を基礎とした。本文中に記載する方位は、特に注記をおこなわない場合、座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした、海拔高度である。
6. 旧石器時代遺跡調査の際の、遺構・遺物検出状況の測量・図化は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの伊東太作氏の指導により、開発されたシステムを使用した。
7. 本書の付篇は、旧石器時代遺跡の調査・整理作業に際して、自然科学各分野の研究者の先生方にご協力いただいた分析結果について御寄稿いただいたものである。
8. 本書の編集は久保・藤田が行い、本編の文責については、文末に氏名を記した。
9. 整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施し、調査担当者および下記の嘱託職員他がおこなった。  
阿部不二・岡崎輝子・香川フジ子・金山恵子・木村淑子・菅口治子・小林弥生・中納久美代・野村佳陽子・古谷章子・前田千栄子・松本久美子・本窪田英子・森山恭子・吉田圭子・吉田由起子
10. 発掘調査にあたっては、下記の諸氏に調査の指導、および調査補助員として御助力いただいた。  
山中一郎・青木哲哉・国井和哉・高木隆司・田中正弘・土井基司・東久高明・中川和哉・中嶋正巳・長谷川範明・松永幸男・水之江和同・宮井善朗・綿貫俊一

11. 昭和56年に春日七日市遺跡発掘調査団が実施した確認調査において出土した遺物のうち旧石器と考えられる資料については、調査を担当された村川行弘氏と遺物を保管されている春日町郷土資料館の御厚意により、本書に第1次調査出土資料として実測図と写真を再録させていただいた。
12. この他、発掘調査および整理作業期間をとおして、多くの方々に御指導、御助言を賜ったことに感謝の意を表したい。

## 凡 例

1. 第4章～第6章の器種別分布図に使用されたマークの示す器種は左下図のとおりである。
2. 第4章～第6章の石器組成表に使用された器種の略号は、KN(ナイフ形石器)、KB(小型部分加工石器)、SC(スクレイパー)、NO(挟入石器)、DE(鋸歯縁石器)、PE(楔形石器)、RF(二次加工ある剥片)、AX(刃部磨製石斧ほか大型の石器)、UF(使用痕ある剥片)、FL(剥片)、CL(砕片)、CH(チップ)、CO(石核)を示す。また、石材ではCH(チャート)、SN(サヌカイト)を示す。
3. 第Ⅱ文化層の母岩番号はB区ブロック群(150番台～)、C区ブロック群(100番以下)、G・H区ブロック群(200番台)、M区ブロック群(300番台、500番台)、N区ブロック群(400番台)、S・T区ブロック群、T・U区ブロック群(500番台)、とし、接合資料番号は母岩番号と同じものを用いている。ただし、1つの母岩に複数の接合資料が存在する場合は枝番号を付けている。
4. 母岩別分布図においてTは製品を、Uは使用痕ある剥片を、C・クロベタは石核を表す。
5. 接合資料実測図と接合資料刻離工程においては、石核を立方体とみなし下右図のように6つの面にA面～E面と番号を付した。

- ・ チップ
- 剥片
- 石核
- ◇ ナイフ形石器
- ◆ 小型部分加工石器
- ▲ スクレイパー
- 挟入石器
- 鋸歯縁石器
- ★ 刃部磨製石斧・砥石他的大型石器
- × 楔形石器
- 二次加工ある剥片
- ▲ 砕片
- ▲ 使用痕ある剥片



# 本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第2章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査の方法と経過	12
第3章 層序と遺構・遺物の検出状況	
第1節 基本層序と微地形	15
第2節 遺構・遺物の検出状況	24
第4章 第Ⅰ文化層	
第1節 概要	25
第2節 遺構	25
第3節 遺物	26
第5章 第Ⅱ文化層	
第1節 概要	27
第2節 遺構	29
第3節 遺物	108
第4節 小結	130
第6章 第Ⅲ文化層	
第1節 概要	145
第2節 遺構	145
第3節 遺物	169
第4節 小結	181
第7章 結語	185
引用・参考文献	190
付篇	
1. 七日市遺跡の旧石器出土層の <sup>14</sup> C年代測定	191
2. 七日市遺跡における土壌中火山ガラス抽出分析	195
3. 花粉分析から推定した七日市遺跡設営前の森林植生	209
4. 七日市遺跡の古地磁気	215
5. 七日市遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の石材産地分析	227
英文サマリー	237

## 図版目次

(遺物実測図)	
図版1	第Ⅱ文化層の石器1
図版2	第Ⅱ文化層の石器2
図版3	第Ⅱ文化層の石器3
図版4	第Ⅱ文化層の石器4
図版5	第Ⅱ文化層の石器5
図版6	第Ⅱ文化層の石器6
図版7	第Ⅱ文化層の石器7
図版8	第Ⅱ文化層の石器8
図版9	第Ⅱ文化層の石器9
図版10	第Ⅱ文化層の石器10
図版11	第Ⅱ文化層の石器11
図版12	第Ⅱ文化層の石器12
図版13	第Ⅱ文化層の石器13
図版14	第Ⅱ文化層の石器14
図版15	第Ⅱ文化層の石器15
図版16	第Ⅱ文化層の石器16
図版17	第Ⅱ文化層の石器17
図版18	第Ⅱ文化層の石器18
図版19	第Ⅱ文化層の石器19
図版20	第Ⅱ文化層の石器20
図版21	第Ⅱ文化層の石器21
図版22	第Ⅱ文化層の石器22
図版23	第Ⅱ文化層の石器23
図版24	第Ⅱ文化層の石器24
図版25	第Ⅱ文化層の石器25
図版26	第Ⅱ文化層の石器26
図版27	第Ⅱ文化層の石器27
図版28	第Ⅱ文化層の石器28
図版29	第Ⅱ文化層の石器29
図版30	第Ⅱ文化層の石器30
図版31	第Ⅱ文化層の石器41
図版32	第Ⅱ文化層の石器32
図版33	第Ⅱ文化層の石器33
図版34	第Ⅱ文化層の石器34
図版35	第Ⅱ文化層の石器35
図版36	第Ⅱ文化層の石器36
図版37	第Ⅱ文化層の石器37
図版38	第Ⅱ文化層の石器38
図版39	第Ⅱ文化層の石器39
図版40	第Ⅱ文化層の石器40
図版41	第Ⅲ文化層の石器1
図版42	第Ⅲ文化層の石器2
図版43	第Ⅲ文化層の石器3
図版44	第Ⅲ文化層の石器4
図版45	第Ⅲ文化層の石器5
図版46	第Ⅲ文化層の石器6
図版47	第Ⅲ文化層の石器7
図版48	第Ⅲ文化層の石器8
図版49	第Ⅲ文化層の石器9
図版50	第Ⅲ文化層の石器10
図版51	第Ⅲ文化層の石器11
図版52	第Ⅲ文化層の石器12
図版53	第Ⅲ文化層の石器13
図版54	第Ⅲ文化層の石器14
図版55	第Ⅲ文化層の石器15
図版56	第Ⅲ文化層の石器16
図版57	第Ⅲ文化層の石器17
図版58	第Ⅲ文化層の石器18
図版59	第Ⅲ文化層の石器19
図版60	第Ⅲ文化層の石器20
図版61	第Ⅲ文化層の石器21
図版62	第Ⅲ文化層の石器22
図版63	第Ⅲ文化層の石器23
図版64	第Ⅲ文化層の石器24
図版65	第1次調査出土資料 (写真)
図版66	遺跡全景
図版67	土層断面
図版68	第Ⅰ文化層・第Ⅱ文化層

図版69	第Ⅱ文化層	図版 93	第Ⅱ文化層の石器18
図版70	第Ⅱ文化層	図版 94	第Ⅱ文化層の石器19
図版71	第Ⅱ文化層	図版 95	第Ⅱ文化層の石器20
図版72	第Ⅱ文化層	図版 96	第Ⅱ文化層の石器21
図版73	第Ⅱ文化層	図版 97	第Ⅱ文化層の石器22
図版74	第Ⅱ文化層	図版 98	第Ⅱ文化層の石器23
図版75	第Ⅲ文化層	図版 99	第Ⅱ文化層の石器24
図版76	第Ⅱ文化層の石器 1	図版100	第Ⅱ文化層の石器25
図版77	第Ⅱ文化層の石器 2	図版101	第Ⅱ文化層の石器26
図版78	第Ⅱ文化層の石器 3	図版102	第Ⅲ文化層の石器 1
図版79	第Ⅱ文化層の石器 4	図版103	第Ⅲ文化層の石器 2
図版80	第Ⅱ文化層の石器 5	図版104	第Ⅲ文化層の石器 3
図版81	第Ⅱ文化層の石器 6	図版105	第Ⅲ文化層の石器 4
図版82	第Ⅱ文化層の石器 7	図版106	第Ⅲ文化層の石器 5
図版83	第Ⅱ文化層の石器 8	図版107	第Ⅲ文化層の石器 6
図版84	第Ⅱ文化層の石器 9	図版108	第Ⅲ文化層の石器 7
図版85	第Ⅱ文化層の石器10	図版109	第Ⅲ文化層の石器 8
図版86	第Ⅱ文化層の石器11	図版110	第Ⅲ文化層の石器 9
図版87	第Ⅱ文化層の石器12	図版111	第Ⅲ文化層の石器10
図版88	第Ⅱ文化層の石器13	図版112	第Ⅲ文化層の石器11
図版89	第Ⅱ文化層の石器14	図版113	第Ⅲ文化層の石器12
図版90	第Ⅱ文化層の石器15	図版114	第1次調査出土資料
図版91	第Ⅱ文化層の石器16	図版115	調査風景
図版92	第Ⅱ文化層の石器17		

## 挿図目次

第1図	七日市遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 2	第9図	測量基準点網図……………14
第2図	七日市遺跡周辺の地形分類図…………… 3	第10図	確認調査グリッド・トレンチ配置図…14
第3図	遺跡周辺の微地形等高線図…………… 4	第11図	遺跡における微地形の分布……………16
第4図	県下の旧石器時代遺跡の分布…………… 8	第12図	基本層序柱状図……………17
第5図	調査工区区割図……………10	第13図	古地理の復原図……………21
第6図	春日インターチェンジ……………11		22
第7図	調査工程図……………11	第14図	埋没微地形の模式的な形成過程……………23
第8図	旧石器全面調査の範囲……………13	第15図	第Ⅰ文化層石器分布図……………25



第16図	第Ⅰ文化層器種別分布図、 母岩別分布図……………25	第49図	配石2～6平面図……………61
第17図	第Ⅰ文化層の石器……………26	第50図	G1～G9ブロック器種別分布図1…62
第18図	第Ⅱ文化層ブロック群 分布模式図……………28	第51図	G1～G9ブロック器種別分布図2…63
第19図	B区ブロック群石器・礫分布図……………29	第52図	G1～G9ブロック母岩別分布図1…64
第20図	B区ブロック群石器等量線図……………30	第53図	G1～G9ブロック母岩別分布図2…65
第21図	B区ブロック群石器等距離線図……………30	第54図	G1～G9ブロック母岩別分布図3…66
第22図	配石1平面図……………32	第55図	G1～G9ブロック母岩別分布図4…67
第23図	B区ブロック群器種別分布図1……………33	第56図	G1～G9ブロック母岩別分布図5…68
第24図	B区ブロック群器種別分布図2……………34	第57図	G1～G9ブロック母岩別分布図6…69
第25図	B区ブロック群母岩別分布図1……………36	第58図	G1～G9ブロック母岩別分布図7…70
第26図	B区ブロック群母岩別分布図2……………36	第59図	G1～G9ブロック母岩別分布図8…71
第27図	B区ブロック群母岩別分布図3……………37	第60図	G1～G9ブロック サヌカイト分布図……………72
第28図	B区ブロック群母岩別分布図4……………38	第61図	G11・G12ブロック器種別分布図……………74
第29図	B区ブロック群母岩別分布図5……………38	第62図	配石7・8平面図……………75
第30図	B区ブロック群母岩別分布図6……………39	第63図	M区ブロック群石器・礫分布図……………78
第31図	C区ブロック群石器・礫分布図……………40	第64図	M区ブロック群石器等量線図……………79
第32図	C区ブロック群石器等量線図……………41	第65図	M区ブロック群石器等距離線図……………80
第33図	C区ブロック群石器等距離線図……………42	第66図	M1～M3ブロック器種別・ 母岩別分布図……………81
第34図	C1・C3・C4ブロック 器種別分布図1……………44	第67図	M4・M5ブロック器種別分布図……………82
第35図	C1・C3・C4ブロック 器種別分布図2……………45	第68図	M4・M5ブロック母岩別分布図……………83
第36図	C1・C3・C4ブロック 器種別分布図3……………46	第69図	M6ブロック器種別分布図、 母岩別分布図……………84
第37図	C2ブロック器種別分布図……………47	第70図	M7・M8ブロック 器種別分布図、母岩別分布図……………84
第38図	C5ブロック器種別分布図……………47	第71図	M9ブロック器種別分布図、 母岩別分布図……………85
第39図	C6ブロック器種別分布図……………48	第72図	配石9～11平面図……………87
第40図	C7ブロック器種別分布図……………48	第73図	N区ブロック群石器・礫分布図……………89
第41図	C1～C7ブロック母岩別分布図1…49	第74図	N区ブロック群石器等量線図……………90
第42図	C1～C7ブロック母岩別分布図2…50	第75図	N区ブロック群石器等距離線図……………91
第43図	C1～C7ブロック母岩別分布図3…51	第76図	N1～N3ブロック器種別分布図1…92
第44図	C1～C7ブロック母岩別分布図4…52	第77図	N1～N3ブロック器種別分布図2…93
第45図	C1～C7ブロック母岩別分布図5…53	第78図	N1～N3ブロック母岩別分布図1…94
第46図	G・H区ブロック群石器・礫分布図…58	第79図	N1～N3ブロック母岩別分布図2…95
第47図	G・H区ブロック群石器等量線図…59	第80図	N4～N6ブロック器種別・ 母岩別分布図……………96
第48図	G・H区ブロック群石器等距離線図…60		

第81図	N5ブロック母岩別分布図……………	97	第105図	G・H区ブロック群における 水洗選別……………	142
第82図	S・T区ブロック群石器・ 礫分布図、礫群平面図……………	99	第106図	M区ブロック群における 水洗選別……………	142
第83図	礫群1平面図……………	100	第107図	N区ブロック群における 水洗選別……………	143
第84図	礫群2平面図……………	101	第108図	S・T区ブロック群における 水洗選別……………	143
第85図	礫群3平面図……………	102	第109図	第Ⅲ文化層石器分布図……………	146
第86図	礫群2における推定が床の位置……………	104	第110図	第Ⅲ文化層石器等量線図……………	147
第87図	S1・S2ブロック 器種別分布図、母岩別分布図……………	105	第111図	C1ブロック器種別分布図……………	148
第88図	S3ブロック 器種別分布図、母岩別分布図……………	105	第112図	C2ブロック器種別分布図……………	149
第89図	T・U区ブロック群石器分布図……………	107	第113図	C3ブロック器種別分布図……………	150
第90図	T1・T2ブロック 器種別・母岩別分布図……………	107	第114図	C4・C5ブロック 器種別分布図……………	151
第91図	ナイフ形石器の形態分類図……………	109	第115図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図1……………	155
第92図	小型部分加工石器の形態分類図……………	111	第116図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図2……………	156
第93図	剥片・使用痕ある剥片長幅分布……………	124	第117図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図3……………	156
第94図	ナイフ形石器背面構成図……………	130	第118図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図4……………	157
第95図	小型部分加工石器背面構成図……………	130	第119図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図5……………	157
第96図	ナイフ形石器、小型部分加工 石器長幅分布図・重量分布図……………	131	第120図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図6……………	157
第97図	第Ⅱ文化層の ブロック群別石材組成……………	133	第121図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図7……………	159
第98図	第Ⅱ文化層の ブロック群別石器・製品組成……………	134	第122図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図8……………	159
第99図	B区ブロック群における母岩別 資料のブロック間共有関係……………	136	第123図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図9……………	160
第100図	C区ブロック群における母岩別 資料のブロック間共有関係……………	136	第124図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図10……………	161
第101図	G・H区ブロック群における母岩別 資料のブロック間共有関係……………	137	第125図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図11……………	161
第102図	M区ブロック群における母岩別 資料のブロック間共有関係……………	138	第126図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図12……………	162
第103図	M区ブロック群における母岩別 資料のブロック間共有関係……………	138	第127図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図13……………	162
第104図	ブロック群間に 分布する母岩別資料……………	140	第128図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図14……………	162
			第129図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図15……………	165
			第130図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図16……………	165
			第131図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図17……………	165
			第132図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図18……………	166
			第133図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図19……………	166
			第134図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図20……………	167
			第135図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図21……………	167
			第136図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図22……………	167
			第137図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図23……………	168

第138図	第Ⅲ文化層母岩別資料分布図24……168	第154図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 e から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……204
第139図	ナイフ形石器の形態分類図……169	第155図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 f から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……205
第140図	ナイフ形石器の背面構成図……181	第156図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 g から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……206
第141図	第Ⅲ文化層ブロック別石器組成……183	第157図	花粉分析試料採取位置……209
第142図	第Ⅲ文化層ブロック別製品組成……183	第158図	地質柱状図……210
第143図	第Ⅲ文化層における母岩別 資料のブロック間共有関係……184	第159図	地質柱状図……210
第144図	<sup>14</sup> C年代測定試料採取位置……193	第160図	七日市遺跡の木本花粉化石の産出 頻度図……211
第145図	七日市遺跡における 連続試料の採取位置……196	第161図	試料採取位置……216
第146図	七日市遺跡のG-a-1区東壁連続 試料の柱状図と分析試料位置、 分析試料の粒度組成、火山ガラ ス・重鉱物・軽鉱物含有量、火 山ガラス屈折率頻度分布図……196	第162図	NR M強度の平面分布……217
第147図	七日市遺跡のG-a-1区東壁連続 試料の分析試料 a (火山灰試料) の火山ガラスの屈折率測定結果……197	第163図	NR Mの方向……218
第148図	七日市遺跡のG-a-1区東壁連続 試料の分析試料 b から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……198	第164図	9 m Tの交流消磁後の 残留磁化強度の平面分布……219
第149図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の柱状図と分析試料位置、 分析試料の粒度組成、火山ガラ ス・重鉱物・軽鉱物含有量、火 山ガラス屈折率頻度分布図……199	第165図	9 m Tの交流消磁後の 残留磁化の方向……220
第150図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 a から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……200	第166図	NR M強度と9 m Tの交流消磁後の 残留磁化強度の比の平面分布……221
第151図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 b から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……201	第167図	NR M強度で規格化した段階交流 消磁実験による磁化強度の変化……222
第152図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 c から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……202	第168図	NR M強度で規格化した段階交流 消磁実験による磁化強度の変化……222
第153図	七日市遺跡のN-e-1区東壁連続 試料の分析試料 d から検出され る火山ガラスの屈折率測定結果……203	第169図	NR M強度で規格化した段階交流 消磁実験による磁化強度の変化……223
		第170図	NR M強度で規格化した段階交流 消磁実験による磁化強度の変化……223
		第171図	受熱したと考えられる試料の 熱磁気曲線……224
		第172図	受熱したと考えられない試料の 熱磁気曲線……224
		第173図	A T火山灰の磁化方向の 等面積投影……225
		第174図	サヌカイトの原産地……228

## 表目次

第1表	七日市遺跡周辺の遺跡……………	2	第30表	第Ⅲ文化層ナイフ形石器観察表 ……	170
第2表	主要遺跡地名表……………	7	第31表	七日市遺跡試料の <sup>14</sup> C年代測定値 ……	194
第3表	七日市遺跡における堆積物の層序……………	18	第32表	G-a-1区東壁連続試料の粒度組成、 火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有量、 主要重鉱物、主要火山ガラス型、色 付きガラスの有無一覧表 ……	197
第4表	第Ⅰ文化層の石器組成……………	26	第33表	N-e-1区東壁連続試料の粒度組成、 火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有量、 主要重鉱物、主要火山ガラス型、色 付きガラスの有無一覧表 ……	200
第5表	第Ⅰ文化層の母岩別資料……………	26	第34表	A T火山灰層と下位層の残留磁化 ……	225
第6表	B区ブロック群の石器組成……………	30	第35表	岩屋原産地からの サヌカイト原石66個の分類結果 ……	228
第7表	B区ブロック群の母岩別資料……………	35	第36表	和泉・岸和田原産地からの サヌカイト原石72個の分類結果 ……	228
第8表	C区ブロック群の石器組成……………	43	第37表	各サヌカイトの原産地における原石 群の元素比の平均値と標準偏差値 ……	229
第9表	C区ブロック群の母岩別資料……………	51	第38表	和歌山市梅原原産地からの サヌカイト原石21個の分類結果 ……	230
第10表	G・H区ブロック群の石器組成……………	54	第39表	各黒曜石の原産地における原石群 の元素比の平均値と標準偏差値1 ……	231
第11表	G・H区ブロック群の母岩別資料1 ……	72	第40表	各黒曜石の原産地における原石群 の元素比の平均値と標準偏差値2 ……	232
第12表	G・H区ブロック群の母岩別資料2 ……	73	第41表	雨滝原産地出土の 黒曜石原石分析結果 ……	233
第13表	M区ブロック群の石器組成……………	76	第42表	七日市遺跡出土の サヌカイト製石器、石片分析結果 ……	233
第14表	M区ブロック群の母岩別資料……………	86	第43表	七日市遺跡出土の 黒曜石製石器、石片分析結果 ……	233
第15表	N区ブロック群の石器組成……………	88	第44表	七日市遺跡出土の黒曜石製、サヌカ イト製石器、石片の原産地推定結果…	235
第16表	N区ブロック群の母岩別資料……………	88			
第17表	S・T区ブロック群の石器組成……………	98			
第18表	S・T区ブロック群の母岩別資料……………	98			
第19表	礫群属性表 ……	103			
第20表	礫重量別度数分布表 ……	103			
第21表	T・U区ブロック群の石器組成 ……	106			
第22表	T・U区ブロック群の母岩別資料 ……	106			
第23表	第Ⅱ文化層出土ナイフ形石器計測表…	110			
第24表	第Ⅱ文化層小型部分加工石器計測表	111			
第25表	第Ⅱ文化層使用痕ある剝片 出土ブロック ……	121			
第26表	第Ⅱ文化層石核出土ブロック ……	122			
第27表	ブロック群ごとの石核類型別点数 ……	123			
第28表	第Ⅲ文化層の石器組成 ……	146			
第29表	第Ⅲ文化層の母岩別資料1・2 ……	153			

## 付 図

付図1 A T直下の微地形図

付図3 土層パネルダイアグラム1

付図2 第Ⅱ文化層石器全点分布図

付図4 土層パネルダイアグラム2

## 第1章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地形の分布と遺跡の立地

七日市遺跡は、由良川の支流である竹田川の上流域に位置している。竹田川は、遺跡のおよそ10km東方にみられる山地から西流し、国領付近で北方へ流路を変えて、遺跡のある七日市の東側を流下する。そして、いくつかの支流を合わせながらさらに北方へ緩やかに曲流し、福知山付近で由良川に合流する土師川に流れ込む。このような竹田川は、周囲に山地が迫った幅500～800mの狭長な谷中を流れている。1万分の1空中写真の判読および現地観察によると、この谷中には5面の段丘（本稿では上位のものから段丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ⅣおよびⅤと呼ぶことにする）と現氾濫原と認められる（第2図）<sup>1)</sup>。これらの地形のうち、段丘Ⅰ、ⅡおよびⅤは断片的ではあるものの竹田川のほぼ全流域にみられるのに対して、段丘Ⅲは下流域に、段丘Ⅳは上流域にのみ分布している。

竹田川の上流すなわち七日市遺跡の周辺には、竹田川のほか、その支流となる黒井川が流れており、それぞれの流域で地形の様相が異なる。遺跡の東側にあたる竹田川の流域では、段丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴおよび現氾濫原が認められる。段丘Ⅰは、柏原付近に分布し、竹田川の現河床よりおよそ10m高い。この段丘は、今からおよそ3万年前以前と推定されている由良川と加古川の河川争奪が起こる直前に形成されたと報告されている（岡田篤正・高橋健一、1969）。すなわち、河川争奪が起こるまで由良川は現竹田川の流路を南流した後、黒井川の流れる谷中をさらに西流し、現在遺跡から約6km西方にみられる石生付近の谷中分水界をへて、加古川に合流していた。そして、この河川争奪の後段丘Ⅱより下位の段丘が形成されたと考えられていたのである。段丘Ⅱは、竹田川の左岸に認められ、現河床とおよそ7～8mの比高を持っている。この段丘は、主に竹田川の小規模な支流がつくった谷中に分布しており、支流の上流から下流に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の周辺にのみ認められる段丘Ⅳは、国領付近において現河床との比高が約6mである。しかし、この段丘はここから現河床よりも急傾斜で徐々に高度を下げ、遺跡の南側で段丘Ⅴ面下に埋没する。これより下位の段丘Ⅴは、竹田川の両岸に分布しており、比較的連続性が良い。これは、現河床よりおよそ4m高く、現氾濫原と1.5～2mの崖で接している。この段丘面上には、棚原付近から七日市に至る旧河道が明瞭に認められる。以上の段丘下にみられる現氾濫原は、竹田川の両岸に沿って細長く分布しており、ここでは旧河道が多数認められる。

一方、黒井川の流域すなわち遺跡の西側には、現氾濫原と扇状地が分布している。現氾濫原は、黒井川が小規模であるため、川に沿ってわずかにみられるにすぎない。これに対して、この川が流れる谷中の大部分は、扇状地によって占められており、これは谷の南北にみられる山地から緩やかに発達している。遺跡の西側においては、特に南から黒井川に向っての扇状地がよく発達しており、この扇状地は段丘Ⅳの西崖と接している。

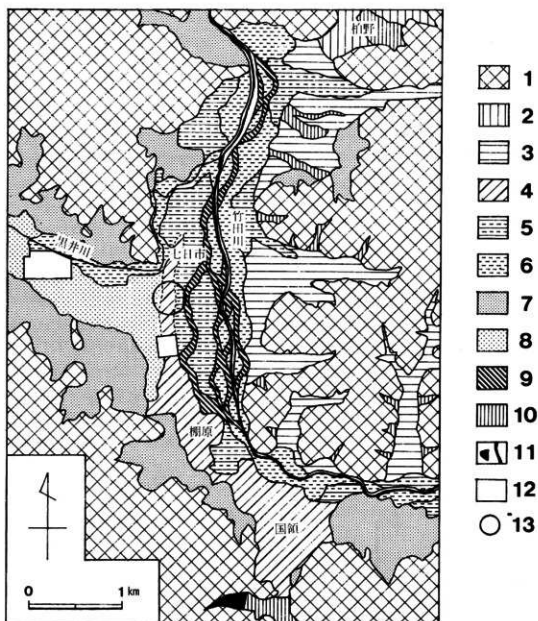
七日市遺跡付近の20cm等高線図（第3図）をみると、遺跡の中央部（M区東半部・N区）に比べて、西部（B区～M区西半部）および東部（O区・P区・U区）がやや低くなっており、さらに東部ではわずかな凹地が南北に帯状に認められる。現地観察によると、中央部と西部ならびに東部との境界には50～80cmの小壁がみられ、東部の凹地はおよそ50cm低くなっている。これらの微起伏は、それぞれ遺跡の西部が扇状地、東部が段丘Ⅴとして東部の凹地が段丘Ⅴ面にみられる旧河道に相当し、中央部は段丘Ⅳ



第1図 七日市遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000 福知山・篠山)

	遺跡名		遺跡名		遺跡名		遺跡名
1	七日市遺跡	9	芝ヶ西古墳群	17	下三井塚古墳	24	中山古墳
2	山垣遺跡	10	多利古墳群	18	兵主古墳	25	黒井城址
3	野村石剣出土地	11	二間塚古墳	19	くど山古墳	26	野上野城址
4	棚原散布地	12	野上野窯跡	20	多田散布地	27	柚津城址
5	柏野古墳群	13	野々間遺跡	21	国領遺跡	28	高尾城址
6	カナツキ遺跡、 カナツキ古墳	14	塩ヶ谷古墳	22	国領遺跡 (井杉森・蓮町 ・石風呂地区)	29	東中城址
7	松ノ本古墳群	15	塩ヶ谷岡田古墳			30	三尾城址
8	多利遺跡群	16	塩ヶ谷山王古墳	23	河津館址		

第1表 七日市遺跡周辺の遺跡



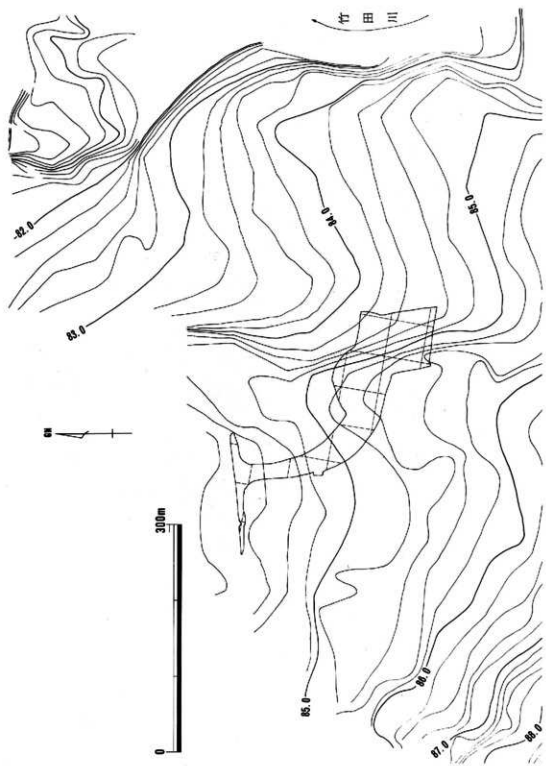
1. 山地 2. 段丘Ⅰ 3. 段丘Ⅱ 4. 段丘Ⅳ (境界線が破線の部分は埋没している)
5. 段丘Ⅴ 6. 現氾濫原 7. 崖錐・土石流扇状地 8. 扇状地
9. 旧河道 10. 間新谷 11. 溜池・河川 12. 人工改変地
13. 七井市遺跡

第2図 七井市遺跡周辺の地形分類図

が地下浅所に埋没していることに影響されて高くなっていると考えられる(以下、埋没している段丘Ⅳを埋没段丘Ⅳと呼ぶことにする)。七井市遺跡は、このように埋没段丘Ⅳ、段丘Ⅴおよび扇状地にまたがって立地しているのである。

なお、この地点において過去の人間は、現在と異なった地形環境の下で生活していたと考えられる。そのため、当時の地形環境を復原することによって、過去における人間の生活舞台を明らかにすることが必要となる。これに関しては、第3章第1節で述べることにする。(青木)





第3圖 遺跡周辺の地形等高線図 (等高線は20cm)

## 第2節 歴史的環境

### 兵庫県下の旧石器時代遺跡

兵庫県下で、これまでに知られている旧石器時代遺跡は130か所を数えるが、その分布状況、出土遺物には、かなり明瞭な地域性が認められる。遺跡の分布は、主要な河川に沿った段丘面・丘陵部に顕著であるが、特に瀬戸内海に面する播磨地域・六甲山南麓・日本海に注ぐ円山川上流の八木川流域は、遺跡分布の核地帯となっている。また、確認されている遺跡の分布密度は低いが、中国山地東部にあたる播磨地域北部・丹波地域も、地理的・地質的条件から、1地域として包括しうるのであろう。県下でこれまでに、発掘調査によって石器群の詳細が明らかにされた遺跡はごく少数であるが、本報告にあたってその概要をまとめつつ、七日市遺跡をめぐる歴史的環境の記述をおこないたい。

#### a. 瀬戸内海沿岸地域の遺跡

瀬戸内海に面する地域では、特に播磨地域を中心として、多数の遺跡が知られている。これは、灌漑用溜池が多数掘削されているという、土地利用状況にみあったものであり、事実、遺物の多くが、池底周辺からの採集資料である。

この地域での石材利用は、サヌカイトが圧倒的多数を占めており、この地域の河川で転石として採集されるチャートの利用頻度はきわめて低いことを特徴としている。従って石材に関する限り、大阪府の二上山・讃岐北部のサヌカイト産出地域との結びつきが強いといえよう。

瀬戸内海沿岸地域では、これまで発掘調査によってまとまった石器群が検出された例はきわめて少なく、瀬戸内海島嶼部で家島群島の太島から、1956年の発掘調査によって出土した、極小型ナイフ形石器の一群があげられるにすぎない(鎌木義昌 1957)。この他の各遺跡の採集資料には、国府型ナイフ形石器をはじめとして、多様なナイフ形石器がみられ、複数の石器群の混在が予想される。

#### b. 内陸部(中国山地帯)の遺跡

兵庫県の中央部を東西にのびる中国山地を中心とした内陸部では、従来後期旧石器時代の遺跡は知られていなかったが、1984～85年にかけて、近畿自動車道舞鶴線建設に伴う調査によって、多紀郡篠山町の板井・寺ヶ谷遺跡、同郡西紀町の西木之部遺跡で、相次いで旧石器が検出された。板井・寺ヶ谷遺跡・西木之部遺跡は、ともに篠山盆地の北端部に位置しており、多紀連山南麓の標高210m前後に立地している。

板井・寺ヶ谷遺跡では、A T下及びA Tと大山ホーキ火山灰層の間で、各々1枚の文化層が確認されている。板井・寺ヶ谷遺跡では、チャート原産地である丹波地域に位置しながら、A T下位では出土遺物の約40%がサヌカイトで占められ、A T上位では、ほぼすべての石器がサヌカイトを用いた石器群であったとされており、七日市遺跡でのありかたと同対照をみせている(山口卓也・久保弘幸・藤田 淳 1989)。A T下位では、ナイフ形石器・台形縁石器・局部磨製石斧・エンドスクレイパー等を含む約2400点の石器がブロックから出土し、これとともに礫群・集石土坑・配石等の遺構が検出されている。またA T上位からは、サヌカイト製角錐状石器を主体とする石器群約700点が出土している。

西木之部遺跡では、A T下位よりナイフ形石器1点が出土している。

三田市の溝口遺跡では、1980年の発掘調査によってこの地域に産出する鉄石英を用いた石器群が出土している。遺物包含層と広域火山灰層の間連は明らかではないが、6ブロックから1121点の遺物が出土

しており、縦長剥片を素材としたナイフ形石器4点が含まれている。また、打製石斧1点も出土しており、ナイフ形石器の諸特徴からA T以前に遡る石器群とされている(古代学協会 1988)。

中国山地帯内の遺跡としては、この他に播磨北部の神崎郡神崎町の福本遺跡・佐用郡佐用町の長尾・沖田遺跡があげられる。市川上流に位置する福本遺跡では、1986年の調査でチャッピングツール1点の他、縦長剥片とその核の接合資料を含む石器群が出土している。広域火山灰層との層位的関連は確認されていない。

長尾・沖田遺跡では、黒曜石製の縦長剥片を素材としたナイフ形石器1点が採集されている。これはいわゆる九州型ナイフ形石器と考えられる資料であり、今後、西日本の旧石器時代後期の石器群の動態を考えるうえで問題となる資料である。

#### c. 日本海側(但馬地域)の遺跡

日本海側では、これまでに大規模な行政発掘調査が少なかったため、旧石器時代遺跡は分布調査の密度が高い但馬西部の円山川水系上流部に集中している。

1969年～1971年に発掘調査された、養父郡関宮町の別宮家野遺跡では、縄文時代早期の遺物中にナイフ形石器4点が知られている。円山川支流の八木川流域では、数カ所の旧石器出土地が知られているが、石器群の詳細が明らかにされているものはない。

但馬地域ではこの他に、高原地帯に立地する遺跡が知られている。美方郡温泉町の畑ヶ平遺跡<sup>11</sup>(標高約1,000m)・同町の上山高原(標高約900m)・関宮町杉ヶ沢第13地点(標高約750m)等である。

畑ヶ平遺跡を除けばわずかな表面採集資料があるのみで、上山高原で安山岩製ナイフ形石器1点、杉ヶ沢第13地点で流紋岩製ナイフ形石器1点が採集されているにすぎないが、畑ヶ平遺跡では、ナイフ形石器・台形縁石器・エンドスクレイパー等が採集されており、その特殊な立地条件とともに、旧石器時代遺跡をめぐる生活環境を考えるうえで、興味深い位置を占めている。

#### d. 七日市遺跡の位置と環境

七日市遺跡は、中国山地東部の氷上低地に位置しており、ここは日本海に注ぐ由良川の上流部にあたるといえる。しかし、一方では約5 km西方は加古川上流部にあっており、いわゆる加古川-由良川の道に立地しているといえよう。こうした立地条件は、瀬戸内海沿岸部と日本海側の遺跡群の対比検討をおこなう上でも重要であり、広域火山灰層との層位的関連が明瞭な七日市遺跡を核として、広域の石器群の編年を考える可能性を提供している。また、板井・寺ヶ谷・西木之部両遺跡とともに、近年岡山県下で調査例が増加しつつある中国山地帯の石器群の地域性を考える資料となろう。

また七日市遺跡は、サヌカイトの産出地である二上山・金山などから、100 kmないしそれに近い距離にありながら、少量とはいえサヌカイトを出土している。これは、旧石器時代における石材の移動を考えるうえで重要であるのみならず、集団の移動、ひいては旧石器時代における生活形態の分析にとっても、取り組むべき課題といえよう。

中国山地帯では瀬戸内沿岸地域と比較して、後期更新世の堆積物の遺存状況が良好であることから、今後、特にサヌカイト石器群との編年関係の確立が期待される。(久保)

注

1. 田中真吾・野村亮太郎・井上 茂 (1986) では、本稿で提示した地形分類図 (第2図) の各地形のうち、遺跡の南方に分布している崖面および土流扇状地を麓層面と呼び、その形成について報告している。
2. 高松龍暉氏の御教示による。

No.	遺跡名	主な出土遺物	文献
1	七日市	ナイフ・小型部分加工石器・刃部磨製石斧	山口・久保・藤田 1988 他
2	板井・寺ヶ谷	ナイフ・刃部磨製石斧・角錐状石器	山口・久保・藤田 1988 他
3	西木之部	ナイフ	山口・久保・藤田 1987 他
4	溝口	ナイフ・石斧	古代学協会 1988
5	太島	ナイフ	鎌木 1957
6	長尾・沖田	ナイフ (黒曜石製)	
7	福本	チョッピングツール・石核	
8	畑ヶ平	ナイフ・台形様石器	高松龍暉氏の御教示による。
9	上山	ナイフ	高松龍暉氏の御教示による。
10	別宮家野	ナイフ	高松・山口 1985
11	杉ヶ沢第13地点	ナイフ	田中 徹氏の御教示による。
12	七ツ池	ナイフ・石核	佐藤 1980
13	御着城	ナイフ・角錐状石器	秋枝 1980
14	山之上	ナイフ・翼状剥片・石核	藤原・浅原 1980
15	西島	ナイフ・石核	春成秀爾 1980

第2表 主要遺跡地名表



第4図 県下の旧石器時代遺跡の分布 (等高線は100, 200m)

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

七日市遺跡は、兵庫県の東北部に位置する水上郡春日町の中央を占める盆地の西側を流れる竹田川左岸に位置し、七日市を中心に棚原、野村にまたがって所在する旧石器時代から平安時代にあたる複合遺跡である。

本遺跡の存在が知られたのは、さして古いことではなく昭和55年12月のことで、大阪経済法科大学の村川行弘氏を団長とする近畿自動車道舞鶴線・春日インターチェンジ、及びインター進入路付近の農道、及び排水路敷設に伴う遺跡確認調査の際に発見された。この確認調査で弥生時代の遺構・遺物が検出されたことにより、七日市を中心とした地域に遺跡が存在することが初めて知られるようになった。

また、たまたまこの確認調査中に、調査地の北側と国道175号線との間の隣接した地域で圃場整備事業の工事が進行中であり、工事現場に大量の土器片が散乱しているのが発見された。このような状況から、急拠、関係機関で協議がおこなわれ、村川氏を中心として調査団が組織され、昭和56年1月から3月にかけて緊急調査が行われた。この調査は工事の間をぬっての調査であったことから、期間、経費に様々な制約があったが、弥生時代から平安時代にかけての大規模な集落跡であることが明らかとなり、県下最大級の遺跡としてマスコミにも大きく取り上げられ、一躍、著名な遺跡となった。この調査成果については、『春日七日市遺跡 一確認調査報告書』として公開されており、弥生時代中期から古墳時代初期の竪穴住居跡、方形周溝墓、土壕、溝や、奈良時代から平安時代初期にかけての掘立柱建物などの遺構が多量の遺物と共に検出されている。

しかし、昭和55年以前にはこの地に遺跡が存在することは、地元でもあまり注意されていなかったらしく、兵庫県教育委員会発行の『遺跡分布地図及び地名表』には記載されていないし、昭和57年に文化庁から発行された『全国遺跡地図 兵庫県』に初めて「七日市・野上野遺跡」として記載されたが、プロットされている地点は遺跡の範囲からかなり東にあり、遺跡が発見された昭和55～56年以降でも、当遺跡についての情報は正確に伝えられていない状況にあったようである。

ちなみに当遺跡付近では、それ以前には僅かに銅剣形石剣の出土地として野村遺跡が知られていただけであったが、昭和56年11月には遺跡の南東山麓斜面で銅鐻2個が発見されたことにより、それらの出土地と七日市遺跡との関連が注目されるようになった。

その後、周辺部で圃場整備事業に伴う発掘調査が水上郡教育委員会によって継続的に実施され、遺跡の範囲がほぼ把握できるようになった。残念ながらこの水上郡教育委員会の実施した発掘調査の報告は行われていないので、詳細は明らかでないが、当初考えられていた以上に遺跡の規模は大きくなることは確実で、少なくとも南北約500m、東西約400m程度の広がりをもつと推定されるようになった。また、各地点で検出された遺構や遺物の中には、遺跡の性格を考えるうえで重要なものがあるようである。

今回の調査の対象となったインターチェンジ進入路部分は、先の遺跡発見の契機となった数箇所の確認調査と、周辺で実施された圃場整備事業に伴う発掘調査地点のほぼ中央にあたり、遺跡のほぼ中心部分を横断するとみられたことから、兵庫県教育委員会が近畿自動車道舞鶴線建設に伴って各地点で実施した確認調査は行われず、主としてインターチェンジ、及び本線部分の確認調査が実施された。まず、

昭和57年11～12月にかけて七日市遺跡の東方への範囲確認調査として36箇所でグリッド調査が行われた。

この調査では明確な遺構は検出されなかったが、わずかに自然流路状の落ち込みが認められたため、昭和58年12月～昭和59年1月にかけて、再度トレンチ調査によって遺跡存在の有無を確認する目的で、第2次確認調査が実施されたが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

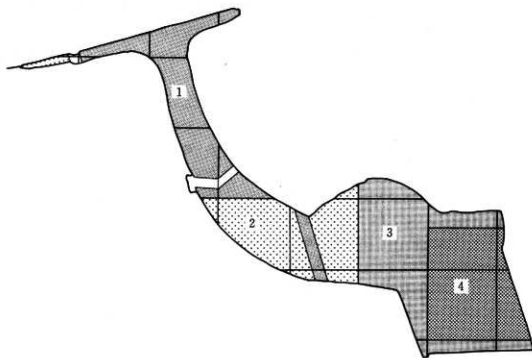
また、昭和59年3月には、さらに全面調査の範囲を限定するため、先の確認調査地点の西側で16箇所のグリッドを設定して確認調査を行ったが、西端で多量の遺物が出土した他は、顕著な遺構・遺物がみられなかった。

以上の確認調査の結果、近畿自動車道舞鶴線建設予定地内における遺跡の西限が確定され、全面調査は国道175号線との取付き部から、インターチェンジにかかる料金所付近までの約17,000㎡について実施することになった。

全面調査は、供用開始時期の関係から昭和59年度中に調査を終了する必要があったため、これまで兵庫県教育委員会が行っていた地元作業員を直接雇用する通常の調査方法では、調査期間、作業員の大量雇用等の問題で困難であると考えられたため、土木業者に作業を委託し、作業員の大量確保を計り、6月初旬から発掘調査を開始した。

なお、4～5月には土砂搬出用の仮設道路の敷設、調査地内の基準点測量等を行い、調査開始に向けての準備作業を行った。

(井守)



第5図 調査工区区分図





## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 確認調査

七日市遺跡では、昭和56年（1981）の圃場整備に伴う発掘調査の際に、弥生時代以降の遺物包含層および遺構の埋土中に混在して、エンドスクレイパー・石核・剥片など数十点のチャート製旧石器が出土したことが知られていた。今回の調査でも、当初から旧石器時代の遺物の出土をある程度予測していたが、弥生時代以降の遺構面の調査にともなって、広い範囲で柱穴・竪穴住居跡の床面下層等から旧石器が出土し、旧石器時代の遺構面が調査区内に広範囲に分布する可能性が考慮された。このため急きょ調査方針を変更し、弥生時代以降の調査完了を待って、坪掘りによる確認調査を実施することになった。

確認調査は、弥生時代以降の遺構面の調査に使用した、調査区の地区割り（50m方眼）と座標系を基本として、新たに10mの方眼で小地区を設定した（第10図）。小地区は、東西にa～eのアルファベット、南北に1～5の数字を付して、その交点の1方眼をa-1～e-5と呼称することとし、B～V地区でそれぞれ、たとえばB-a-1のように表記した。

確認調査は、原則として各小地区に2m×2mのテストピットを1か所ずつと、トレンチを併用して実施した。テストピットは、小地区の北東隅に設定することを原則としたが、調査範囲の制限から、位置には若干の移動がある。また、遺物の出土状況等によって、適宜テストピットの数を増減して、合計16か所を調査した。M地区とN地区では、土層確認もかねて、重機による掘削を併用しつつ、トレンチによる確認調査もあわせておこなった。トレンチによる調査面積は260㎡である。

出土遺物は可能な限り出土地点と標高の記録を行ったのち取り上げた。

以上のような確認調査の結果、調査地区の北西部約6,000㎡の範囲でA-T火山灰層の下位の灰白色シルト層から、旧石器時代の遺物群が良好な状態で検出されたため、この範囲において、旧石器時代遺跡の全面調査を実施することにした（第8図）。また、調査区の東南隅でも、A-T火山灰層は残存していなかったものの小範囲で旧石器時代の遺物ブロックが確認され、全面調査の範囲に含められた。このため、当初の調査計画で1年間としていた調査期間では、調査完了が不可能となったため、調査期間を大幅に延長することになった。

なお、N地区北部・O地区西端の一部でも、旧石器時代の遺構面が存在するものと思われたが、当該部分には奈良時代～平安時代の大型独立柱建物群が検出されていたため、埋没保存することになり旧石器時代遺跡の調査範囲から除外した。

### 2. 全面調査

確認調査の結果、大規模な旧石器時代遺跡の存在が明らかになったことから、調査計画を大幅に変更し、上層の弥生～平安時代遺跡の調査終了地区から順次旧石器時代遺跡の調査を開始した。全面調査は、昭和59年（1984）10月3日から開始し、昭和60年（1985）10月9日に終了した。

調査はすべて人力によって掘削をおこない、出土した遺物は、国土座標による平面位置と出土レベル（TP標高）の三次元記録をおこなった。記録方法は、当初は従来考古学的調査で用いられてきた、遺り方による実測方法をとっていたが、調査が広範囲にわたること、出土遺物も多数にのぼることが予測されたことから、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの伊東太作氏の指導の下、コンピューターと光波測距・測角機による測量・図化システムをもちいて、全面調査の大部分でこれを使用した。

全面調査では、調査範囲が広く、また遺物を包含する地層が水成地積物であることから、調査区全域

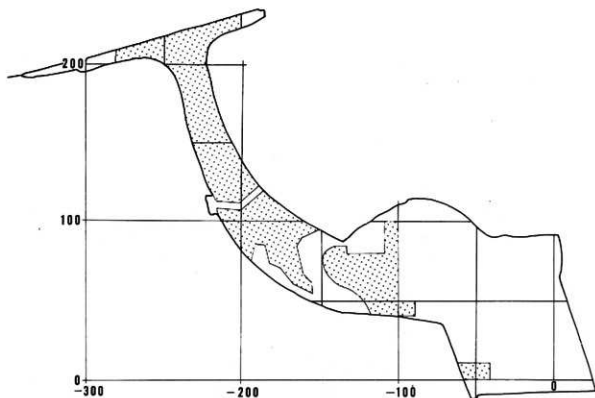
にわたる層序の対比が困難であることが予想されたため、まず、幅1mのトレンチを先行して掘削し、地層の確認をおこないつつ調査をおこなった。

調査は、調査区北部のB・C地区からおこない、順次南東へと範囲を拡大した。全面調査の範囲は第8図に示したとおりである。

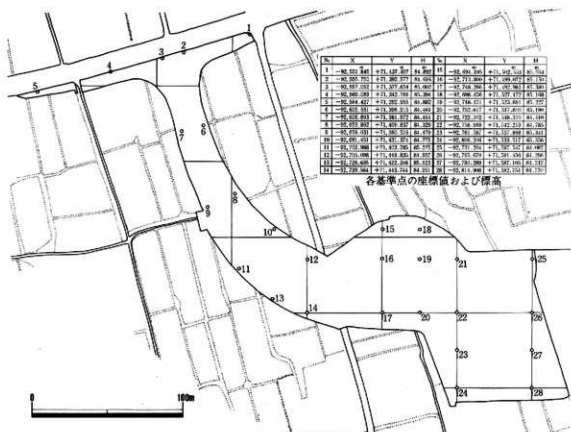
調査にあたっては、神戸市教育研究所(当時)の前田保夫氏をはじめとする自然科学各分野の先生方のご協力を受け、自然科学的な調査を実施した。

現地における発掘調査と平行して、数回にわたって共同調査を実施した自然科学的分析は、微地形・花粉分析・C<sup>14</sup>年代測定・植物遺体・熱残留磁気・火山灰である。また、調査終了後にサヌカイトの原産地分析、石材の同定を実施した。なお各先生方には本報告書付篇に分析の詳細を御報告いただいている。

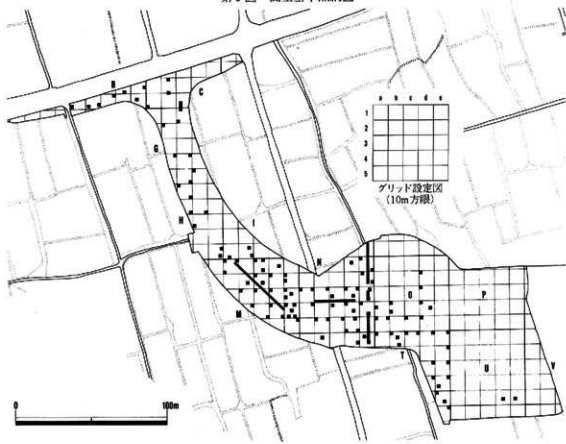
また、これらの自然科学的調査とあわせて、遺跡の立地する地形面の形成に関する資料を得るため、調査区内の4か所でボーリング探査(コアサンプルの採取)をおこなった。(久保)



第8図 旧石器全面調査の範囲



第9図 測量基準点網図



第10図 確認調査グリッド・トレンチ配置図

## 第3章 層序と遺構、遺物の検出状況

### 第1節 遺跡における層序と地形環境

人間は、過去刻々と移り変わった自然環境の中において、さまざまな地形からなる当時の地表を生活の舞台としてきた。旧石器時代においても、人々は変化する地形を利用しつつ自らの生活適地を選び、活動していたと考えられる。このような意味において、過去における人間の営みを理解するには地形環境を明らかにすることが必要であり、それは人間をとりまく自然環境をとらえるうえでの重要な要素となっている。そこで、本稿では七日市遺跡における微地形の変化を明らかにし、これと人間生活の痕跡である旧石器の分布との対応関係を考察することによって、地形環境を復原してみたい。ここでは、まず微地形の分布と堆積物の層序ならびに特徴を記載し、つぎにこれらを基にして復原された地形環境について述べてみることにする。

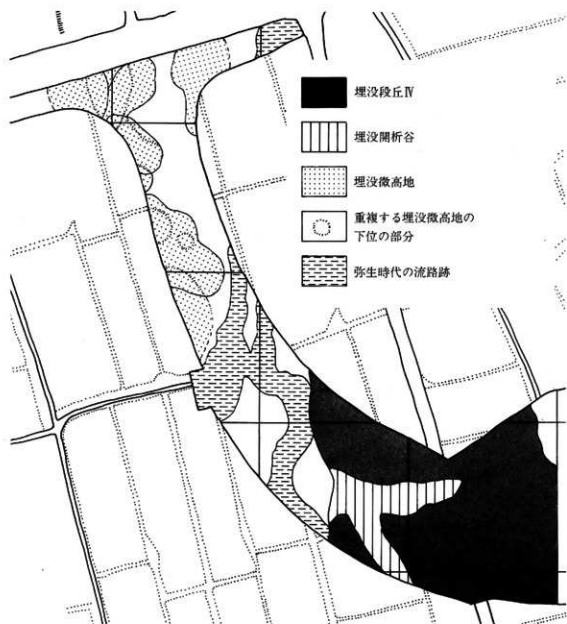
#### 1. 微地形の分布

七日市遺跡は、扇状地、埋没段丘Ⅳおよび段丘Ⅴにまたがって立地している（第1章第1節参照）。旧石器時代の遺物は、これらの地形のうち扇状地および埋没段丘Ⅳが分布する遺跡の西部（B区～M区西半分）と中央部（M区東半分～N区）とで認められる。この時代の遺物を包含する層の上位には絵巻Tn火山灰（竹村恵二 1985）（以下、AT火山灰と呼ぶ）がみられ、さらにその上位には弥生時代および奈良時代の遺物を含む黒ボクが堆積している。これらの層の基底にみられる微起伏は、それより下位にみられる微地形に影響されてつくられており、AT火山灰の基底および弥生時代の遺構検出面の微起伏を詳細に検討することによって、地下に埋没している微地形を明らかにすることができると考えられる。そこで、AT火山灰下底の20cm等高線図（第3図）と弥生時代の遺構検出面を撮影した800分の1および400分の1空中写真ならびに発掘によって得られたデータを基にして、埋没段丘Ⅳおよび扇状地がみられる遺跡の中央部と西部における旧石器時代頃の微地形を復原してみた（第11図）。

これによると、旧石器時代において人間が生活していた頃の微地形は、段丘Ⅳが埋没している遺跡の中央部と扇状地がみられる西部とで異なっていることがわかる。遺跡の中央部は、西部に比べて全体的にやや高く、埋没している開析谷がM区にみられる埋没段丘Ⅳと扇状地の境界部から東および南へ延びている。しかし、これらを除く埋没段丘面は30cm程度の微起伏が緩やかにみられるものの、ほぼ平坦である。これに対して、西部は比較的起伏に富んでおり、周辺よりおよそ数10cm高い埋没微高地がB区、C区、G区およびG区からH区にかけて点々と認められる。このように、七日市遺跡において旧石器時代頃は、遺跡の中央部が全体的に高く、西部に小規模な微高地が分布するという微地形の様相を呈していたのである。なお、西部のH区南部、I区およびM区付近には弥生時代の自然流路跡が西南から東北方へ帯状に分布しており、ここでは旧石器時代の微起伏が侵食されたため、当時の微地形は観察できない。

#### 2. 層序と堆積物の特徴

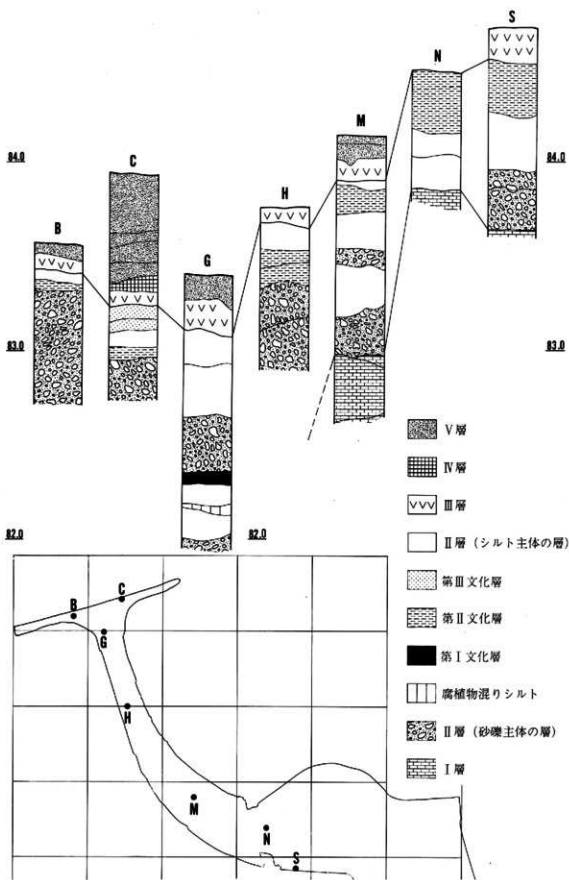
本遺跡に分布する堆積物については、先行トレンチ断面および南北、東西方向に10m間隔で設定されたセクション断面において、その色調や粒度、堆積構造などを観察した。その結果、この遺跡の堆積物は合計23層に分けられ、本稿では最下位に堆積している褐色の砂礫層をI層、それより上位でAT火



第11図 遺跡における微地形の分布

山灰までをⅡ層、A T火山灰をⅢ層、これの上位にみられる灰白色の砂混じりシルトをⅣ層、黒ボクをⅤ層そして耕土をⅥ層とし、さらにⅡ層にあたる17の各層をそれぞれ下位のものからⅡ-1層、Ⅱ-2層…Ⅱ-17層と呼ぶことにする。なお、これらの堆積物の分布と層序は第3表に、また各層の概要については第12図およびパネルダイアグラム（付図3・4）に示したとおりである。

最下位に認められるⅠ層は、主に径1~10cmの歪角および歪円礫からなる砂礫層であり、ところによってはシルトが混入する。この層は、一般に褐灰色~暗褐灰色であるが、M区では鉄分の集積が激しく赤褐色を呈する。本層は、M区の東半分とN区に分布しており、埋没段丘Ⅳを構成する礫層と考えられる。この砂礫層は、M区の中央部およびN区の北東端で侵食されており、そこには崖がほぼ南北方向に埋没している。埋没段丘Ⅳには、発掘地域のM区中央部から東方および南方に向けて2本の埋没開析谷が刻まれている。これらの開析谷は、埋没段丘面より30~60cm深く、それぞれ東方および南方へ浅くな



	B 区	C 区	G 区	H 区	M 区	N 区	備 考
VI 層	赫土	赫土	赫土	赫土	赫土	赫土	
V 層	黒ボク	黒ボク	黒ボク	黒ボク	黒ボク	黒ボク	
IV 層		灰白色 砂混じりシルト	灰白色 砂混じりシルト			細灰色 砂混じりシルト	
III 層	A.T.火山灰	A.T.火山灰	A.T.火山灰	A.T.火山灰	A.T.火山灰	A.T.火山灰	
II-17層		灰白色 シルト*	灰白色 シルト				
16層		灰白色 砂混じりシルト	灰白色 砂混じりシルト				
15層		灰白色 砂質シルト	灰白色 砂質シルト				
14層		灰白色 礫混じり砂					
13層		灰白色 砂質シルト	灰白色 砂混じりシルト	灰白色 砂混じりシルト			
12層		灰白色 砂混じりシルト	灰白色 砂質シルト	灰白色 シルト	灰白色 シルト		
11層		灰色 シルト混じり砂礫	灰色 シルト混じり砂礫				
10層		灰白色 砂質シルト*	灰白色 砂混じりシルト*	黄灰白色 砂混じりシルト*	黄灰白色 砂混じりシルト*	細灰色 砂混じりシルト*	
9層			灰白色 砂質シルト*				
8層						細灰色 シルト質砂	
7層						細灰色 砂質シルト	
6層	暗褐色 砂礫	灰白色 シルト混じり砂礫					
5層	暗灰色 砂礫	暗灰色 砂礫	暗灰色 砂礫				
4層			灰色 シルト混じり砂礫	灰色 シルト混じり砂礫	灰色 シルト混じり砂礫	細灰色 シルト混じり砂礫	
3層		灰白色 砂混じりシルト*	灰白色 砂混じりシルト			淡褐色 砂質シルト	
2層		紫灰色 礫質シルト**					
1層	暗褐色 砂礫	暗褐色 砂礫	暗褐色 砂礫	細灰色 砂礫**	暗灰色 砂礫	暗褐色 砂礫	
I 層					赤褐色 シルト混じり砂礫	暗褐色 砂礫	
							第七文化層 23,970±200 年B.P. 32,600±1,200年B.P.

第3表 七日市遺跡における地層物の層序 (\*・)は旧石器が出土した地層物, (\*\*・)は<sup>14</sup>C年代測定資料を採取した地層物, (\*\*\*・)は不整合)

る。

1層と不整合に接するII-1層は、暗褐色の砂礫層であり、1~8cmの径をもつ亜角~亜円礫からなる。この層は、埋没段丘IV崖下の発掘地域全域に分布し、その上面は南から北に向かって緩やかに高度を下げる。しかし、上面には微細な起伏がみられ、比高30~70cm以上の埋没微高地が5つ認められる。M区において、同層にはレンズ状にシルトが挟まれており、そこに入っていた木片の $^{14}\text{C}$ 年代測定値は $32,600^{+1,200}_{-1,100}$ 年B.P. (松本英二 1985) である。この上位のII-2層は、暗褐色の腐植質シルト層であり、C区の北西部すなわち埋没微高地のすぐ横にみられる低所に局部的に分布している。この層からは、 $23,970^{+460}_{-440}$ 年B.P. (松本英二 1985) の $^{14}\text{C}$ 年代測定値が得られている。II-3層は、埋没段丘崖下にあたるB区、C区、G区と、M区、N区の埋没開析谷中、埋没段丘の凹地およびN区の埋没段丘崖下に認められる。この層は、主に灰白色を呈する砂混じりシルトからなり、M区およびN区においては他の地区より砂をやや多く含む砂質シルトに層相変化する。同層は、II-1層によって構成されるG区の埋没微高地を被覆しており、この微高地を埋積している。C区においては、埋没微高地東側の低所にみられるこの層から、石器が出土している。

灰色のシルト混じり砂礫層であるII-4層は、G区の南半部からH区の北部にかけてと、M区の埋没開析谷中、N区の埋没段丘崖下および埋没段丘面の凹地に分布している。礫は、1~8cmの径をもち、分布範囲の縁辺ではグラニウルク粗砂に変化する。この層は、II-1層からなるH区の埋没微高地を被覆しており、この微高地の北側にあたるG区からH区にかけてさらに厚く堆積している。この部分における、同層の上面はおおよそ70cm高くなっており、比較的大きな面積をもつ埋没微高地をなしている。この層の上面において、G区からH区にかけては埋没微高地が認められ、それは比高おおよそ70cmで、比較的大きな面積を持っている。II-5層は、この微高地より北側すなわちC区とG区の北半部にみられる。本層は、主に径4cm以下の砂礫によって構成されており、暗褐色を呈している。この砂礫層の堆積によって、G区の北西部からC区の西部にかけてとC区の東部には埋没微高地が形成され、これらは周辺より40~50cm高い。II-5層の上位に位置するII-6層は、暗褐色を呈し、1~6cmの径をもつ礫と粗砂からなる。この層は、B区およびC区の西半部に分布しており、C区ではシルトが若干混入する。同層はC区の西部においてII-5層上面につくられた埋没微高地を覆うとともに、この微高地のすぐ西側に厚く堆積しており、そこが埋没微高地となっている。

II-7層および8層は、M区とN区にのみみられ、前者が砂質シルトからなるのに対して、後者はシルト質砂によって構成されている。これらの各層は、M区では埋没開析谷中に、またN区においては埋没段丘面上の凹地と埋没段丘崖下に認められる。この上位には、II-9層と10層が堆積しており、それぞれ灰白色を呈する砂質シルトおよび砂混じりシルトからなる。これらの各層の分布範囲については、9層がG区、H区およびM区に、10層がB区、C区、G区、H区、M区およびN区と広範囲にわたっている。この両層は、これまでに形成された埋没微高地のうち3つのものを覆って堆積しており、B区とC区の埋没微高地には10層が、G区からH区にかけてのそれには9層と10層がそれぞれ認められる。これらの堆積によって、それぞれの埋没微高地の比高はおおよそ80~100cmにまで大きくなっている。また、M区とN区においては、10層が埋没開析谷および埋没段丘IVの全面を被覆しており、段丘IVを埋没させるとともに、M区の東半部およびN区を平坦化している。このような埋没微高地および埋没段丘上に分布する9層、10層には、石器が含まれている。

II-11層は、灰色のシルト質砂礫層である。この層は、C区とG区における埋没微高地間の低所およ



び埋没微高地の斜面に局部的に分布する。これに対して、Ⅱ-12層と13層はB区、C区、G区、H区およびM区にわたる広範囲に認められる。この2層は、主として灰白色の砂混じりシルトからなるものの、12層は南のH区とM区で、また13層は北のB区でシルトに変化する。これらの層は、Ⅱ-4層または5層からなるG区の2つの埋没微高地を被覆している。Ⅱ-14層~16層は、C区およびG区の北半部に分布している。14層は、径1cm以下の礫を混じえる灰白色の砂層であり、他方15層と16層はそれぞれ灰白色の砂質シルトおよび砂混じりシルトによって構成されている。これらの各層は、B区とC区に分布する埋没微高地間の低所を埋積して、B区とC区をほぼ平坦にしている。さらに、Ⅱ-17層は灰白色のシルト層であり、C区にのみ分布している。本層は、ほぼ埋積されたC区の埋没微高地を覆って堆積しており、そこから石器が出土している。

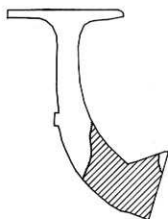
Ⅱ層の上位には、A T火山灰(Ⅲ層)が認められる。この火山灰は、Ⅱ層上に断片的にみられる凹地に堆積しており、発掘地域全域に点々と分布している。C区、G区およびN区においては、A T火山灰の上位にⅣ層が認められる。この層は、灰白色の砂混じりシルトからなっており、層厚がおよそ10cmと薄い。これらのⅢ層およびⅣ層を覆って、発掘地域の全域には黒ボクがみられる。黒ボクは、下位の層と漸移して堆積しており、弥生時代後期~奈良時代の土器片を包含している。そして、黒ボクの上位には耕土(Ⅵ層)が被覆している。

### 3. 地形環境について

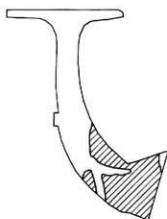
ここでは、これまでに述べてきた微地形ならびに堆積物の諸特徴などに基づいて、七日市遺跡における地形環境の復原を試みた(第13図と第14図)。

本遺跡では、シルト混じり砂礫(Ⅰ層)が堆積した後、これらの堆積物が下刻され、段丘Ⅳが形成された。これによって、M区の中央部およびN区の北東端に崖がつくられた(ステージ1)。その後、M区からN区にかけては段丘面が開析され、2本の小規模な谷が形成された(ステージ2)。段丘Ⅳの現地表面下7.75~7.80mに認められた木片からは、42,200<sup>+3,600</sup>/<sub>-2,500</sub>年B.P.(松本英二 1985)の<sup>14</sup>C年代測定値が得られており、これとⅡ-1層中に挟まれていた木片の<sup>14</sup>C年代とを考え合わせると、段丘Ⅳおよび開析谷の形成期は42,000年前から32,000年前の間であったと判断される。

およそ32,000年前頃には、段丘崖下に砂礫(Ⅱ-1層)が堆積し、段丘Ⅳの崖の比高をほとんどなくするとともに、B区、C区、G区およびH区にいくつかの微高地がつくられた(ステージ3)。G区の北西部では、これらの微高地間の凹地に腐植質シルト(Ⅱ-2層)が局部的に生成された。このシルト層を覆って、B区、C区、G区およびM区、N区の開析谷中では砂混じりシルト(Ⅱ-3層)が堆積した。これによって、G区以北に分布していた微高地の多くは埋没し、開析谷底と段丘Ⅳ面との比高は減少した(ステージ4)。G区の北西部では、微高地斜面下の低所に堆積した同層に石器が含まれており、これはこの時期に人間が活動していたことを示唆している。Ⅱ-3層が堆積した後、G区の南半部からH区にかけてシルト混じり砂礫(Ⅱ-4層)が抽出された。この層の堆積によって、Ⅱ-1層の堆積期以降残存していたH区の微高地は埋没し、新たに比較的大規模な微高地がG区からH区にかけて出現した(ステージ5)。つづいて、この微高地より北側に砂礫(Ⅱ-5層)が堆積し、C区およびG区に2つの微高地が形成された(ステージ6)。その後もC区の西部からB区にかけて砂礫の堆積は続き、その堆積範囲に分布していた微高地が埋積されるとともに、新しい微高地がB区につくられた(ステージ7)。このように、Ⅱ-6層堆積期までは砂礫の堆積が盛んであり、これに構成された微高地が活発に形成された。



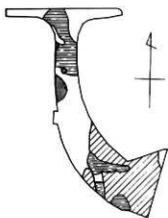
ステージ1  
(段丘IV形成期)



ステージ2  
(間折谷形成期)



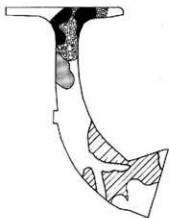
ステージ3  
(II-1層堆積期)



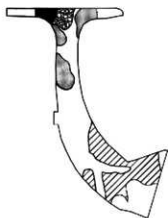
ステージ4  
(II-2, 3層堆積期)



ステージ5  
(II-4層堆積期)



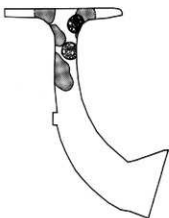
ステージ6  
(II-5層堆積期)



ステージ7  
(II-6層堆積期)

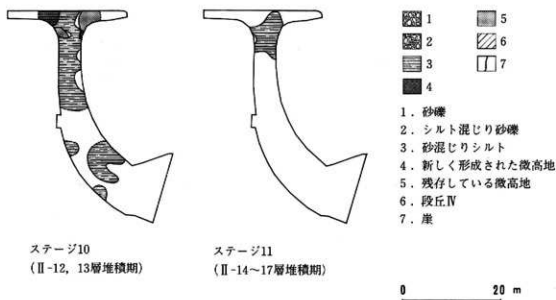


ステージ8  
(II-7~10層堆積期)



ステージ9  
(II-11層堆積期)

第13-1図 古地理の復元図

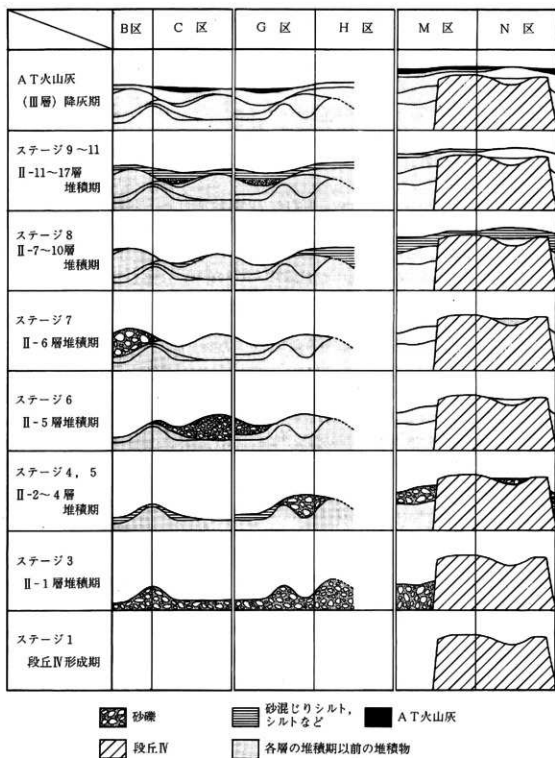


第13-2図 古地理の復原図

Ⅱ-6層の堆積後には、まず砂質シルト(Ⅱ-7層)およびシルト質砂(Ⅱ-8層)が、段丘Ⅳ面にみられる凹地と開析谷中、N区の段丘崖下に堆積した。ついで、砂質シルト(Ⅱ-9層)がG区からH区にかけて、さらに砂混じりシルト(Ⅱ-10層)が発掘地域の広い範囲にわたって堆積するに至った。これらの各層の堆積によって、段丘Ⅳは埋没するとともに、M区およびN区の微起伏が平坦化され、また段丘崖下にみられたB区、C区およびG区からH区にかけての微高地は、細粒堆積物に被覆された。しかし、Ⅱ-9層および10層は微高地上で厚く堆積したため、その比高は以前にも増して大きくなった(ステージ8)。このような3つの微高地ならびに段丘Ⅳ上におけるⅡ-9層、10層中には石器が認められ、両層が堆積した頃にこれらの微地形上で人間が活動していたと考えられる。

その後、シルト混じり砂礫(Ⅱ-11層)が微高地間の低所や微高地の斜面に堆積し、微高地はその比高を減じた(ステージ9)。そして、これに引き続いて堆積した砂混じりシルト(Ⅱ-12, 13層)が、C区以外の微高地を被覆した。この結果、両層はB区の微高地上では厚く堆積し、その比高を増大させたものの、G区とH区の2つの微高地の大部分を埋没させた(ステージ10)。この時期以降、B区とC区に残っていた微高地間の低所に礫混じり砂(Ⅱ-14層)、砂質シルト(Ⅱ-15層)および砂混じりシルト(Ⅱ-16層)が次々と堆積し、この低所を埋積すると同時にB区、C区、G区の起伏を小さくしていった。そして、シルト(Ⅱ-17層)がC区の微高地を埋没させるようにその上を被覆した(ステージ11)。しかしながら、Ⅱ-17層が堆積した頃には微高地がまだわずかに高く、17層中に石器が出土しているC区においては、このような微高地上で人間が活動していたと考えられる。

Ⅱ層の堆積後、その上面にA-T火山灰(Ⅲ層)が降灰した。この火山灰は、降灰した後に侵食作用をうけたため、わずかな起伏のみ残ったⅡ層上面の凹地にのみ残存した。同火山灰の噴出年代は24,720±290年B.P.と推定されており(松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 1987)、Ⅱ層の堆積ならびにそれに伴う微地形の変化は、32,000年前頃から24,000年前頃にかけて行われたと考えられる。24,000年前頃以降には、C区、G区およびN区に砂混じりシルト(Ⅳ層)が堆積し、ついでこの層とA-T火山灰



第14図 埋没微地形の模式的な形成過程

とを覆って黒ボク（V層）が生成された。

以上のように、本遺跡においては中央部で段丘IVおよび開析谷が形成された後、これらが平坦化され埋没したという地形変化の過程をたどった。これに対して、西部における微地形の変化は、まず砂礫の

堆積に伴って微高地がつくられ、ついで微高地の埋没と形成が繰り返された後、最終的にこれらが埋積されるといったものであった。この一連の変化の中において、人間は中央部でわずかに高く、ほぼ平坦になった段丘上で、また西部においては消長の激しい微高地の上で主に活動を行った。このように、七日市遺跡では段丘や微高地といった小高い場所を利用して、旧石器時代の人間が活動しており、人間の生活は地形環境と密接に関係していたと考えられるのである。(青木)

## 第2節 遺構、遺物の検出状況

前節において、七日市遺跡の堆積物は下層からⅠ層～Ⅴ層に分類された。旧石器時代の遺物はすべて段丘礫層(Ⅰ層)とA T(Ⅲ層)に挟まれたⅡ層(Ⅱ-3層、Ⅱ-9・10層、Ⅱ-17層)から出土している。ここで注意すべきことは、パネルダイアグラムを見れば明らかに(付図3、4)、七日市遺跡にみられる層は、必ずしも遺跡全面に広がりをもつ1枚の層ではないということである。したがって、各層を降下火山灰であるA Tのような層と同質に扱うことはできない。ここでは、遺物の分布と各々の層の関係を吟味しながら文化層の設定を行いたい。

Ⅱ-3層はB区～N区にわたって広域に認められるものの、遺物が出土しているのはG-a-1区に限定される。至近に存在するB区のⅡ-9・10層の石器とは礫層を含む3枚の層を間層にもち、1つの文化層とすることが可能である。これを第Ⅰ文化層とする。

Ⅱ-9・10層についてもⅡ-3層と同様にB区～T区にわたって広域に認められる。遺物はいくつかの群に分かれて、B区～T区のすべての地区に分布する。それぞれの地区のⅡ-9・10層はほとんどつながりがなく、すべての群を同時期のものとするには十分な検討が必要である。しかし、幸いにも後述(第5章第4節3)のように、いくつかの群の間でわずかながらも接合資料、同一母岩資料をみとめることができた。また、各群の石器の内容にも際立った差異は認められず1つの文化層としてとらえることが可能であると判断される。したがって、これを第Ⅱ文化層とする。

Ⅱ-17層はC区のみ分布し、遺物の分布もC区にほぼ限定される。ここではC区のⅡ-10層出土の遺物(第Ⅱ文化層)との関係が問題となる。Ⅱ-17層はC区のⅡ-10層とはわずか10cmほどの層厚とはいえ砂礫層であるⅡ-11層を間層にもつ。Ⅱ-17層出土の遺物がC-b-4区、C-e-4区中央部を中心に分布するのに対して、C区のⅡ-10層出土の遺物の分布はC-e-4区～C-d-4区に中心がある。また、石器の内容も石材の特徴、石器組成などにおいてC区のⅡ-10層出土の遺物とは明確な差異がある。こうしたことからこれを1つの文化層ととらえることが可能である。これを第Ⅲ文化層とする。

このように、七日市遺跡では第Ⅰ文化層～第Ⅲ文化層の3つの文化層を層位的に分離することができる。(藤田)

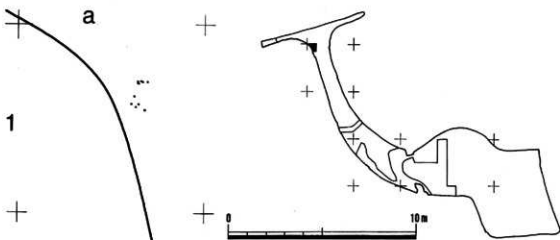
## 第4章 第I文化層

### 第1節 概要

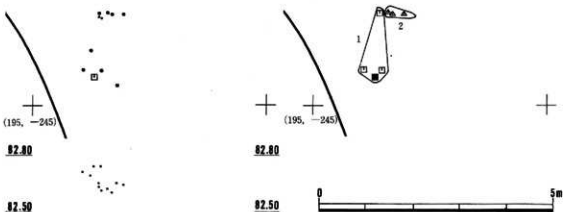
第I文化層としてとらえられるものはG-a-1区の中央付近で検出されている。石器ブロック1基のみで構成され、配石や礫群はともなわない。G-a-1区は約半分が調査対象外にあたるが、石器ブロックは調査区際から約1m離れて検出されているため、ブロックとしては完結しているものと思われる。

G-a-1区周辺のAT火山灰層の直下の微地形は小さな谷状となっており、このためATも約20cmと厚く堆積している。遺物は砂礫層に挟まれたシルト層中から検出されており、AT下約75cmの標高86.20m～87.20mの範囲に分布する。石器ブロックの包含される層下約15cmのところまで腐植物を含む暗灰色シルト層が約0.25mの範囲で検出され、後述の花粉分析と<sup>14</sup>C年代測定資料として採取した。

第I文化層では11点の石器が出土している。その組成は第4表に示すとおりである。石材はすべてチャートである。器種組成では石核1点と刮片類で構成される。製品がまったく含まれておらず、石器数も少ないため、石器群の内容は不明である。 (藤田)



第15図 第I文化層石器分布図



第16図 第I文化層器種別分布図、母岩別分布図

## 第2節 遺構（石器ブロック）

### 第1ブロック

1.5m×0.8mの規模をもつ。半円状に比較的こじんまりとまとまっている。北側に6点、南側に5点が50cmほどの距離をおいて分布している。構成点数は11点で石核1点以外は剥片類である。母岩別資料は2例（7点）を確認した。その構成は第5表に示すとおりである。（藤田）

## 第3節 遺物

遺物の量が少なく、石器群の特徴を示すものは見当たらない。

### 1. 石核（第17図）

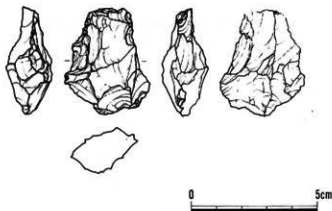
チャート製の石核である。打面転移を頻繁に繰り返した結果、両面加工石器のような形態を呈している。（藤田）

総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	R	F	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	2	1	11	0	0
																87.1	0	0

第4表 第I文化層の石器組成

母岩No	石 材	特 徴	種 成							総重量 (g)	挿 番 号	分布ブロック
			総数	製品	UF	石核	剥片	砕片	チップ			
235	チャート	灰色泥質	4			1	3			69.8	16	
236	チャート	灰色泥質	3				3			14.0	16	

第5表 第I文化層の母岩別資料



第17図 第I文化層の石器

## 第5章 第Ⅱ文化層

### 第1節 概要

第Ⅱ文化層からは、石器総点数1982点、礫総数 207点が出土し、礫群3基、配石11基、石器ブロック42基より構成される。これらは今回の旧石器調査区のはほぼ全域にわたって広範に分布しているが、石器ブロックに関しては以下のように7群の大きなまとまりをとらえる事ができる(第17図)。本章ではこの平面的なまとまりに対してブロック群という呼称を用いるが、これは多分に便宜的なもので同一ブロック群に所属するブロックでも母岩別資料、接合資料の共有関係を持たず、必ずしも意味のあるまとまりとしてとらえられないものも含んでいる。

1. B区を中心に分布するもの(B区ブロック群、B1～B4ブロック)
2. C区南半からG区北半を中心に分布するもの(C区ブロック群、C1～C7ブロック)
3. G区南半からH区北半を中心に分布するもの(G・H区ブロック群、G1～G11ブロック)
4. I区南半からM区を中心に分布するもの(M区ブロック群、M1～M9ブロック)
5. N区を中心に分布するもの(N区ブロック群、N1～N6ブロック)
6. S区北東隅からT区北西隅にかけて分布するもの(S・T区ブロック群、S1～S3ブロック)
7. T区南東隅からU区南西隅にかけて分布するもの(T・U区ブロック群、T1～T2ブロック)

これらの石器ブロックに対して、3基の礫群はすべてS・T区ブロック群周辺に分布する。また11基の配石はB区ブロック群に1基(配石1)、G・H区ブロック群に5基(配石2～6)、M区ブロック群に2基(配石7・8)、N区ブロック群に3基(配石9～11)分布し、C区ブロック群、S・T区ブロック群、T・U区ブロック群周辺には存在しない。

これらの礫群、配石、石器ブロックは、第3章で既述のとおり同一層内に存在するのではなく、すべての遺構の同時性、あるいは共時性に関して確証が得られているわけではない。特に他のブロック群と母岩別資料の共有関係を持たないS・T区ブロック群、T・U区ブロック群などは位置的に離れていることもあって、確実には本文化層に所属しないことも考えられる。しかし、第Ⅰ文化層、第Ⅲ文化層は分布が限定されているため、第Ⅱ文化層に含めた。

配石に関しては、水成堆積層中に文化層が存在し、しかも、その多くが礫層に近接した層準にあるため、調査時点からその認定基準をめぐって議論が交わされていた。これらの礫には一部に人為的と思われる破砕痕が認められるものがあること、重量1kgを超えるような礫は礫層中にはまれにしか存在しないこと、礫自体は礫層からわずかも遊離した位置にあることなど、すべて礫を自然堆積物として片付けてしまうには問題がある。今回は、重量1kgを超えるものを配石の目安としたが、1kg以下であっても1kg以上の礫に近接しているものや、石器ブロックに近接しているものなどは配石として扱うこととした。

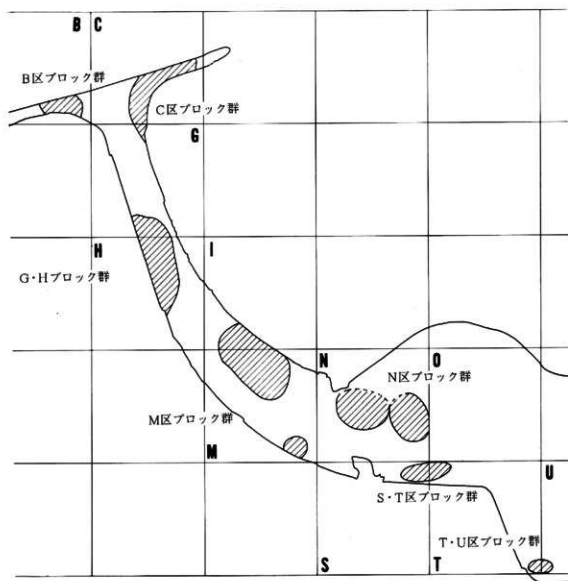
本文化層は、石器組成の上ではナイフ形石器、小型部分加工石器を中心にスクレイパー、挿入石器、鋸歯縁石器、楔形石器、刃部磨製石斧など多彩であり、刃部磨製石斧の製作に用いられたと考えられる<sup>(註)</sup> 砥石も存在する。また、石材組成の面ではほとんど、チャートを主とした在地産の石材で占められ、これにわずかながらサマサイト、黒曜石の遠隔地産石材が用いられている。チャートは比較的良質なもの



が用いられており、第Ⅲ文化層で多用されている節理の縦横に入った緑色～黒色系の粗悪なものは極めて少ない。

母岩識別率、接合率はそれぞれ54.7%、16.3%に達し、ブロック群内での母岩の共有、接合例が多数存在する。また、わずかながらもブロック群間でも母岩の共有、接合例が認められ、広範な遺物の動きが認められる。

以下、次節ではまず、ブロック群ごとに石器等量線図、石器等距離線図を用いて可視的なブロックの細分をおこなったのち、各々のブロックの規模、分布の特徴、石器組成、石材組成、母岩別資料・接合資料の分布などを順次、記述していきたい。(藤田)



第18図 第Ⅱ文化層ブロック群分布模式図

## 第2節 遺構

### 1. B区ブロック群

#### a. 概観 (第19図～第21図)

B区ブロック群は、調査区北西部の、B-c-5、B-d-4、B-d-5、B-e-5グリッドを中心に分布している(第19図)。遺物の分布状況、および石器等量線図、等距離線図の検討によって、4ブロック(B1～B4)が識別された(第20図・第21図)。

調査区のこの付近は、幅が約5mと狭いため、調査区内でブロックの全容を把握しえたのは、B4ブロックのみである。他のブロックは、分布状況から、各々約1/2の範囲を調査しえたものと思われる。

ブロック群は、調査区内では東西約20m、南北約8mの範囲に分布している。ブロック群の標高は、83.0～83.5mの間にある。ブロック群が分布する範囲は、礫層の堆積によって形成された微高地に当たり、遺物は、この礫層の起伏に沿う形で検出された。遺物は、A Tと礫層の間の灰白色シルト層の下部に包含されていることから、ブロック群は、シルト層の堆積によって礫層の起伏が埋没して平坦化する前に形成されたものと思われる。

ブロックは、境界を接している。北側にB1、B2ブロックが、その南にB3、B4ブロックが各々東西に並ぶ。ブロック群の全容は明瞭ではないが、調査区内の状況からはG・H区ブロック群に類似するものかもしれない。

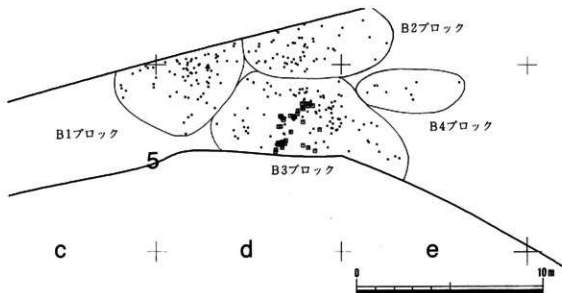
#### b. 配石 (第22図)

配石1は、既述のとおりB3ブロックの中央部に位置している。配石の範囲は、長径約3m、短径約2.6mである。配石の構成は、第22図に示すとおりで、0.06kg～2.9kgのチャート礫を用いたものである。

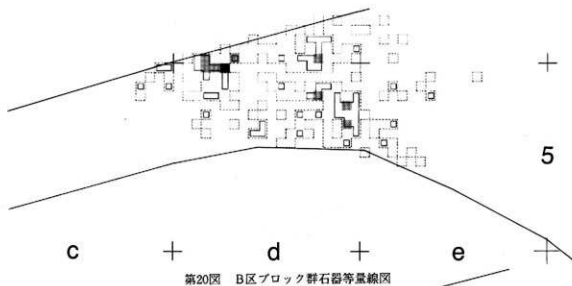
南西部にやや大型の礫が集中し、これと少し離れて北側に、帯状に配石が延びている。

礫の垂直分布は、83.1m～83.5mの間にあつて、他の遺物の分布とはほぼ合致している。

配石を構成する礫には、破碎・受熱の痕跡はまったく認められず、礫群とは性格が異なるものと思われる。



第19図 B区ブロック群石器・礫分布図(・石器 □礫)



第20図 B区ブロック群石器等量線図



第21図 B区ブロック群石器等距離線図

	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	PF	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
B	241	19	1	0	2	1	2	2	11	0	7	131	36	37	11	232	5	4
																2265	37	36
B1	78	9	0	0	2	1	1	1	4	0	3	44	7	10	5	78		
																922		
B2	55	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	24	10	11	8	52	2	1
																558	6	
B3	99	5	0	0	0	0	1	0	4	0	3	58	11	16	6	93	3	3
																750	31	36
B4	9	2	0	0	0	0	0	0	2	0	1	6	0	0	0	9		
																35		

第6表 B区ブロック群の石器組成

配石の分布範囲内は他の遺物の分布が散漫であり、配石が何らかの領域を画することを目的として形成されたことを示すものと思われる。

なお、B3ブロック付近では、下位の礫層が一部で配石のレベルにまで隆起しており、礫層に含まれる礫との識別が一部で困難であった。このため、配石として取り上げたものの中に、礫層を構成する

礫が一部で混入している可能性は否定できないことを付言しておく。

配石の重量は、最大のものが2960gであり、以下690g、645gと続く。配石を構成する礫は、合計36点が検出されている。

### c. 石器ブロック

B区ブロック群の器種・石材組成は、第6表に示したとおりである。回収された遺物は、各ブロックの組成を完全に回復するものではないが、B1ブロックに比較的安定して製品が組成されるほかは、石核・剥片・砕片を主体とした組成となっている。第23図・第24図に、器種別分布図を示す。

#### B1ブロック

B1ブロックは、B-d-4、B-d-5グリッドを中心に分布している。東は、B2ブロック、東南は、B3ブロックと接している。長径約6m、短径約5mの範囲に、遺物が分布している。ブロックの北側は、調査区外に延びている。垂直分布の深度幅は、約20cmである。

B1ブロックは、スクレイパー、鋸歯縁石器、挟入石器、楔形石器、二次加工のある剥片等、9点の製品を含み、B区ブロック群の中で最も豊富な器種構成となっている。

B1ブロックでは、18母岩(56点)が識別され、うち2母岩(4点)がブロック内で分布が完結する。

#### B2ブロック

B2ブロックは、B-d-4グリッドを中心に分布し、西はB1ブロック、南はB3ブロック、東南はB4ブロックと接している。遺物は、長径約8m、短径約3mの範囲から検出されており、遺物の垂直分布の深度幅は約20cmである。

B2ブロックは、製品2点を含むのみで、石核・剥片・砕片を主体とした組成である。

B2ブロックでは、12母岩(27点)が識別されており、うち2母岩(2点)のみがブロック内で分布を完結する。

#### B3ブロック

B3ブロックは、B-d-5グリッドを中心に分布している。北側は、B1・B2・B4ブロックと接している。

遺物は、長径約10m、短径約4mの範囲に分布しており、垂直分布の深度幅は約20cmである。

ブロックの中央部には、最大2.9kgの礫をはじめとし36個の礫で構成された、配石が検出された。遺物は、この配石を中心として分布し、その北東側にやや密度の高い傾向がうかがわれる。

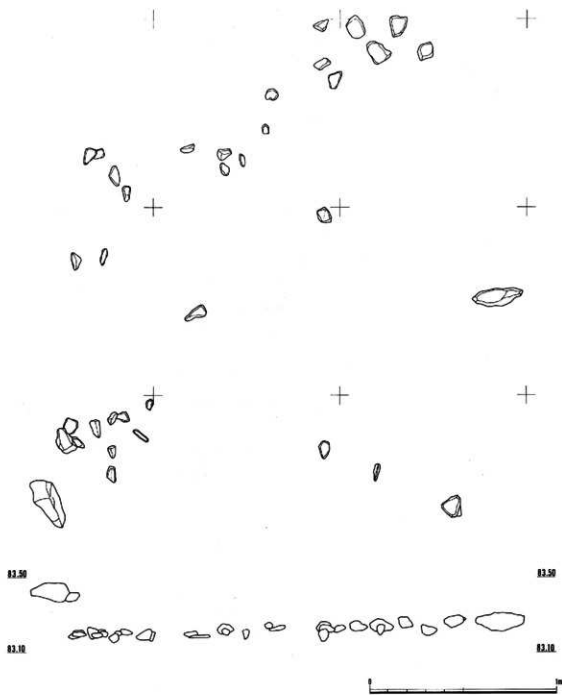
B3ブロックでは、B区ブロック群の中では最も多数の遺物が回収されている。しかし、製品は鋸歯縁石器1点、二次加工のある剥片4点が認められるのみである。一方剥片類は、組成の約60%を占めており、剥片・石核主体の組成をもつブロックといえよう。

B3ブロックでは、25母岩(67点)が識別されたが、うち4母岩(8点)がブロック内で分布を完結する。いずれもB区ブロック群では、最大の規模といえよう。

#### B4ブロック

B4ブロックは、B区ブロック群中最も東に位置する。ブロック全体が調査区内で捉えられたが、僅か9点の遺物で構成される小規模なブロックである。遺物は、長径5m、短径1.5mの帯状の分布を示す。垂直分布の深度幅は、約20cmである。

B4ブロックは、二次加工のある剥片2点のほかに製品を含まず、他には使用痕のある剥片1点と剥片で構成されている。



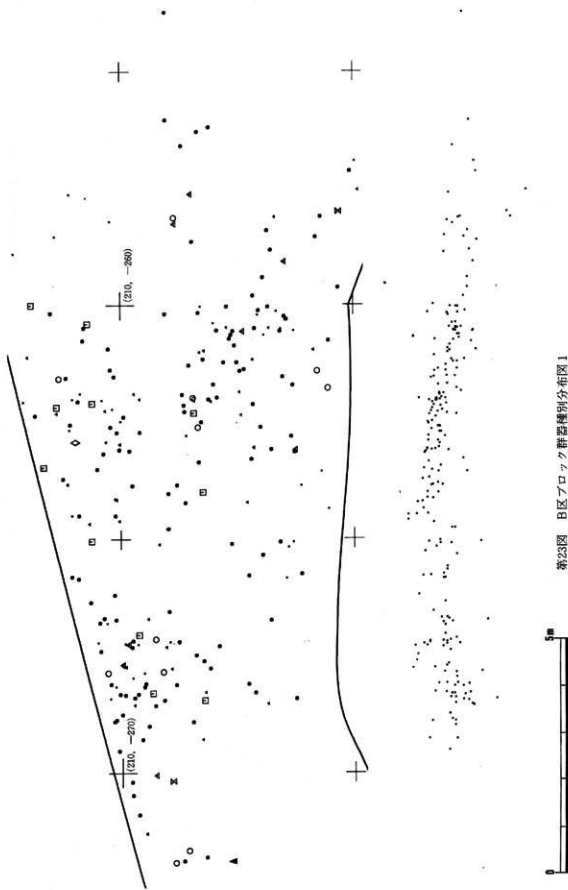
第22図 配石 1 平面図

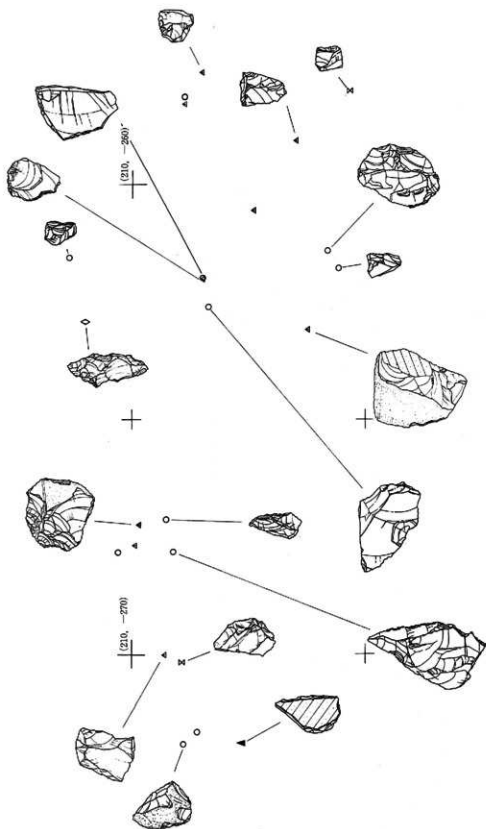
B 4 ブロックでは、6 母岩（6 点）が識別されており、いずれも他のブロックとの間に共有関係が認められる。

**B 区ブロック群の母岩別資料・接合資料の分布（第25図～30図）**

B 区ブロック群では合計37母岩（169点）が識別された。識別率は、B 区ブロック群出土遺物の70%である。また、この中に14例の接合資料が含まれており、接合率は17%である。以下では、本報告書に実測図を掲載した接合資料を含む母岩別資料を中心として記載をおこなう。

B 区ブロック群の母岩別資料は、a. 各ブロック内で分布が完結するもの、b. 2 ブロック間に共有





第24図 B区ブロック群器種別分布図

母岩%	石材	特徴	構成						総重量 (g)	標 本 番 号	分布ブロック	
			総数	製品	UF	石核	削片	砕片				チップ
151	チャート	灰	31			3	23	3	2	396.6	28	B 2・3
152	チャート	半透明	2				2			15.0		B 1・3
153	チャート	半透明	13	1		1	10	1		162.4	29	B 1・3・4
154	チャート	灰	2			1	1			23.5	26	B 3
155	チャート	黒色鱗入	3			1	2			168.7	27	B 1・3
156	チャート	灰	2					2		129.9	25	B 1
157	チャート	黒	9			3	6			134.4		B 1・2・3・4
158	チャート	灰	4				3	1		148.4	27	B 1・2
159	チャート	半透明	9	1	1	2	4			35.8		B 1・3
160	チャート	黒	4		1		3			7.4		B 3・4
161	チャート	黒色鱗入	5					5		201.2		B 2・3
162	チャート	半透明	17		1		6		10	6.3		B 1・3・4
163	チャート	灰	3			1	2			28.5	27	B 1・3
164	チャート	灰	5	1			4			54.6		B 1
165	チャート	黒	7				2		5	4.6		B 1・2・3
166	チャート	黒	3				3			6.0		B 1・3・4
167	その他	灰	2	1						7.6	26	B 2
168	めのう		3				3			37.8	30	B 3
169	チャート	灰	2				2			3.5	27	B 1・3
170	チャート	灰	2				2			24.3	27	B 1・3
171	チャート	灰	2				2			4.5		B 2・3
172	チャート	灰	3				3			10.9	27	B 1・3
173	チャート	黒色鱗入	2	1			1			3.1	26	B 2
174	チャート	黒	2				1		1	1.7	27	B 1・2
175	チャート	半透明	2	1			1			16.9	25	B 1
176	チャート	灰	2				2			3.9	26	B 3
177	チャート	灰	2	1			1			12.6	27	B 1・3
178	チャート	灰色泥質	2			1	1			9.5		B 1・4
179	チャート	灰	2		1		1			3.4	26	B 3
180	チャート	黒	2				2			4.6	26	B 2
181	チャート	黒	8				7	1		31.6		B 2・3
182	チャート	黒	2				2			8.8	25	B 1
183	チャート	黒	2				2			47.4	25	B 1
184	チャート	半透明	2			1	1			61.8		B 2・3
185	チャート	灰	2				2			3.1	26	B 3
186	チャート	黒	2				1	1		7.7	27	B 1・2
187	チャート	灰	2	1	1					8.1	27	B 1・3

第7表 B区ブロック群の母岩別資料

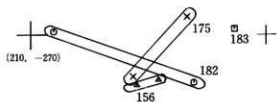
されるもの、c. 3ブロック間以上に分布するものの3群に大別される。

各ブロック内で分布が完結する母岩は、11母岩で全母岩数の30%にあたる。この中で接合資料を含まないものは、5母岩である。

第25図・第26図に、それぞれB1・B2・B3ブロック内で分布が完結する母岩の分布状況を示した。B1ブロックではこれらの母岩はブロック中央部に、B2ブロックではブロック南部に、B3ブロックではブロック北東部にそれぞれ分布しており、いずれも遺物の分布密度が最も高い領域と合致する。

2ブロック間に共有される母岩は、20母岩を数える。B1-B2ブロック間に最も多い8母岩が共有されており、以下、B2-B3ブロック間、B1-B2ブロック間がともに3母岩を共有している。





第25図 B区ブロック群母岩別分布図1

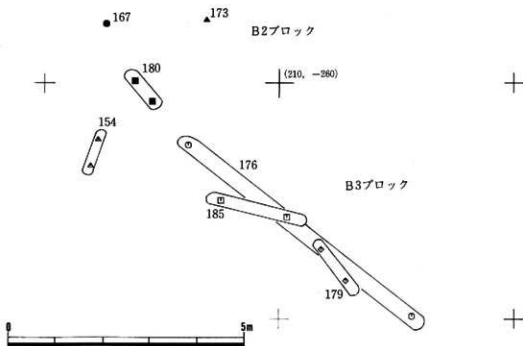
これらの母岩の分布は、ブロック内完結の母岩の分布とはわずかに異なっている。B1ブロックでは南に、B3ブロックでは北にわずかながら寄っており、当核母岩を共有するブロックと隣接する、ブロックの境界部に分布する傾向がうかがわれる(第27図)。

母岩151 (第28図)

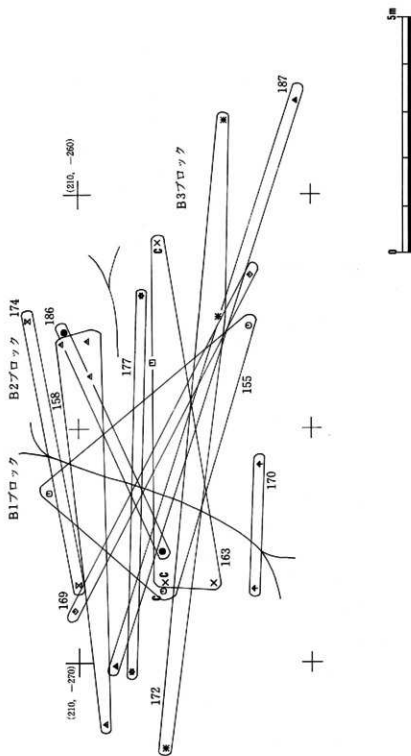
母岩151は、B2-B3ブロックに共有される、灰色チャートの母岩である。製品は含まないが、総数31点を数える。その内訳は、石核3点、剥片23点、破砕礫1点、砕片1点であり剥片を主体とした構成となっている。これらの中に、3例の接合資料が含まれる。

接合資料151-1は、石核・剥片各1点の接合資料で、ともにB2ブロックに分布している。151-2は石核2点、剥片5点の接合資料で、石核1点がブロックに、他はB3ブロックに分布する。151-3は、剥片5点の接合資料で、全点がB3ブロック内に分布している。

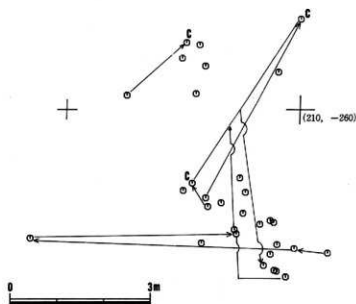
これらの接合資料群は、相互には接合しない。しかし、剝離工程から見るならば、母岩を分割して複数の石核素材を得、ここから剥片剝離をおこなったものであり、主体的な剝離作業は、いずれもB3ブロック内でおこなわれる。



第26図 B区ブロック群母岩別分布図2



第27図 B区アロック群母岩別分布図3



第28図 B区ブロック群母岩別分布図4



第29図 B区ブロック群母岩別分布図5

3ブロック以上に共有される母岩は、5母岩を数える。その内訳は、B1・B2・B3ブロックに分布するもの3母岩、B1～B4ブロックに分布するもの各々1母岩であり、B3・B4ブロックにおける分布が卓越している。

母岩153（第29図）

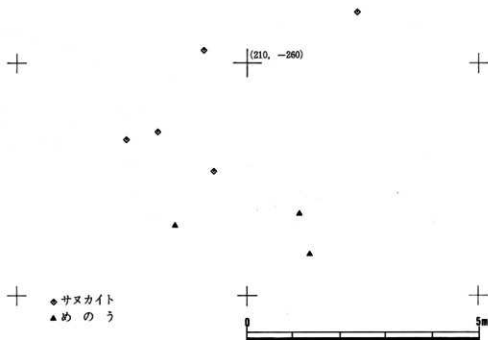
母岩153は、半透明状～赤色を呈する、特徴的なチャートで、G・H区ブロック群以南にも類似した母岩が分布している（後節を参照）。

B区ブロック群で識別されたのは13点で、その中に、製品1点を含んでいる。またこの中に2例の接合資料が含まれている。

接合資料153-1は、石核1点、剥片1点、製品1点の接合資料である。いずれもB1ブロック内に分布している。

153-2は、剥片2点の接合資料であり、やはりB1ブロック内に分布する。

このほかの遺物は、B3・B4ブロック内に各1点の剥片が分布するほかは、いずれもB1ブロック内に分布している。



第30図 B区ブロック群母岩別分布図6

#### 母岩162

同様に、B1・B3・B4ブロックに分布する母岩162は、使用痕のある剥片1点、剥片6点、砕片10点から構成されている。うち15点がB1ブロック内で、直径2m程度の範囲に集中し、B3・B4ブロックには砕片・剥片が各々1点分布するのみで、母岩153と同様B1ブロックに偏った分布状況を呈している。

その他の広い範囲に分布する母岩として、母岩157・165があげられる。

母岩157は、石核3点、剥片6点で構成され、この中に剥片2点の接合資料を含む。B1ブロックに3点、B2ブロックに2点、B3ブロックに2点、B4ブロックに1点が分布し、全般に散漫な分布状況を呈している。

母岩165は、剥片、砕片で構成されるが、やはりB1～B3ブロックにわたって、散漫な分布を呈している。

#### その他の石材の分布（第30図）

B区ブロック群では、チャートのほかに少数のサヌカイト、めのうが用いられている。これらは同一母岩ではないが、ここで一括して記載する。

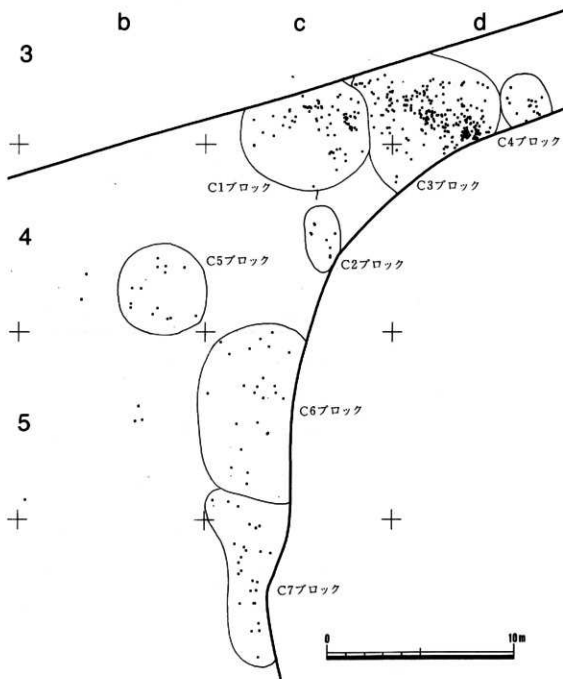
サヌカイトは、2点の二次加工のある剥片を含む5点が検出されており、うち2点がB2ブロックに3点がB3ブロックに分布する。二次加工のある剥片は、いずれもB3ブロックに分布する。

めのうは剥片3点が出土しており、すべてB3ブロックに分布している。

少数出土の石材が、いずれもB3ブロックを中心に分布している点は注目される。

サヌカイト、めのうは遺跡周辺に産出せず、搬入されたものと思われる。これらがB3ブロックに卓越した分布を示すことは、注目される。

2. C区ブロック群

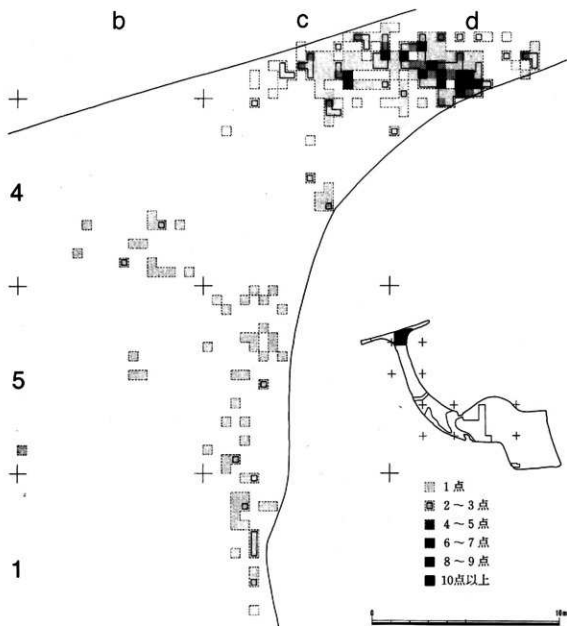


第31図 C区ブロック群石器・礎分布図

a. 概観 (第31図～第33図)

C区ブロック群は、調査区北部C地区のC-b-4、C-d-3・4、C-e-3グリッドから、C-b-5、C-c-5、G-c-1グリッドにかけて分布している(第31図)。C区ブロック群で出土位置を記録して取り上げた遺物は、399点である。

遺物の分布状況、および石器等量線図、等距離線図の検討によって、7ブロック(C1～C7)が識



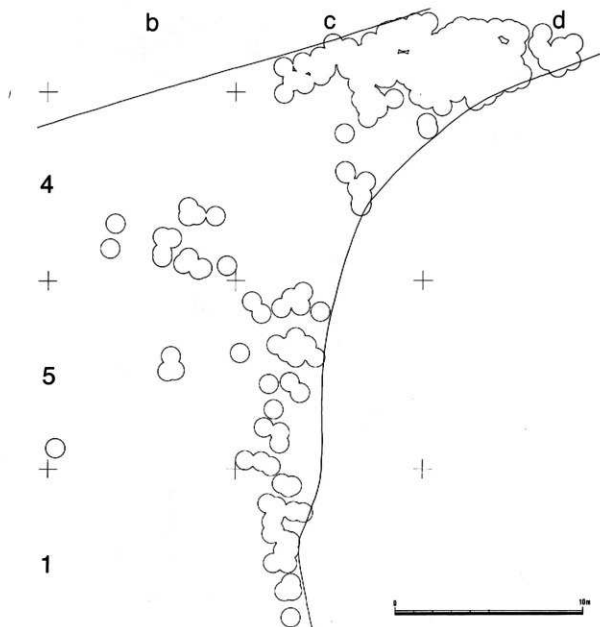
第32図 C区ブロック群石器等量線図 (50cm方眼)

別された (第32・33図)。

これらのブロックのうち、調査区内ではほぼその全体を調査できたものはC5ブロックのみであり、その他のブロックは、調査区外に分布領域が延びている可能性が高い。特にC2、C4、C6、C7ブロックは、その位置と遺物分布状況から、ブロックの主体部は調査区外にあるものと思われる。

ブロック群は、東西約25m、南北約35mの範囲に分布している。ブロック群の標高は、82～83mの間にある。標高の幅は大きいですが、これはブロック群が断崖面が平坦化する以前に、地形の起伏に沿って形成されたためである。

最も北側に位置して東西に接しつづぶ、C1、C3ブロックでは、ブロックの主体部を調査できたことから、この2ブロックでC区ブロック群出土遺物の大半を占めている。C2ブロックは、C3ブロックの南約3.5mに位置する。さらにこの南～南西に、散漫な遺物分布を見せるC5、C6、C7ブロッ



第33図 C区ブロック群石器等距離線図

クが南北に並んでいる。これらのブロック間および周辺部には、ごく少数の遺物が散在している。これらについては、ブロック外の遺物として取り扱っておく。

またC区ブロック群は、第Ⅲ文化層のブロック群と一部で重複しているが、C-c-4グリッド北半では、両文化層の遺物を包含するシルト層の間に、薄いながら砂礫層が挟まれている。その上・下でそれぞれ第Ⅲ、第Ⅱ文化層に伴う石器群が検出されており、上・下層は明瞭に識別された。

以下で、各石器ブロックについて記述をおこなう。

#### b. 石器ブロック

C区ブロック群の器種、石材組成は、第8表に示したとおりである。回収された遺物数の多いC1・C3ブロックでは、製品の組成は安定している。また、概して微小なチップ類が少なく、剥片・石核が卓越する傾向がうかがわれる。

	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	RF	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
C	399	42	6	8	4	3	1	0	20	0	36	214	20	62	25	391	5	3
																3289	53	10
C1	79	13	3	2	2	1	0	0	5	0	2	48	3	10	3	75	3	1
																429	27	0.5
C2	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	8		
																12.4		
C3	231	22	2	6	0	1	0	0	13	0	25	116	8	44	16	228	2	1
																1160	26	9.9
C4	16	3	1	0	1	0	0	0	1	0	2	7	0	2	2	15		1
																58		
C5	14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	1	3	1	14		
																235		
C6	24	2	0	0	0	0	1	0	1	0	2	13	3	0	0	24		
																325		
C7	27	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3	15	5	3	3	27		
																1068		

第8表 C区ブロック群の石器組成

### C1ブロック (第34～36図)

第34～36図は、C1・C3・C4ブロックの器種別分布図である。C1ブロックは、C-c-4グリッド北端からC-c-3グリッドにかけて分布している。東西に並ぶ3ブロックの西端にあって、長径6m、短径5mの範囲に遺物が分布している。ブロックの北側は調査区外に延びており、平面分布の状況からはブロックの中心部は調査区外にあるように見える。遺物の分布は、上述の範囲内でも東半に偏っており、西半の遺物分布は散漫である。

C1・C3・C4ブロックでは、遺物は、AT下に堆積した灰白色シルト層下部～礫層上面に包含されている。C1ブロックの垂直分布の深度幅は約15cmである。

C1ブロックは、ナイフ形石器、小型部分加工石器、スクレイパー、抉入石器、二次加工のある剥片等13点の製品を組成に含み、C区ブロック群中最も豊富な器種組成となっている。

C1ブロックでは、7母岩(30点)が識別されたが、うちC1ブロック内で分布が完結するものは、1母岩(5点)のみである。

### C2ブロック (第37図)

C2ブロックは、C1ブロックの南約2mに位置する。遺物数8点の小規模なブロックで、長径2m、短径1.5mの分布範囲を占めている。しかし、その南東部は調査区の境界となっており、ブロックの大部分は調査区外に存在するものと思われる。遺物の分布は散漫である。

遺物の包含状況はC1ブロックと同様で、垂直分布の深度幅は、約20cmである。

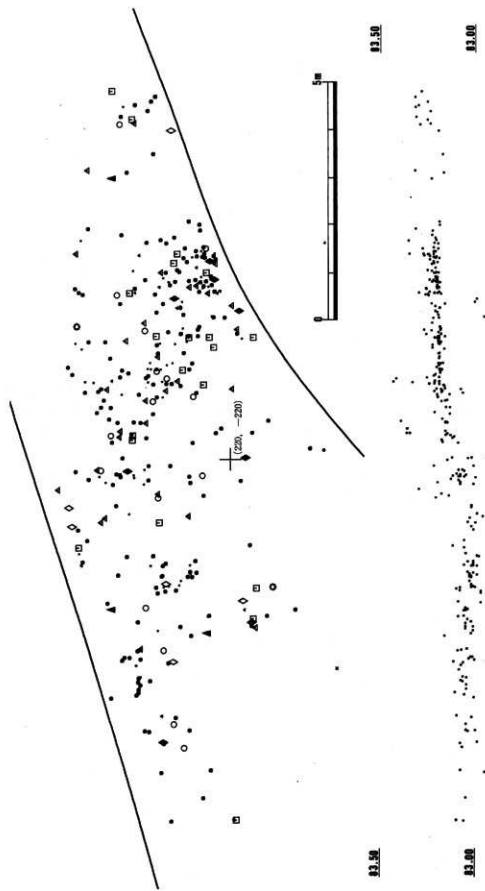
C2ブロックでは、明確な母岩を識別しえなかった。

### C3ブロック (第34～36図)

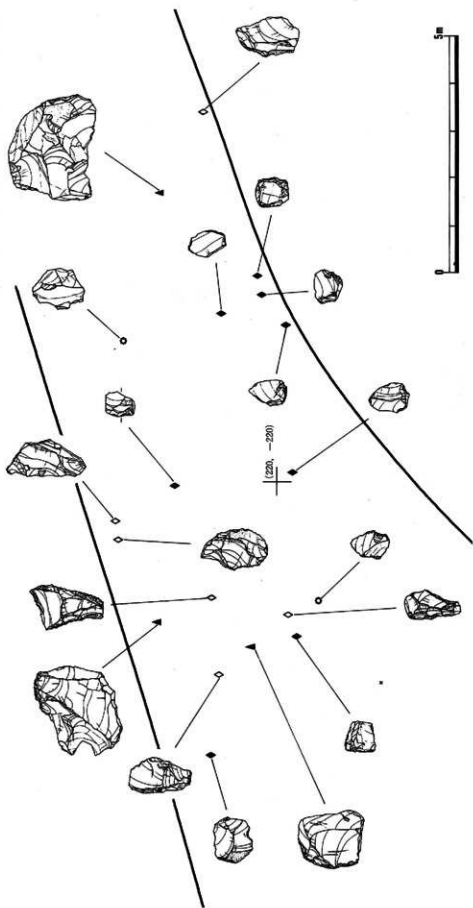
C3ブロックはC-d-3グリッドに位置しており、C区ブロック群中、ブロックの主要部分を調査できた唯一のブロックである。C1・C4ブロックに挟まれており、分布領域は、長径8m、短径6mをはかる。南東部の調査区境界付近に、分布密度の高い部分があって、これがブロックの中核部分と思われるが、一部がさらに南の調査区外へも延びている可能性がある。

分布密度の高いブロック南東部には、石核、破砕礫を中心として、剥片、碎片が分布しているが、この中に小型部分加工石器がまぎれ込んで分布している。一方北西部には、石核、剥片等とともにナイフ形

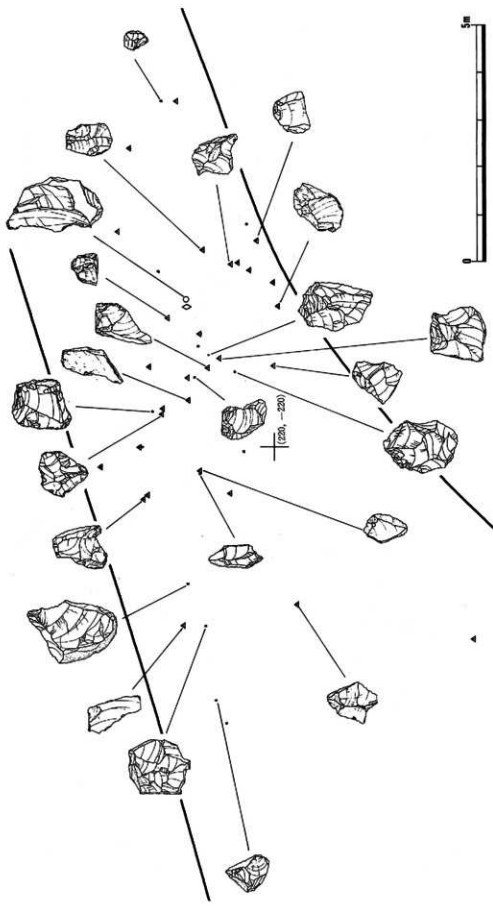




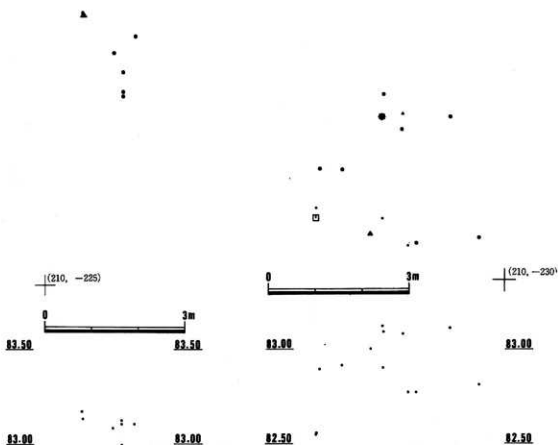
第34図 C1・C3・C4ブロック器種別分布図1



第35図 C1・C3・C4 了ロック器種別分布図2



第36図 C1・C3・C4ブロック器種別分布図3



第37図 C2ブロック器種別分布図

第38図 C5ブロック器種別分布図

石器、小型部分加工石器、挟入石器が散漫に分布している。これに対して、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片は、南東部でややまとまるものの、ほぼブロック全域にわたって分布している。

垂直分布の深度幅は、最大で約50cmをはかるが、約20cmの範囲内に大部分がおさまる。なお、遺物分布の下面を形成する礫層が、C3ブロック付近で隆起しているため、C3ブロックはC1ブロックに比べて、平均約20cmの高まりを見せている。

C3ブロックの器種組成中、製品は19点を占めるが、内6点が小型部分加工石器、10点が二次加工のある剥片で占められる。また使用痕のある剥片が24点と多数を占める点も、組成上の特徴といえよう。

C3ブロックでは、19母岩(145点)が識別された。うち12母岩(38点)は、ブロック内で分布が完結する。他のブロックと共有される母岩数は少ないが、1母岩を構成する石器数が多く、10点を超えるものが5母岩、うち30点を超えるものが2母岩存在する。

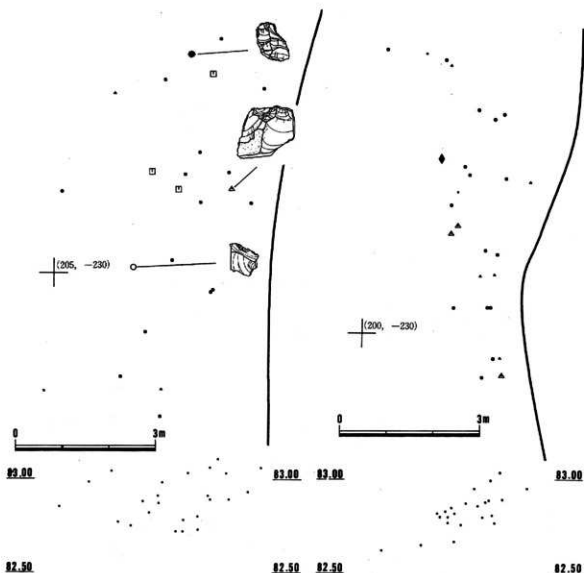
#### C4ブロック(第34図～第36図)

C4ブロックは、C3ブロックの東に位置する小規模なブロックである。その大部分は、調査区外にあるものと考えられる。遺物は2m×2mの範囲に分布している。分布密度は低く、遺物数も16点と少ないが、ナイフ形石器、スクレイパー、使用痕のある剥片などを含んでいる。

垂直分布は、C3ブロックのそれとほぼ同じである。

C4ブロックでは、7母岩(16点)が識別されたが、分布がブロック内で完結するものはない。

#### C5ブロック(第38図)



第39図 C6ブロック器種別分布図

第40図 C7ブロック器種別分布図

C5ブロックは、C-b-4グリッドの南東部に位置する。分布範囲は4m×4mである。遺物の分布密度は低く、製品は鋸歯縁石器1点を含むのみである。垂直分布の深度幅は、最大で約60cmである。

C5ブロックでは、2母岩(3点)が識別された。うち1母岩(1点)は、G・H区ブロック群に共有されている、広域分布母岩である(母岩No. 212)。他の1母岩も、C3ブロックと共有されるものである。

#### C6ブロック (第39図)

C6ブロックはC-c-5グリッドに位置しているが、調査区の縁に沿って帯状に検出されており、主要部分は調査区外にある可能性が高からう。分布範囲は長径9m、短径5mにおよぶ。分布は全体に散漫で、密度の高まりは認められない。

垂直分布はやや拡散しており、深度幅は最大約40cmにあって、東側ほど高まりを見せる。

C6ブロックでは4母岩(10点)が識別され、うち3母岩(8点)が他ブロックとの間に共有される。

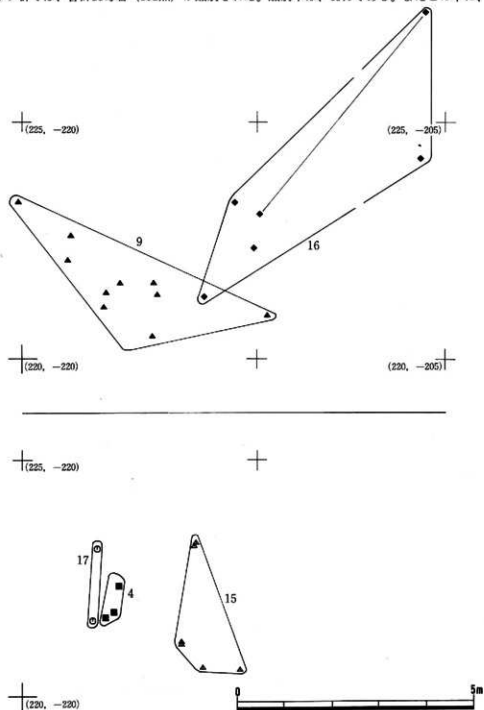
#### C7ブロック (第40図)

C7ブロックは、C-c-5グリッド南半から、G-c-1グリッドの北部に位置する。C6ブロック同様、調査区の縁に沿って検出されており、調査区外に主要部分が存在する可能性が高い。分布範囲は、長径9m、短径4mの帯状を呈する。

垂直分布の状況もC6ブロックと同様で、深度幅は最大約50cmをはかるが、全体に東側に高く、西に低い傾向が看取される。C7ブロックでは、母岩は識別できなかった。

#### C1～C7ブロックの母岩別資料・接合資料の分布（第41図～第45図）

C区ブロック群では、合計18母岩（192点）が識別された。識別率は、48%である。またこの中に、



第41図 C1～C7ブロック母岩別分布図1

10例の接合資料が含まれており、接合率は5%である。以下では、本報告書に実測図を掲載した接合資料を含む母岩の分布状況を中心として記載をおこなう。なお、各母岩の構成は、第9表のとおりである。

C区ブロック群の母岩別資料は、a. 各ブロック内で分布が完結するもの、b. 2ブロック間に共有されるもの、c. 3ブロック間以上またはブロック外を含む広範囲に分布するものの3者に大別できる。各ブロック内で分布が完結する母岩は9母岩で、C区ブロック群が保有する母岩数の半分に当たる。このうち7母岩がC3ブロックに分布するものであり、ブロック規模を反映している。第41図上下に、C3ブロック内で分布が完結するものの分布状況を示した。いずれもC-d-3グリッド南西部のC3ブロック中心部に分布している。

これらの母岩のうち、母岩16は1点、17は2点の製品（16は二次加工のある剥片、17は小型部分加工石器）を含んでいる。

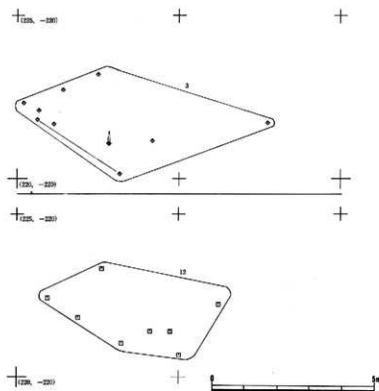
#### 母岩3（第42図）

母岩3は灰色のチャートで、12点からなる。この中に接合資料2例が含まれる。

分布は、C3ブロックに10点、C4ブロックに1点で、他の1点は採集資料である。C4ブロックに分布する1点は、剥片である。接合資料は、3-1、3-2ともに剥片2点が接合するものである。

なお母岩18には、スクレイパー1点が含まれており、C4ブロック内に分布する。

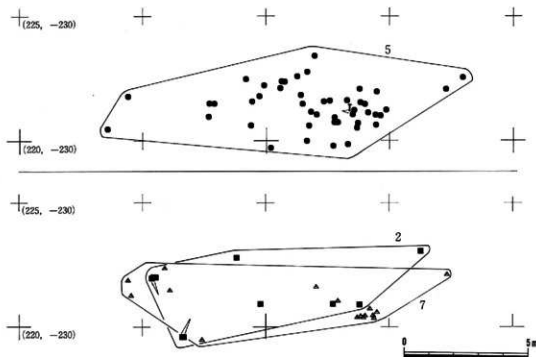
3ブロック間ないしはブロック外分布も含む、広い分布領域をもつ母岩は7母岩を数え、C区ブロック群での、母岩別資料の分布状況の特徴をなす。そのほとんどは、C1・C3・C4ブロック間の共有関係を主体としており、これにC6・C7ブロックを含んでいる。広い分布領域をもつ母岩のうち、C3ブロックを介在させないものは、母岩2のみである。



第42図 C1～C7ブロック母岩別分布図2

母岩No.	石材	特徴	種						総重量 (g)	母岩 番号	分布ブロック
			総数	製品	UF	石核	剥片	チップ			
1	チャート	黒	8	1		1	8		26.9	44	C1・5・6
2	チャート	黒	10	1	3	1	5		47.6	43	C1・3・4
3	チャート	灰	12		1	1	9		44.8	42	C1・3・4
4	チャート	乳白泥質	4				4		6.9	41	C3
5	チャート	灰	45	4	9	5	22		132.1	43	C1・3・4
6	チャート	アノ色	2		1	1			25.9	41	C3
7	チャート	灰	16	5		3	7		55.3	43	C1・3・4
8	チャート	灰	43	1	7	2	20		68.4	44	C1・3・4・6・7
9	チャート	灰	10			2	8		84.9	41	C3
10	チャート	黒	2			1	1		66.2	44	C6
11	チャート	黒	10		1		8	1	36.7	44	C1・3・6
12	チャート	灰	8				7		29.0	42	C3・4
13	チャート	その他	3	2			1	2	23.1	41	C1
14	チャート	乳白泥質	2				2		12.6	41	C3
15	チャート	黒	6	1		1	4		96.6	41	C3
16	チャート	緑色挿入	6		1		5		7.3	41	C3
17	チャート	黒色挿入	2	2					10.6	41	C3
18	チャート	黒	2	1			1		38.2	41	C3・4

第9表 C区ブロック群の母岩別資料



第43図 C1～C7ブロック母岩別分布図3

母岩2 (第43図)

母岩2は黒色チャートで、10点からなり、製品1点、使用痕のある剥片3点をまじえている。このなかに接合資料2例を含む。製品は、C1ブロックに分布する小型部分加工石器である。また使用痕ある剥片は、2点がC3ブロック、1点がC4ブロックに分布する。

接合資料は、2-1が剥片2点の接合、2-2は小型部分加工石器とその二次加工にともなう切断剥片の接合例である。接合資料は、すべてC1ブロック内に分布している。石核は、C3ブロックに分布する。

母岩8 (第44図)

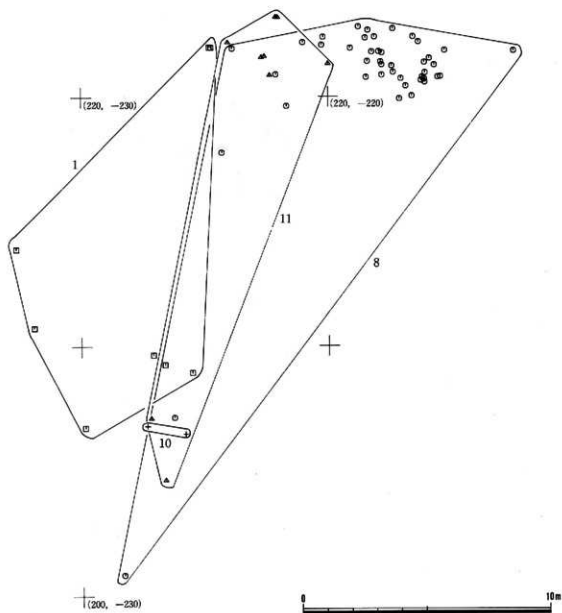
母岩8は、良質の灰色チャートで、合計43点が識別されている。製品は、小型部分加工石器1点がC



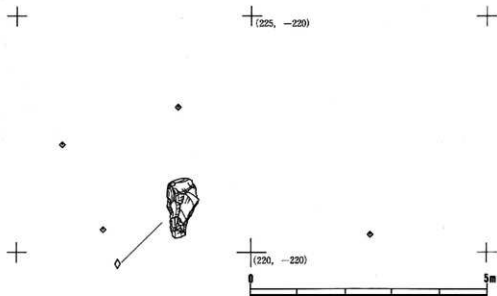
1ブロックに分布する。また、使用痕のある剥片は、C3ブロックに6点、C1ブロックに1点が分布する。石核はともにC3ブロック内に分布する。また、これらからそれぞれ約15m、20m離れて、C1・C3ブロックに剥片各1点が分布している。本母岩には、接合例は確認されなかった。

#### 母岩7 (第43図)

16点からなるが、5点の製品を含む。これらは、小型部分加工石器2点、二次加工のある剥片3点のうち二次加工のある剥片2点がC1ブロックに分布し、他はC3ブロックに分布する。また、C4ブロックには石核1点が分布している。C1ブロック内での分布は散漫であるが、C3ブロックの東部では、径1m程度の範囲内に、8点が集中、2ブロック間に共有される母岩は、母岩3・12・18の3母岩のみである。いずれもC3-C4ブロック間に共有されており、後述の3ブロック間以上に分布する母岩も含めて、両ブロックの緊密性を示している。



第44図 C1～C7ブロック母岩別分布図4



第45図 C1～C7ブロック母岩別分布図5

#### 母岩5（第43図）

母岩5は、C区ブロック群中、最も構成石器数が多い。製品はすべてC3ブロックの小型部分加工石器である。また使用痕のある剥片は、C3ブロック8点、C4ブロックに1点が分布する。全体では、C1ブロック・C4ブロック各1点の石器が分布するほかは、すべてC3ブロック内に分布している。母岩5には、接合資料1例が含まれる。これはすべてC3ブロック内に分布している。小型部分加工石器とその製作にともなう切断剥片である。

#### 母岩11（第44図）

母岩11は、C1・C2・C6ブロックに分布する。使用痕ある剥片は、C6ブロックで出土している。他の遺物は、C1ブロックに4点、C3ブロックに3点、C6ブロックに2点が分布している。

#### 母岩1（第44図）

C3ブロックを介在させずに、広い分布領域をもつ母岩である。特に、C5ブロックに分布する点が注目される。製品は副歯縁石器で、C6ブロックに分布する。その他の遺物は、C1ブロックに2点、C5ブロックに2点、C6ブロックに3点が分布している。

母岩1は、接合資料1例を含んでいる。石核1点と剥片1点の接合例で、石核は、C6ブロックに、剥片はC5ブロックにそれぞれ分布し、接合距離は約5mである。

#### その他の石材の分布（第45図）

C区ブロック群では、5点のサヌカイトが出土している。サヌカイトは、C1ブロックに3点、C3ブロックに2点が分布する。C1ブロックの1点は、ナイフ形石器である。

サヌカイト製の石器には、接合関係は認められず、肉眼的な所見からも同一母岩に属するものとは認めがたい。従って、石器はいずれもブロック外から搬入されたものと考えられる。

### 3. G・H区ブロック群

#### a. 概観 (第46図～第48図)

G区ブロック群は11基の石器ブロックから構成され、5基の配石を伴う。石器ブロックは大きくはG-c-d-5区、H-c-1・2区、H-d-1・2区の約250㎡の範囲に分布する一群と、その南のH-d-3・4区に散漫に分布するものに分けられる。前者は石器等量線図からみるとG-c-5区とH-c-1区の2つに比較的集中度の高いまとまりがあり、その東から南にかけて集中度の低いいくつかの小単位が認められる。これをG1～G9ブロックとする。G7ブロックでは石器等量線図をみると南と北に2つの密度の高い部分が認められるが、境界がはっきりしないため1つのブロックとして扱う。H-d-3・4区に分布するものでは、やや遺物のまとまっている2つをブロックとしてとりあげる(G10・G11ブロック)。5基の配石はG1～G9ブロックの一群内に点在している。

遺物の出土レベルは83.0m～83.5mである。G1～G9ブロックの垂直分布図(第50図)ではG-c-5区、H-c-1区の遺物がわずかに弧状に盛り上がっているのが観察されるが、これはG-c-5区、H-c-1区の中央付近で層の盛り上がりが存在するため、微地形を反映したものとといえよう。

G区ブロック群では総計759点の石器が出土している。第Ⅱ文化層のブロック群の中では最も規模が大きい。各ブロック毎の器種、石材組成は第10表に示すとおりである。器種組成では製品、使用痕ある剥片、石核がそれぞれ40～50点あり安定して存在している。製品の中では楔形石器の割合が高く、量的な中心となっている。また挟入石器もやや多い。これ以外の製品はほぼ等量存在する。注目されるものとしては刃部磨製石斧および砥石の存在である。砥石はブロック外からの出土である。石材ではチャートが主体であるが、サヌカイトも4.4%あり、少ないながらも一定の量を保有している。このサヌカイトはG1ブロックとG7ブロックに大半が分布する。黒曜石が唯一出土していることも特筆される。

#### b. 配石 (第49図)

	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	RF	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
G	759	51	4	6	2	4	4	20	9	2	41	424	128	65	49	699	31	29
G1	143	21	2	0	1	2	0	12	4	0	11	72	17	17	5	136	7	0
G2	24	3	0	0	0	1	0	0	2	0	1	14	4	1	1	653	47	0
G3	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	4	0	0	22	0	2
G4	41	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	27	8	1	3	103	0	8.5
G5	76	6	1	1	0	1	1	1	0	1	8	44	7	6	5	17	0	1
G6	33	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	20	6	3	2	95	0	1.6
G7	264	12	0	3	1	1	1	4	2	0	12	142	60	15	23	37	3	1
G8	87	3	0	0	0	0	0	2	1	0	5	49	13	10	7	316	29	4.5
G9	37	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	19	7	8	1	70	1	5
G10	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	10	0	0	1	575	0.3	23
G11	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	32	0	1
G外	15	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	2	4	1	239	0	2
																236	16	12
																2706	41	73
																79	3	5
																755	54	43
																36	1	0
																145	0.3	0
																14	0	0
																63	0	0
																7	0	0
																22	0	0
																13	0	2
																20	0	903

第10表 G・H区ブロック群の石器組成(石材の下端は重量g)

## 配石 2

● G 8 ブロック南端に位置する。5個の礫で構成され、そのうち4個は約50cm以内の距離にある。礫の重量は最大のものから順に3800g、1360g、670g、530g、294gである。3個の礫が破損しているが、そのうち2個は人為的な打欠きによるものと思われる。

## 配石 3

● G 7 ブロック内の西端に位置する。1個の礫で構成される。礫の重量は2,570gである。礫の一端は破損している。これは人為的な打欠きによるものと思われる。

## 配石 4

G 7 ブロック内に位置する。2個の礫で構成される。礫の重量は1,550g、1,080gである。

## 配石 5

G 5 ブロック内に位置する。3個の礫で構成され、そのうち2個は約50cm前後の距離にある。礫の重量は1,400g、1,380g、1,070gである。3個の礫のうち1個は破損しているが、これは人為的な打欠きによるものと思われる。

## 配石 6

G 6 ブロック内に位置する。1個の礫で構成される。礫の重量は1,450gである。

## c. 石器ブロック

### G 1 ブロック (第50図・51図)

11.8m×7.6mの規模をもつ。中央部に分布密度の高い部分が1ヵ所ありこれより外側へいくにしたがって次第に散漫となる。規模はG 7 ブロックに次ぐ大きさであるが、G 7 ブロックが2つの集中部をもつことから集中部が1ヵ所のもものではG区の中で最大である。石器数は143点で石材ではチャート136点、サヌカイト7点である。サヌカイトは少ないながらも一定量を保有している。器種構成では製品21点、使用痕ある剥片11点、石核5点、剥片類とひとそろいのセットを有している。製品の組成率は14.7%でG区ブロック群の中で最も高い。21点の製品のうち13点は楔形石器であり、製品の半数以上を占める。ナイフ形石器やスクレイパーなどは1～2点である。使用痕ある剥片も組成率7.7%と高い方である。石器器種の分布上の特徴をみると、製品、使用痕ある剥片ともブロックの中央部に集まる傾向が認められるが、楔形石器についてはブロック全体に広がるようである。母岩別資料は16母岩(75点)を識別した。このうち他のブロックにも分布するものは11母岩(58点)である。母岩別資料、接合資料の分布に関してはG 1 ブロック～G 9 ブロックをまとめて後述したい。

### G 2 ブロック (第50図・51図)

2.9cm×1.8cmの規模をもつ。散漫に分布し、特に集中部は認められない。石器数は24点で石材はチャート23点、他1点である。器種構成は製品3点、石核1点と剥片類である。製品は楔形石器と抉入石器である。母岩別資料は4母岩(7点)を識別した。これらはすべて他のブロックにも分布し、ブロック内のみで完結する母岩はない。

### G 3 ブロック (第50図・51図)

3.3m×1.3mの規模をもつ。散漫に分布し、特に集中部は認められない。石器数は18点ですべてチャートである。器種構成は製品、石核が無く、使用痕ある剥片1点と剥片類のみで構成される。母岩別資料は7母岩(14点)を識別した。識別率は77.8%とかなり高い。このうち他のブロックにも分布するのは6母岩(12点)で他のブロックとの結びつきの強さがうかがわれる。

#### G4ブロック (第50図・51図)

4.6m×2.8mの規模をもつ。散漫に分布し、特に集中部は認められない。石器数は41点でチャート37点、サヌカイト3点、他1点である。器種構成は、製品2点、石核3点、剥片類で構成される。母岩別資料は9母岩(17点)を識別した。これらはすべて他のブロックにも分布する。

#### G5ブロック (第50図・51図)

7.6m×4.5mの規模をもつ。北半のほうが南半よりもややまとまりが良い。ブロックの南側には配石6が存在する。石器数は76点でチャート72点、サヌカイト1点、他3点である。その他の石材には刃部磨製石斧の粘板岩が含まれる。器種構成は製品6点、使用痕ある剥片8点、石核5点、剥片類で構成される。製品にはナイフ形石器、小型部分加工石器、抉入石器、刃部磨製石斧などが1、2点含まれ、特定器種への偏りは認められない。刃部磨製石斧の刃部再生剥片も当ブロック内に存在する。母岩別資料は19母岩(38点)を識別した。このうち他のブロックにも分布するものは15母岩(28点)である。

#### G6ブロック (第50図・51図)

5.8m×(5.0m)の規模をもつ。西側は調査区の外側に延びているようである。全体に散漫で特に集中部は認められない。石器数は33点でチャートが32点である。サヌカイトは含まれない。器種構成は製品1点、使用痕ある剥片1点、石核2点、剥片類である。母岩別資料は4母岩(10点)を識別した。このうち他のブロックにも分布するものは3母岩(8点)である。

#### G7ブロック (第50図・51図)

8.8m×7.0mの規模をもつ。他のブロックと比べて広いが、北と南の2か所に集中部が認められることから細分できる可能性がある。石器数は264点でG1ブロックの約2倍である。石材はチャートが247点、サヌカイトが16点ある。器種構成は製品12点、使用痕ある剥片12点、石核23点、剥片類である。製品ではナイフ形石器を除いた各器種が存在するが特定器種への偏りは認められず、楔形石器がやや多い程度である。石核の組成率が高くG区ブロック群全体の約半数を占める。器種別の平面分布をみると、製品、石核ともに2か所の集中部に集まる傾向が認められる。母岩別資料は41母岩(162点)を識別した。このうち他のブロックにも分布するものは27母岩(108点)である。

#### G8ブロック (第50図・51図)

4.6m×3.4mの規模をもつ。南北方向に細長く分布が広がっており、南側に集中部が存在する。石器数は87点である。石材はチャートが80点、サヌカイトが3点、他が4点ある。器種構成は製品3点、使用痕ある剥片5点、石核7点、剥片類である。製品では楔形石器と二次加工ある剥片がある。平面分布をみると、製品、石核ともに南側の集中部に集まる傾向が認められる。母岩別資料は23母岩(45点)を識別した。このうち他のブロックにも分布するものは22母岩(43点)で、他のブロックとの結びつきの強さがうかがわれる。

#### G9ブロック (第50図・51図)

6.1m×3.4mの規模をもつ。1.5m×1.0mの集中部を中心にもつが、これから離れると極端に密度が低くなる。石器数は37点で、石材は1点のサヌカイト以外はすべてチャートである。器種構成は製品2点、石核1点と剥片類である。チップの組成率が他のブロックに比べ高いが、これはすべて母岩№210に限定される。母岩別資料は5母岩(28点)を識別し、このうち他のブロックにも分布するものは4母岩(26点)である。

#### G1ブロック～G9ブロックの母岩別資料、接合資料の分布 (第52図～59図)

G1～G9ブロックに属する石器723点のうち母岩別に分類できたものは62母岩396点である。母岩識別率は54.8%である。このうち接合資料は183点である。母岩識別率、接合率は高くはない。これらの母岩別資料、接合資料の分布は広範囲にわたるものから、狭い範囲の中に収まるものまでさまざまである。各々の母岩別資料の構成、分布ブロックなどは第11・12表に示している。

第52図と第53図には分布範囲が比較的狭いもの(約5m以内)を示している。大半の母岩は資料数が2～3点である。構成点数が5点以上の母岩のうち母岩No203、209、218は破砕礫が主体の母岩である。これは、石質が悪いため塊状に割れてしまったもので、こうした石質の母岩は特に局所的な分布傾向を示す。分布範囲が広い母岩においても同様の石質である母岩No214(第56図)、210(第57図)、208(第58図)、228(第59図)では、ほとんどの資料は局所的に集まり1～2点がそれから離れた位置に分布するものである。

第54図～第59図には分布が比較的広範囲に及ぶもの(約5m以上)を示している。このなかで接合距離が10m前後となるような接合資料をもつ母岩が9母岩存在する(母岩No250、247、237、263、213、215、210、212、206)。また、特に構成点数が多い母岩の分布傾向をみるとG1ブロック～G9ブロック全体にまんべんなく分布しているのではなく、いくつかのブロックに集中する傾向が認められる。例えば、母岩No250(第54図)ではG1、G7(南半)、G8ブロックに集中する。母岩No204(第54図)は1点を除きG1とG7(南半)にのみ分布する。母岩No227はG1ブロックに大部分が分布している。これに対して母岩No212(第58図)、母岩No247(第55図)は複数のブロックに分布するが、特に特定のブロックに偏るという傾向は低い。

このような母岩別資料の分布から、特に点数の多い母岩では各ブロックに均等に分布するのではなく分布の中心となるブロックが1つあるいは複数存在することがわかる。分布の中心となるブロックは、G1、G5、G7、G8、G9ブロックといった遺物の分布密度の高いブロックであり、集中部の形成において点数の多い母岩が核となっているといえよう。また、これらの母岩の分布が石器製作と直接結びつくものであるならば、G区ブロック群においては少なくとも6カ所を中心に石器製作が行われたことになる。しかし、これを裏付けるには、個々の母岩別資料の内容や、石器製作工程の中での位置づけなどを十分に検討し、廃棄の問題や持込みの可能性なども考慮したうえで、判断する必要があり、短絡的に結論付けることはさしひかえておきたい。

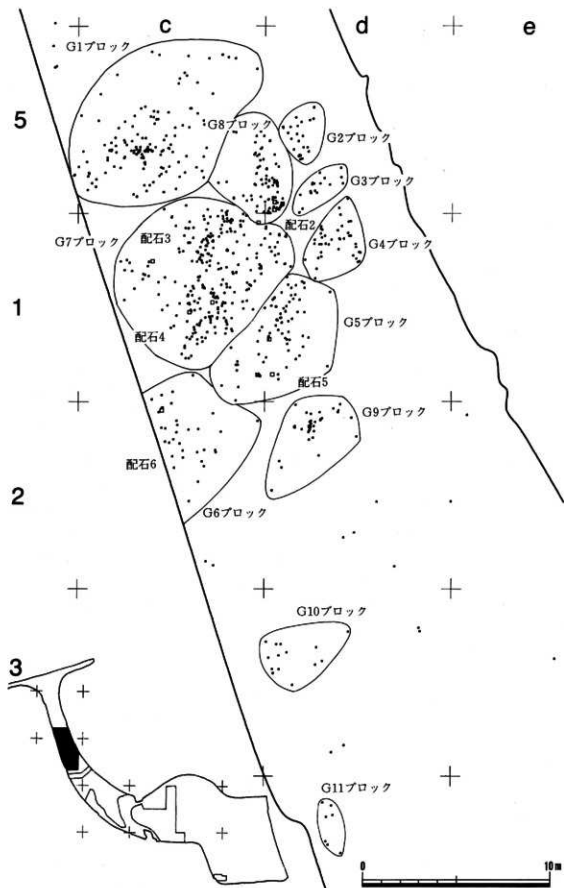
#### サヌカイトの分布(第60図)

サヌカイトはG1、G4、G5、G7、G8ブロックに分布するがG7ブロックでは北半部分のみに分布しており、G4、G5、G8ブロックでの分布と近接しているため、大局的にみればG1ブロックとG4、G5、G7、G8ブロックの二つに分かれているようにみえる。この傾向は産地別の分布を見た場合より鮮明であり、二上山産のサヌカイトがG7ブロックを中心に分布し、岩屋産を全く含まないのに対して、G1ブロックは点数が少なく問題があるものの、岩屋産が主体となっていると言えよう。これはG1ブロックの他のブロックに対する独自性を示す根拠となると考えられよう。

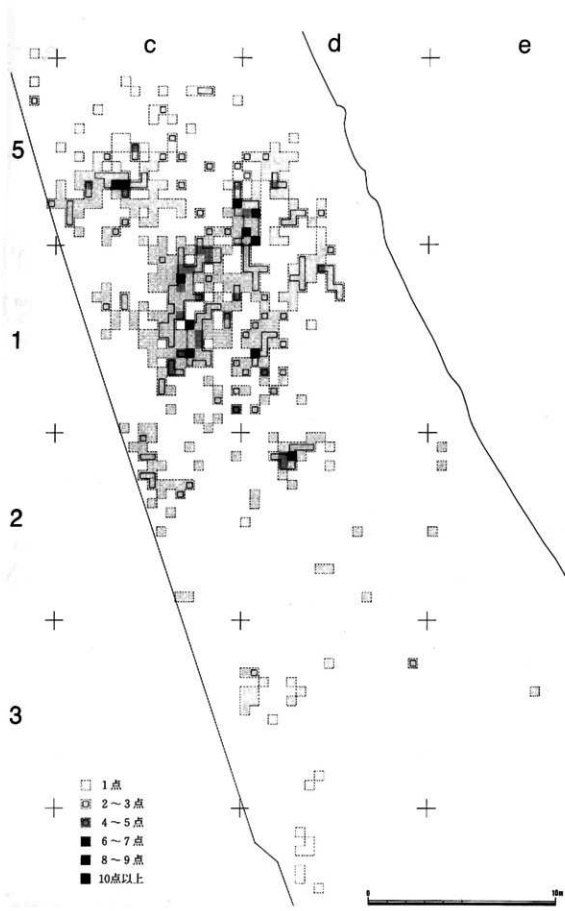
#### G10ブロック(第61図)

4.6m×2.6mの規模をもつ。集中部はなく散漫に分布している。石器数は14点である。石材はすべてチャートである。石器組成は使用痕ある剥片3点、石核1点と剥片類である。母岩別資料は剥片2点で構成される1例のみ確認している(母岩No230)。他のブロックと共有する母岩別資料は存在しない。

#### G11ブロック(第61図)

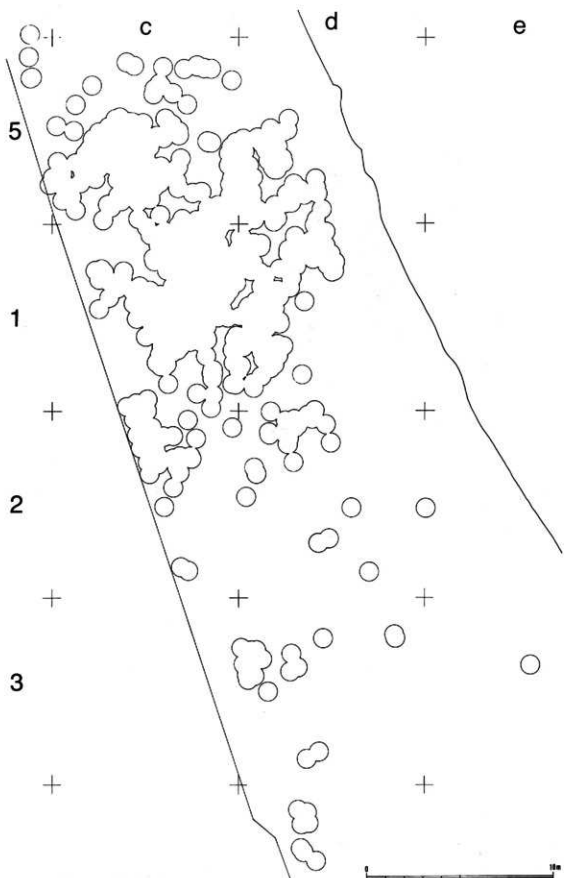


第46図 G・H区ブロック群石器・礫分布図（・石器，□礫）

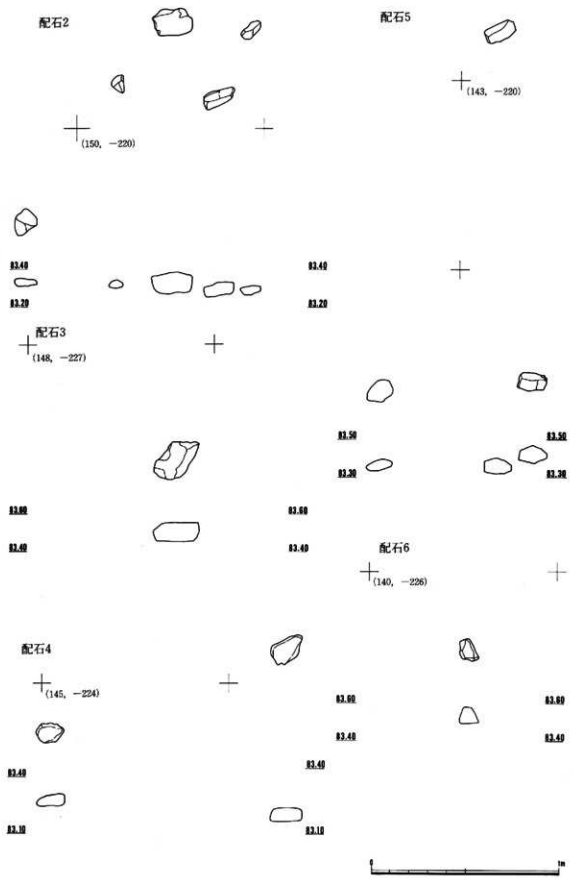


第47図 G・H区ブロック群石器等量線図

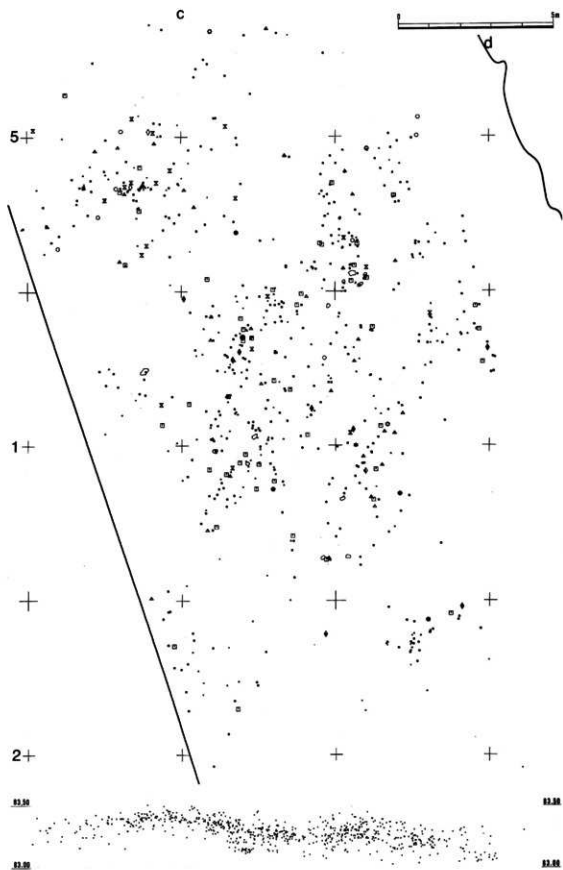




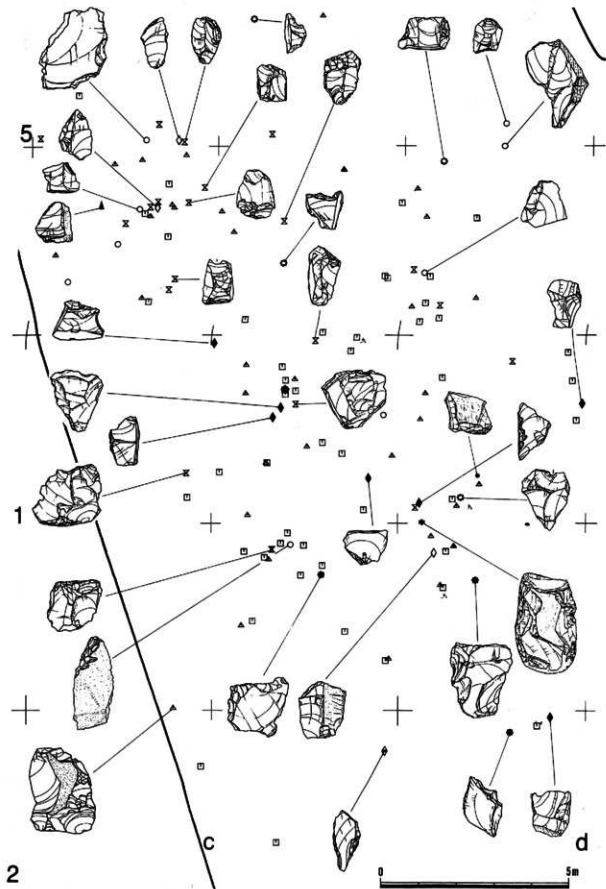
第48図 G・H区ブロック群石器等距離線図



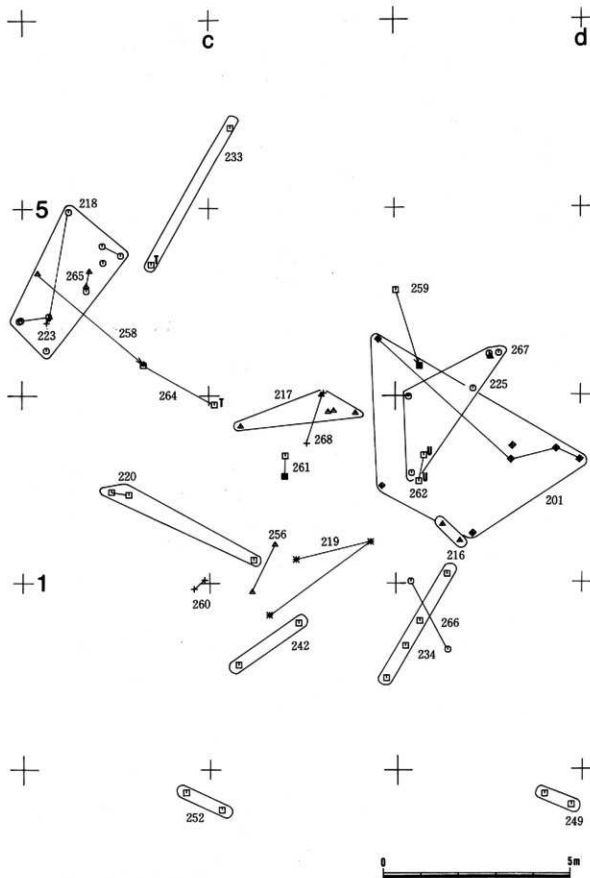
第49图 配石2~6平面图



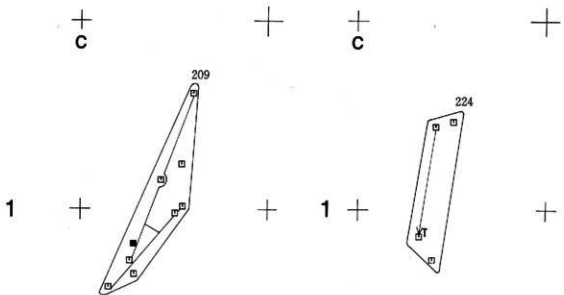
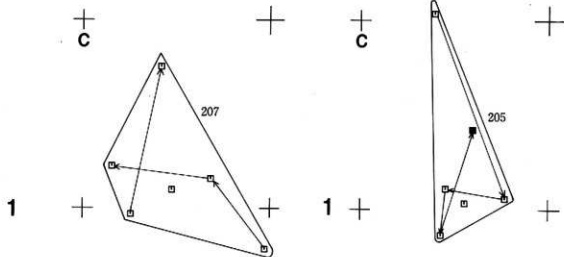
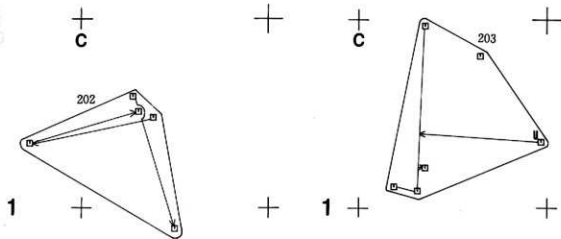
第50図 G1～G9ブロック器種別分布図1



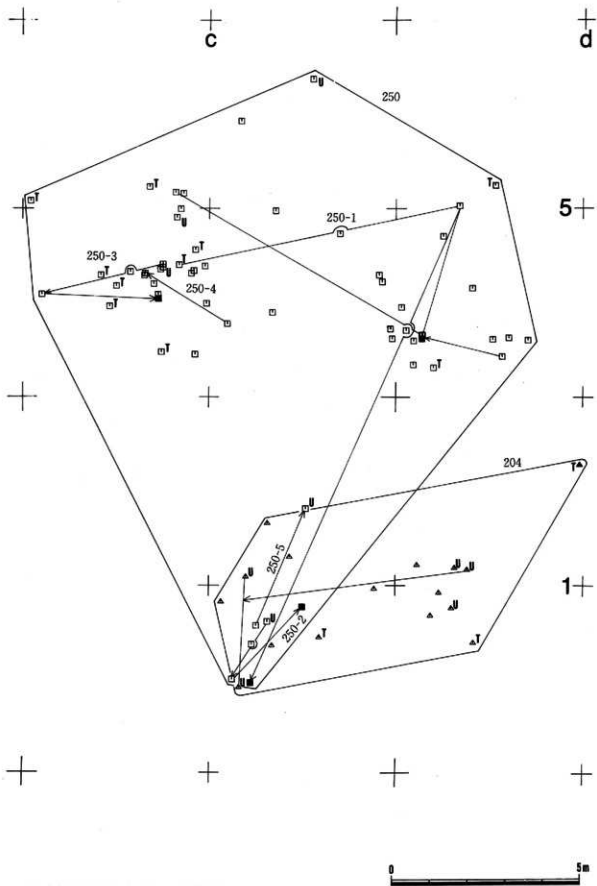
第51図 G1～G9ブロック器種別分布図2



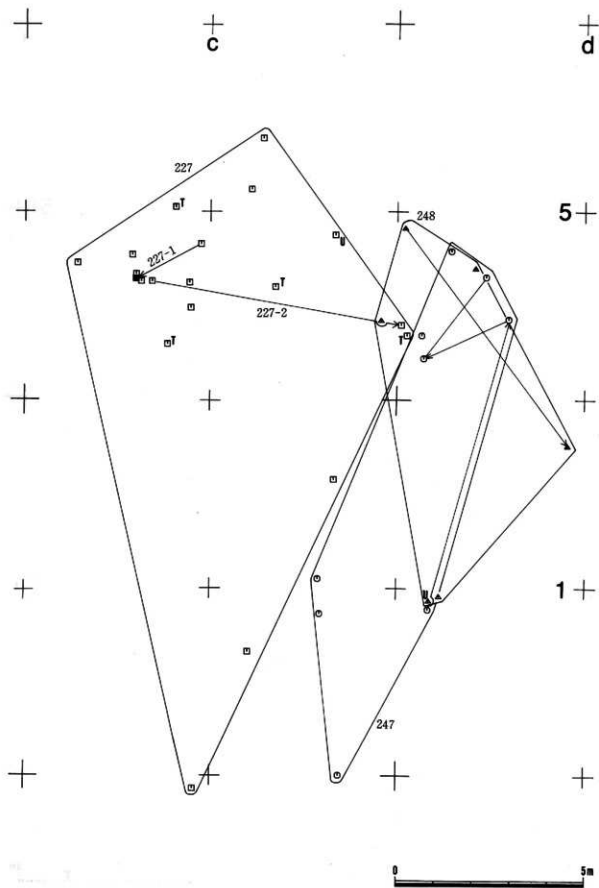
第52図 G1～G9ブロック母岩別分布図1



第53図 G1～G9ブロック母岩別分布図2

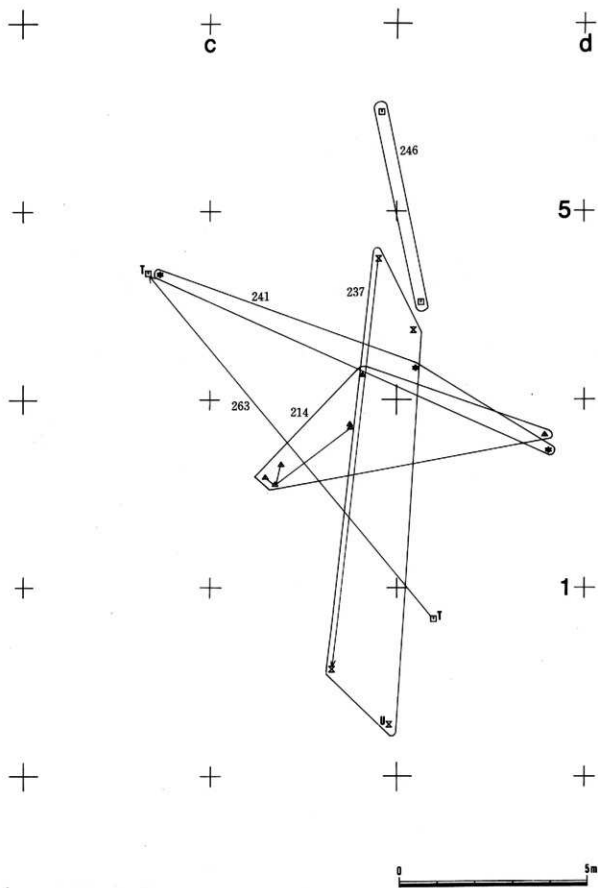


第54図 G1~G9ブロック母岩別分布図3

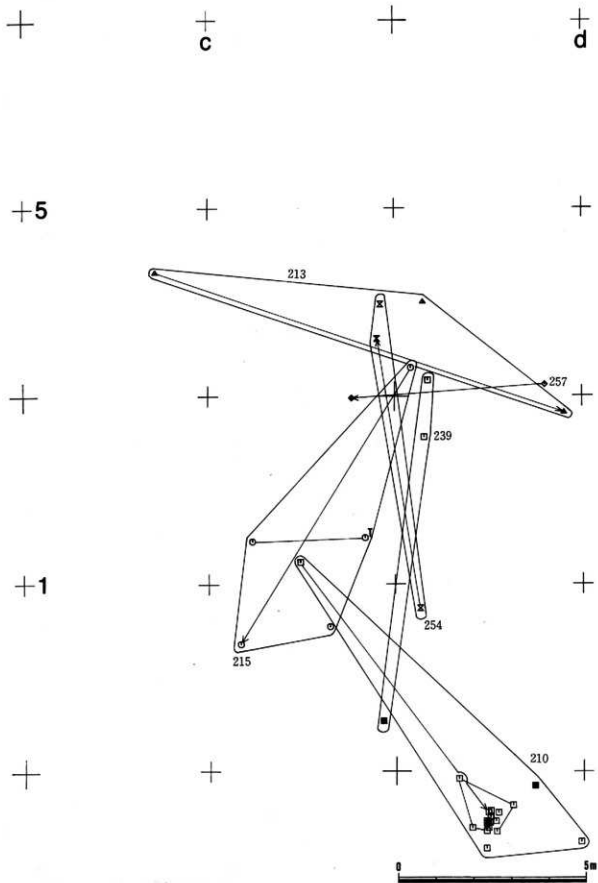


第55図 G1～G9ブロック母岩別分布図4

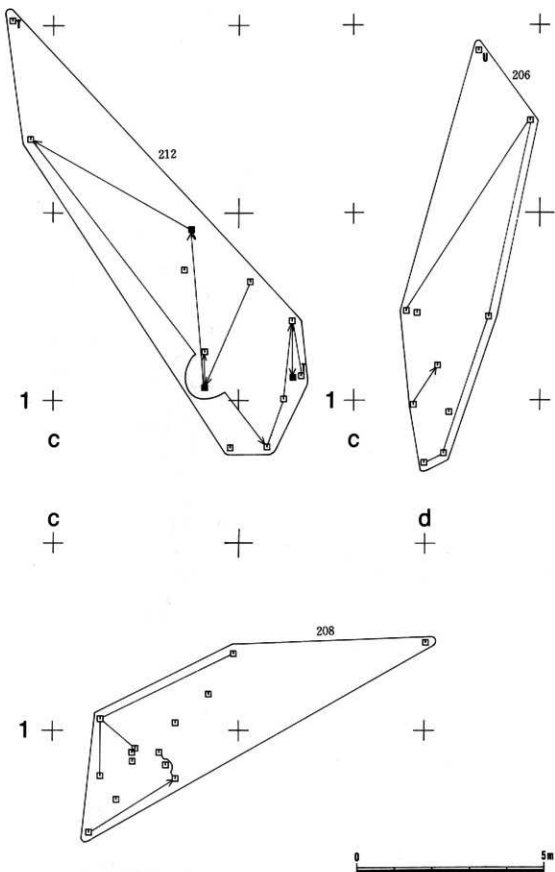




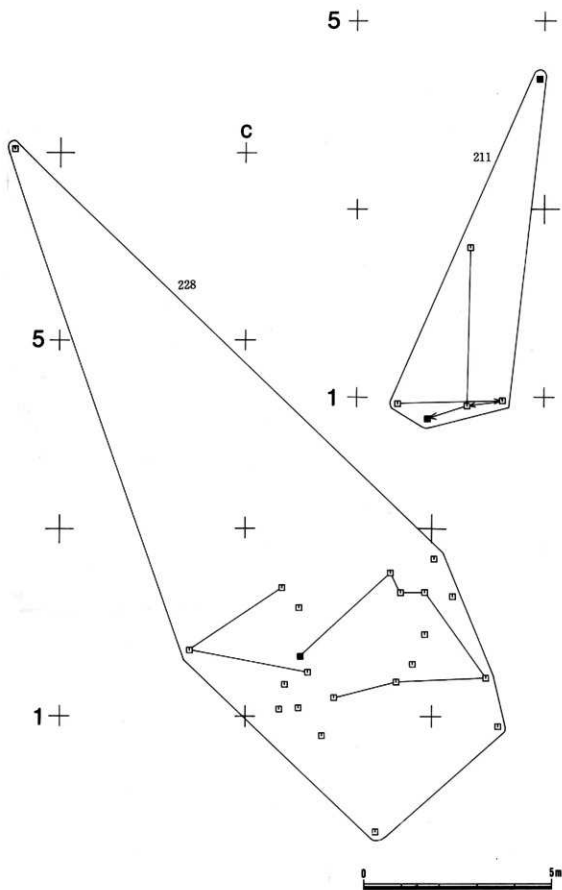
第56図 G1～G9ブロック母岩別分布図5



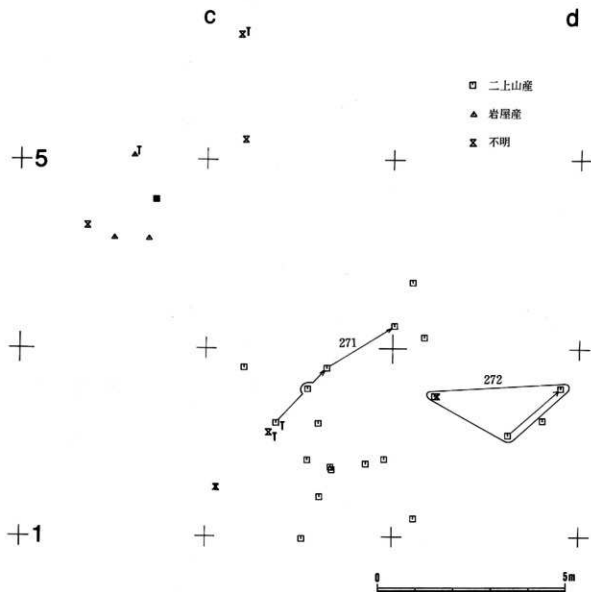
第57図 G1～G9ブロック母岩別分布図6



第58図 G1～G9ブロック母岩別分布図7



第59図 G1~G9ブロック母岩別分布図8



第60図 G1～G9ブロックサヌカイト分布図

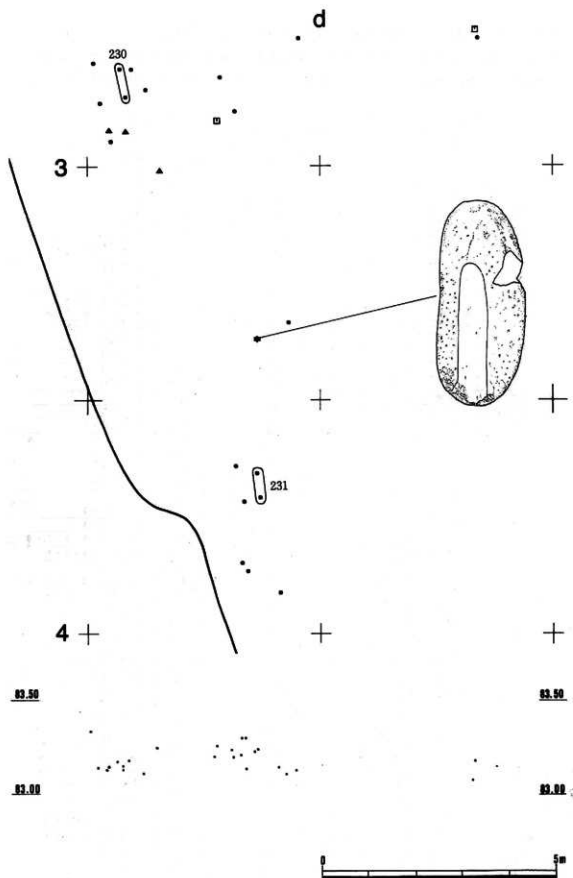
母岩No.	石材	特徴	構 成							総重量 (g)	挿図 番号	分布ブロック
			総数	製品	UF	石核	剣片	砕片	チップ			
201	チャート	黒	7			1	3	3		153.6	53	G4・5・7・8
202	チャート	灰	5				4	1		31.0	54	G7
203	チャート	灰	6		1		1	4		59.1	54	G7
204	チャート	半透明	16	4	5		7			136.6	55	G4・5・7
205	チャート	黒	7			1	4	2		120.2	54	G6
206	チャート	黒	9		1	1	3	3	1	184.2	59	G7・8
207	チャート	灰色泥質	6					6		35.1	54	G5・7
208	チャート	灰	14	1			6	7		121.5	59	G4・7
209	チャート	灰	9			1	4	3	1	147.9	54	G7
210	チャート	黒	20			1	9	5	5	90.8	58	G7・9
211	チャート	灰	6			2	4			485.9	60	G7・8
212	チャート	黒	14	2		3	9			186.9	59	G1・5・7・M3・C
213	チャート	アメ色	3			1	2			39.8	58	G1・4・8

第11表 G・H区ブロック群の母岩別資料1

2.9m×1.0mの規模をもつ。集中部はなく散漫に分布している。石器数は7点で、すべてチャートの剥片である。なお、G12ブロックとG11ブロックのほぼ中間には砥石が存在する。母岩別資料は剥片2点で構成される1例のみ確認している（母岩№231）。他のブロックと共有する母岩別資料は存在しない。

母岩№	石材	特徴	標 成							総重量 (g)	採 掘 図 号	分布ブロック
			総数	製品	U F	石核	剥片	砕片	チップ			
214	チャート	黒	7				1	6		143.3	57	G4・7・8
215	チャート	灰	5	1			4			7.9	58	G7・8
216	チャート	その他	2				1	1		70.2	53	G5
217	その他		5			1	4			45.4	53	G7
218	チャート	灰	9				3	6		146.5	53	G1
219	チャート	灰	3				1	2		29.0	53	G7
220	その他		3				3			17.4	53	G7
221	チャート	灰	6				6			8.5		G1・5・7・8
222	その他		10	1	1		8			22.9		G2・3・5・7・8
223	チャート	灰	2		1		1			5.6	53	G7
224	チャート	灰	4	1			2	1		29.9	54	G1
225	チャート	灰	5				5			14.4	53	G3・7・8
227	チャート	灰色泥質	20	4	2	1	13			43.0	56	G1・6・7・8
228	チャート	灰色泥質	26			1	11	14		250.4	60	G5・7・外
229	チャート	灰	2				2			3.4	62	G10
230	チャート	灰	2				1		1	1.6		G外
231	チャート	灰	2				2			8.0	62	G11
232	チャート	灰	2				2			10.8	62	G11
233	チャート	その他	2	1			1			7.1	53	G1
234	チャート	灰	4				3	1		9.6	53	G5
237	チャート	灰	4		1		3			32.0	57	G5・8
238	チャート	灰	8		1		6		1	31.2		G1・5・6・7・9
239	チャート	その他	3			1	2			23.9	58	G5・7・8
240	チャート	アメ色	10		1	1	7	1		124.1		G3・6・8・外
241	チャート	灰	3				2	1		13.0	57	G1・4・8
242	チャート	黒	2				1	1		4.6	53	G7
243	チャート	黒	5	1		1		3		52.8		G7・9
246	チャート	灰色泥質	2				2			10.4	57	G1・8
247	チャート	灰	9				6	3		71.6	56	G2・3・5・7・8
248	チャート	灰色泥質	6		1		4	1		34.2	56	G2・4・5・8
249	チャート	緑色織入	2				2			5.4	53	G9
250	チャート	灰	62	10	5	4	34	4	3	945.9	55	G1・2・3・7・8
251	チャート	黒	7		2	1	3	1		164.4		G1・5・7・8
252	チャート	その他	2				2			3.3	53	G6・
254	チャート	緑色織入	3			1	1	1		89.8	58	G5・8
256	チャート	灰	2				2			20.6	53	G7・
257	チャート	灰	2			1	1			23.7	58	G4・7
258	チャート	灰	2			1		1		72.6	53	G1
259	チャート	その他	2			1	1			53.1	53	G8
260	チャート	その他	2					2		14.8	53	G7
261	チャート	灰	2			1	1			30.1	53	G7
262	チャート	灰	2		2					16.6	53	G7・
263	チャート	アメ色	2	2						9.5	57	G1・5
264	チャート	灰	2	1			1			29.8	53	G1・7
265	チャート	灰	2				2			4.8	53	G1
266	チャート	灰	2				2			1.4	53	G5
267	チャート	灰	2					2		6.8	53	G3
268	チャート	灰	2					2		9.3	53	G7・
269	チャート	灰色泥質	2			1	1			55.6		G5 石核は表採
270	チャート	灰	2				2			7.8		G7 1点は表採
271	サヌカイト		3	1			2			25.1	61	G7・8
272	サヌカイト		3				3			21.2	61	G4・7
273	粘板岩		2	1			1			68.4		G5

第12表 G・H区ブロック群の母岩別資料2



第61図 G10・G11ブロック器種別分布図

#### 4. M区ブロック群

##### a. 概観 (第63図～第65図)

M区ブロック群は9基の石器ブロックから構成され、2基の配石を伴う。配石はいずれも1個の礫で構成されるものであり、必ずしも人為的なものとは考えにくい。1kgを超える礫であるため配石としてとりあげた。石器ブロックは他の地区のもの比べて分布密度が低いものが多く、まとまりがとらえにくい。全体的にみれば1-c-5区からM-c-3区にかけて円弧状に連なる一群(M1～M8ブロック)と、これとはやや南に離れてM-d-5区、M-e-5区周辺にまとまる一群(M9ブロック)に分かれる。これらのブロックはN区から続く段丘面とその西側の段丘崖を埋積した扇状地との接点付近に位置するため、南北方向の垂直分布は東側のほうが高く西側が低くなっている。こうした微地形を反映して遺物のレベルも標高83.5m～84.4mと幅をもつ。

M区ブロック群では総計215点の石器が出土している。各ブロック毎の器種、石材組成は第13表に示すとおりである。各ブロックの石器数はほぼ50点以下で全般に小規模なブロックで構成されている。そのため製品も全体で6点と少なく全般に貧弱な印象をうける。しかしながら刃部磨製石斧がM8ブロックで1点出土していることは特筆される。石材ではサヌカイトがブロック外に2点存在し、刃部磨製石斧に粘板岩?が用いられている以外はすべてチャートである。

母岩別資料は第14表にまとめている。M1～M3ブロックでは他のブロックと共有関係を持つ資料が全く存在しないが、M4～M9ブロックでは複数のブロックに分布するものが認められ、分布範囲も広い。しかし、接合資料では分布範囲は極端に狭くなりM4・M5ブロック以外ではブロック間の接合例は存在しない。なお、注目されることとしては、C区ブロック群・G区ブロック群・N区ブロック群と母岩別資料を共有していることで、M区ブロック群を介在させることによりC区ブロック群・G区ブロック群・N区ブロック群を同一文化層とし4つのブロック群を関連づけることが可能である。

##### b. 配石 (第62図)

###### 配石1

M3ブロックから東南へ約2.4m離れた位置にある。1個の礫で構成され、重量は1,120gである。

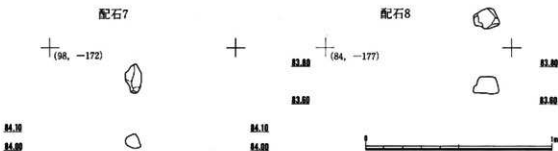
###### 配石2

M5ブロック中央部に位置する。1個の礫で構成され、重量は1,440gである。

##### c. 石器ブロック

###### M1ブロック (第66図)

0.6m×0.8mの不整形な範囲にややまとまって分布し、約1m離れたところに1点の石器が位置する。



第62図 配石7・8平面図



	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	RF	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
M	215	6	1	2	0	1	0	0	1	1	11	104	54	29	11	212	2	1
																2158	23	6
M1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	7	0	10	0	0
																4	0	0
M2	15	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	10	1	3	0	15	0	0
																33	0	0
M3	20	2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	9	3	5	1	20	0	0
																150	0	0
M4	40	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	16	16	2	4	40	0	0
																595	0	0
M5	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	30	13	4	1	52	0	0
																386	0	0
M6	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7	1	1	1	11	0	0
																113	0	0
M7	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	6	0	0	11	0	0
																406	0	0
M8	6	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1	1	5	0	1
																26	0	6
M9	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	14	4	2	3	25	0	0
																267	0	0
M外	25	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	17	4	0	0	23	2	0
																178	23	0

第13表 M区ブロック群の石器組成（石材の下端は重量g）

他のブロックに対する独立性は高い。石器数は10点でチップを主とした剥片類のみで構成され製品、石核は全く含まれない。母岩別資料についてはチップが主となるため詳細は不明であるが、ブロック内に同一母岩資料、接合資料をほとんどもたず、他のブロックとの関係も認められない。

#### M2ブロック（第66図）

2.6m×0.5mの細長い範囲に散漫に分布し、これと少し離れて2点の剥片がそれぞれ位置する。石器数は15点で製品1点と剥片類からなる。母岩別資料はブロック内のみに分布する2母岩6点を確認したが、他のブロックとの関係は認められない。

#### M3ブロック（第66図）

2.0m×2.1mの範囲にややまとまって分布し、これと離れて1点の砕片が存在する。石器数は20点であり、小型部分加工石器、二次加工ある剥片各1点、石核1点と剥片類からなる。点数が少ないのに対して製品がしっかりと組成されている。母岩別資料はブロック内のみに分布する1母岩2点を確認しただけで、他のブロックとの関係は認められない。

#### M4ブロック（第67図）

全体に散漫に分布しているが12.5m×5.0mの範囲を同一ブロックとしてとらえた。密度は低いが中央部では2.0m×1.0mの範囲でやや集中する箇所が認められる。M5ブロックとの境は明瞭ではない。石器数は40点で、ナイフ形石器1点、使用痕ある剥片1点、石核、剥片類からなる。石核は4点と他のブロックと比べるとやや多い。当ブロックは中央部を含めて水洗選別による微細遺物の検出を行っているが、全体の分布密度を大きく変えるような結果はなく、散漫な分布が裏付けられた（第4節-4参照）。母岩別資料は6母岩（19点）を識別し、このうち他のブロックにも分布するものは4母岩（15点）である。母岩別資料の分布についてはM5ブロックとの関係が深いためこれを含めて後述する。

#### M5ブロック（第67図）

10.4m×4.2mと細長くM4ブロックと同じくらいの広がりをもつ。2.0m×2.0mほどの集中部が中央

付近にあるが、全体の分布は散漫である。石器数は52点で、M区ブロックの中では最も量が多い。製品は含まず、使用痕ある剥片4点、石核1点と剥片類からなる。母岩別資料は10母岩（28点）を識別し、このうち他のブロックにも分布するものは4母岩（12点）である。

#### M4ブロック・M5ブロックに分布する母岩別資料（第68図）

M4ブロック、M5ブロックは、M区の中では最大の規模と石器数を持ち、母岩別資料、接合資料においても最も量が多い。この二つのブロックに関係する母岩別資料は、分布上2つに大別できる。

1. M4ブロックかM5ブロックのどちらかに分布範囲が限られるもの。
2. M4ブロックとM5ブロックの両方にまたがって分布するもの。あるいはさらにM区の他のブロックや他地区のブロックにも分布するもの。

1に相当するものはM4ブロックでは2母岩、M5ブロックでは6母岩（5例の接合資料を含む）である。

2に相当するものは4母岩である（母岩No.301, 302, 306, 307）。母岩No.301はアメ色系のチャートであり、ブロック内では特定の範囲に偏ることなく疎らに分布している。1例の接合資料は石核に剥片3点が接合するもので（図版23）、石核はM4ブロックに存在する。母岩No.302は灰色系のチャートである（図版35）。M4ブロックを主に分布するが、ブロック内では特定の範囲に偏ることなく疎らに分布している。この母岩はM区以外に製品（図版5-4）がN3ブロックに、剥片がG・H区ブロック群ブロック外に1点ずつ認められる。G・H区ブロック群の剥片は接合資料である。この接合資料では剥片剥離工程順に石器の分布を追うと、M4ブロック→M5ブロック→G・H区ブロック群ブロック外→M5ブロック（残核）となる。母岩No.306, 307は両者とも乳白色のチャートで、母岩No.301, 302とは異なりM区の各ブロックに数点ずつ分布し特定のブロックに集中することはない。No.306はM4ブロックに剥片が1点、No.307はM4ブロックに1点、M5ブロックに2点存在する。なお、No.306はB区ブロック群の母岩No.153、G・H区ブロック群の母岩No.204と大変よく類似しており同一母岩でもある可能性があるが、決め手に欠けるためここでは別母岩として扱っている。

#### M6ブロック（第69図）

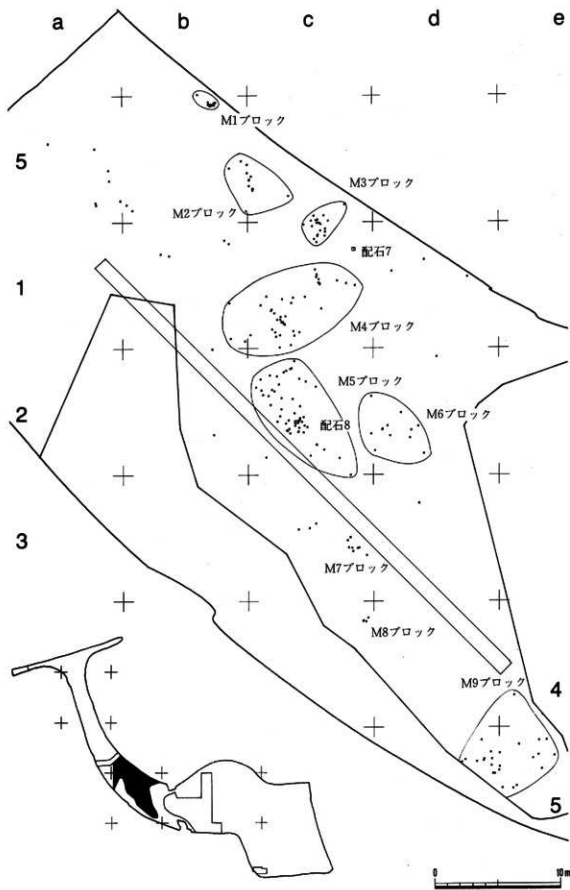
4.2m×4.6mの範囲にまばらに分布し、特に集中する部分はない。石器数は11点で、製品は含まず、使用痕ある剥片1点、石核1点と剥片類からなる。母岩別資料は4母岩（9点）を識別し、このうち他のブロックにも分布するものは母岩No.320と母岩No.315の2母岩（4点）で、母岩No.315はブロック外に分布し、母岩No.320はN3ブロックと接合関係を有する。この資料は剥片4点の接合資料であるが（図版35）、剥離工程をブロック間で追うと、N3ブロック（1点）→M6ブロック（3点）となる。先述のM4、5ブロックの母岩No.302とともに、M区ブロック群とN区ブロック群を結びつけることのできる資料である。

#### M7ブロック（第70図）

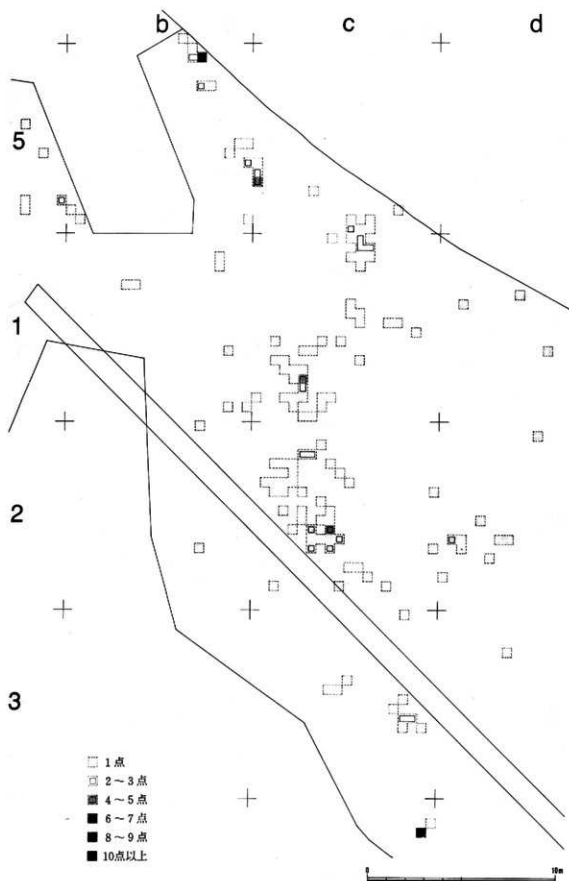
5.8m×1.2mの細長い範囲に分布する。8点と3点に分離できるが一括してM7ブロックとした。石器数は11点で、製品、石核は含まず、使用痕ある剥片1点と剥片、砕片のみから構成される。母岩別資料は2例（5点）ある。母岩No.312はブロック内で完結する砕片主体の接合資料である。母岩No.314はM8ブロックに1点分布する。

#### M8ブロック（第70図）

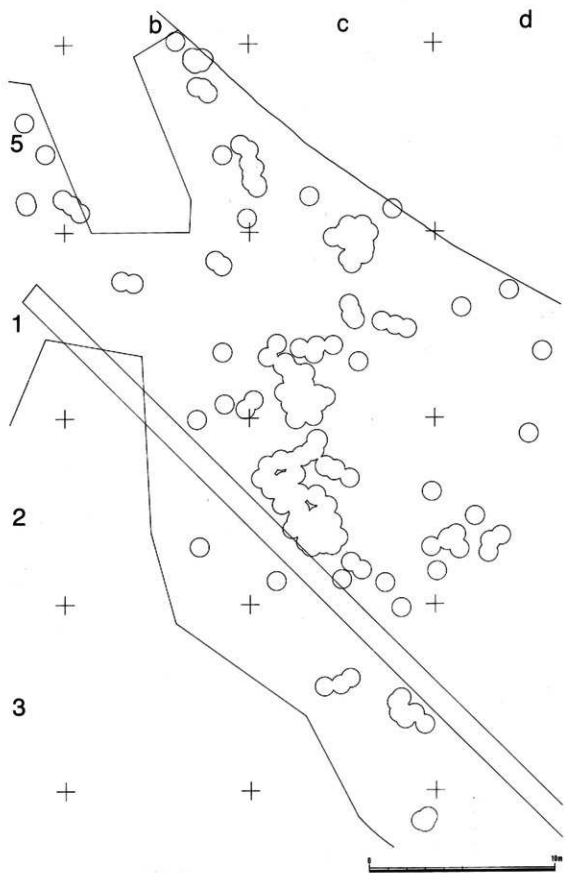
0.5m×0.4mの小範囲に分布する。石器数は6点で、粘板岩？製の刃部磨製石斧を1点含むためチャ



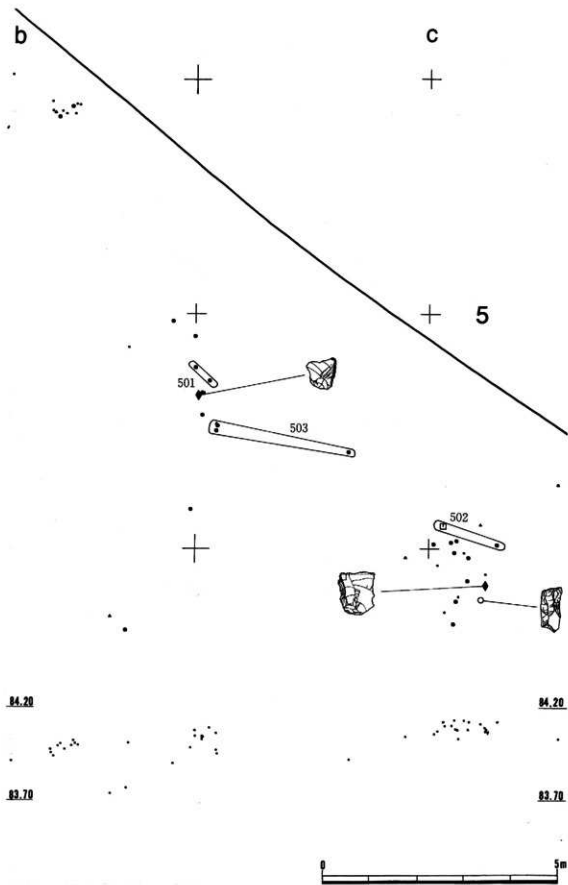
第63図 M区ブロック群石器・礫分布図 (•石器, □礫)



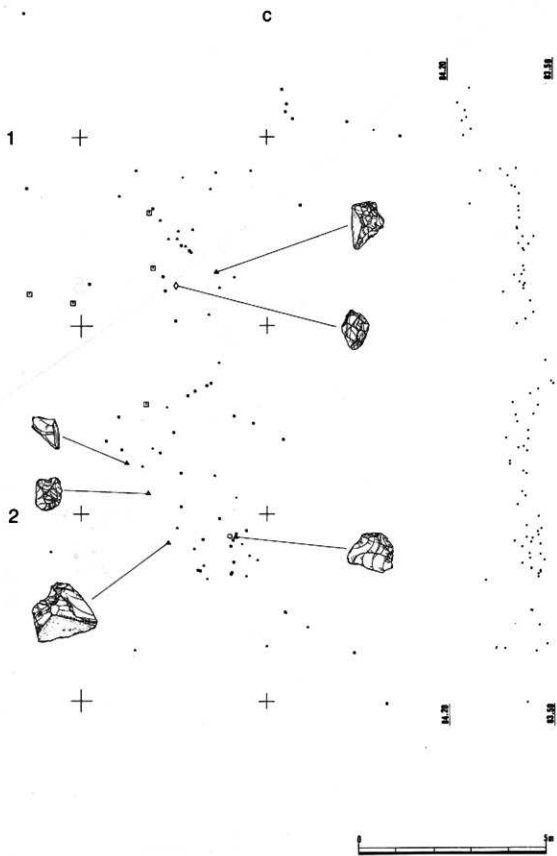
第64図 M区ブロック群石器等量線図



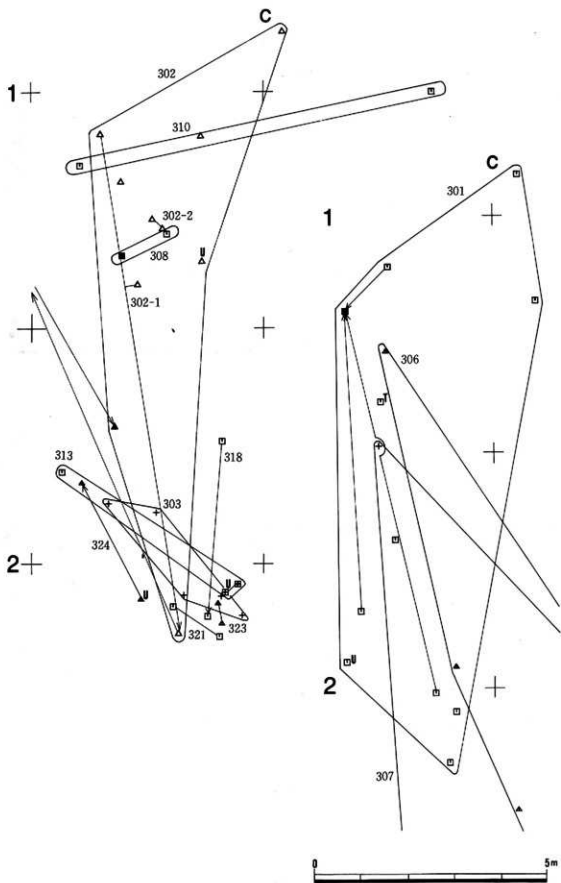
第65図 M区ブロック群石器等距離線図



第66図 M1～M3ブロック器種別、母岩別分布図

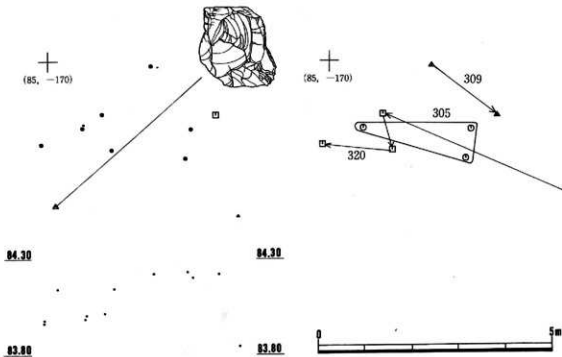


第67図 M4・M5ブロック器種別分布図

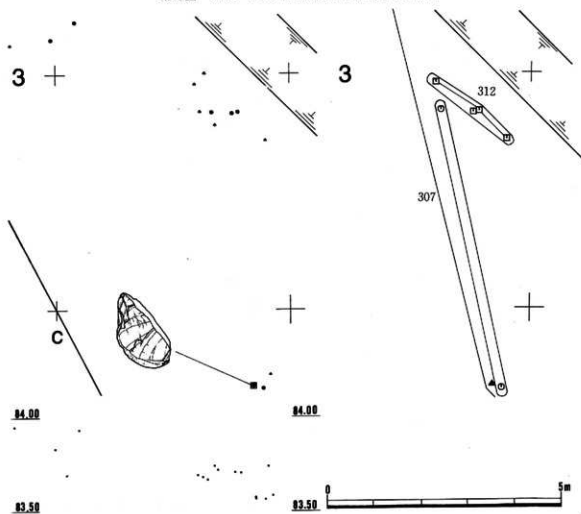


第68図 M4・M5ブロック母岩別分布図

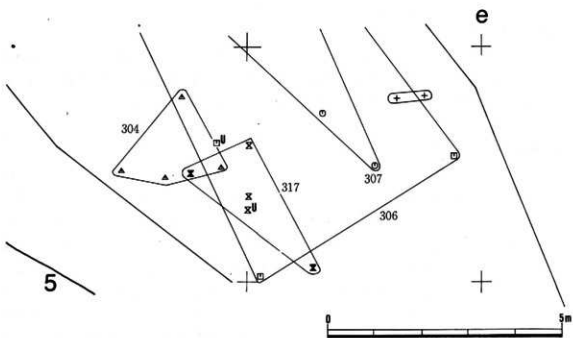
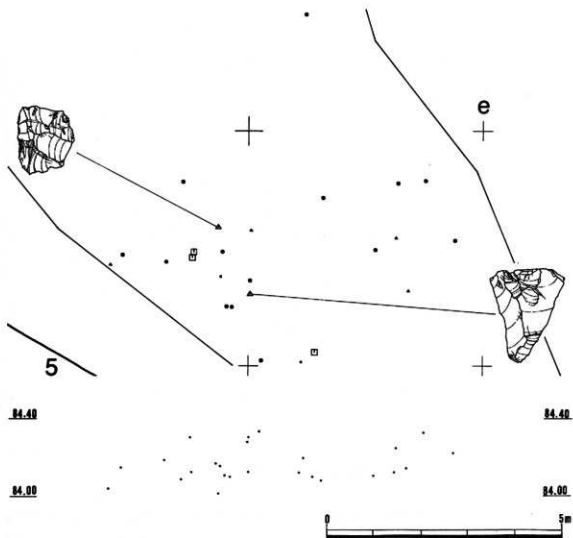




第69図 M6ブロック器種別分布図、母岩別分布図



第70図 M7・M8ブロック器種別分布図、母岩別分布図



第71図 M9 ブロック器種別分布図、母岩別分布図

母岩№	石材	特徴	種						総重量 (g)	図 番 号	分布ブロック
			種数	製品	UF	石核	剥片	砕片			
301	チャート	灰	12	1	1	1	8		236.4	68	M4・5
302	チャート	黒	12	1	1	1	5	4	208.1	68	M4・5・G外・N1
303	チャート	その他	5				3	2	23.1	68	M5
304	チャート	黒	4				4		10.2	71	M9
305	チャート	黒	3				3		4.9	69	M6
306	チャート	半透明	6		1		4	1	52.9		M4・5・9
307	チャート	半透明	6	1			5		25.1		M4・5・8・9・外
308	チャート	その他	2			1	1		37.1	68	M4
309	チャート	灰	3			1	1		36.3	69	M6
310	チャート	黒	2				1	1	17.4	68	M4
311	チャート	黒	3				3		7.1		M外
312	チャート	緑色顔入	5				3	2	400.7	70	M7
313	チャート	灰	3		1		2		14.9	68	M5
314	チャート	灰	2				1	1	27.5	70	M7・8
315	チャート	黒	2		1		1	1	20.9		M6・外
316	チャート	黒	2				2		38.5		M9
317	チャート	黒	7		1	2	4		69.1	71	M9
318	チャート	黒	2				2		11.0	68	M5
319	チャート	黒	2					1	2.0		M8
320	チャート	黒	4				4		72.3	69	M6・N3
321	チャート	灰	2				1	1	40.0	68	M5
322	チャート	灰	2				2		4.0		M5
323	チャート	灰	2				2		6.4	68	M5
324	チャート	灰	2		1		1		25.1	68	M5
325	チャート	灰	2				2		8.4	66	M2
326	チャート	黒	2			1	1		57.4	66	M3
327	チャート	灰	4				3	1	25.4	66	M2
328	チャート	灰	2				2		4.1		M2
329	チャート	灰	2				1	1	19.8		M外

第14表 M区ブロック群の母岩別資料

ートは5点である。刃部磨製石斧以外の製品は含まず、石核1点と剥片類で構成される。母岩別資料は2母岩(2点)を識別し、2母岩とも他のブロックにも分布する。母岩№307はM4・M5ブロックで述べられているとおりである。母岩№314はM7ブロックに1点分布する。

#### M9ブロック(第71図)

7.3m×7.3mの範囲にまばらに分布する。東側と西側に分布が分かれるが、一括している。石器数は25点で、使用痕ある剥片2点、石核3点と剥片類で構成される。母岩別資料は5母岩(16点)を識別した。このうち他のブロックにも分布するものは2母岩(5点)である。

### 5. N区ブロック群

#### a. 概観(第73図～第75図)

N区ブロック群は7基の石器ブロックから構成され、3基の配石を伴う。石器ブロックは巨視的にみれば、N-b-4区、N-c-3・4区周辺にややまとまって分布する一群と、その東側のN-e-3・4区周辺にはいくつかの小単位に分かれて分布する一群が認められる。前者では機械トレンチによって分断されたような恰好になってしまっているが、機械トレンチの南側では石器等量線図からみるとN-b-4区北東端とN-c-4区中央に2つの集中のピークが認められ、その間は若干の分布密度が低くなるのがわかる。これをN1、N2ブロックとする。機械トレンチの北側では、散漫ながら石器分布のまとまりが認められる。これはN2ブロックの一部とも考えられるが、分布の広がりから別のブロックととらえておきたい(N3ブロック)。これらのブロックは接合資料、同一母岩資料を共有し、密接な関係にあったことがうかがえる。

後者では、N-e-3区からN-e-4区にかけての径約10mの石器分布の空白部を取り囲むようにいくつかの石器ブロックが認められる。そのなかでまとまりが比較的明瞭に識別できる3つをブロックとしてとらえておく(N4～N6ブロック)。これらのブロックは相互に接合資料、同一母岩資料を共有せず、N1～N3ブロックとも全く関係をもたず、独立性の強いブロックということが出来る。また3基の配石はすべてN4～N6ブロックに近接して存在する。

遺物の出土レベルは、N4～N6ブロックが標高84.2m～84.7mの間に、N1～N3ブロックが標高84.1m～84.6mの間にある。N4～N6ブロックのほうが高いのは段丘礫層がより高いためである。

N区ブロック群では総計287点の石器が出土した。その組成は第15表に示している。石器総数ではN1～N3ブロックに対してN4～N6ブロックは極端に少ない。製品ではナイフ形石器は認められないが、小型部分加工石器、スクレイパー、挿入石器、鋸歯縁石器などが2、3ずつ存在する。N4～N6ブロックでは定型的な石器が存在しない反面、使用痕ある剥片が多い。ただし、これはN5ブロックに限られる。石材ではサスカイトがまったく認められず、刃部磨製石斧と大型のチョッパー以外はすべてチャートを用いている。刃部磨製石斧はN1～N3ブロックから西へ外れた所から単独で出土している(付図2)。

#### b. 配石 (第72図)

##### 配石10

N5ブロック端に位置する。1個の礫で構成され、重量は2,290gである。

##### 配石11

N5ブロックの南約3m、N4ブロックの東約6mの位置にある。1個の礫で構成され、重量は700gである。重量は1kgに達しないが、周辺に同様な大きさの礫が存在しないためとりあげておく。

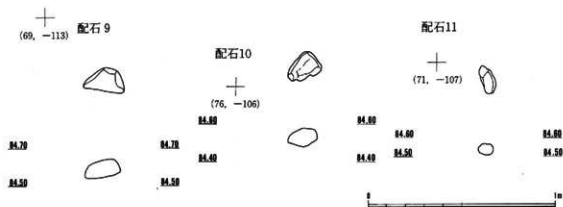
##### 配石9

N4ブロック内に位置する。1個の礫で構成され、重量は3,844gである。やや平たく偏平な砂岩質の礫である。

#### c. 石器ブロック

##### N1ブロック (第76図・第77図)

6.6m×4.8mの不整形な範囲に分布している。3.0m×1.1mの南北に細長い範囲でやや集中度の高い部分がある。スクレイパー2点、使用痕ある剥片1点、石核1点と剥片、チップからなり、定型的な石



第72図 配石9～11平面図

器は少ない。剥片類の割合が高いブロックといえる。母岩別資料は8母岩(37点)を識別し、このうち、他のブロックにも分布するものは7母岩(34点)である。母岩別資料の分布についてはN2ブロック、N3ブロックとの関係が深いためこれらを含めて後述する。

#### N2ブロック(第76図・第77図)

北側の広がり機械トレンチのため不明であるが、8.4m×(4.0m)の不整形な範囲に分布している。4.0m×2.0mのやや集中する部分がある。石器数は102点である。小型部分加工石器、挿入石器、顕歯縁石器、楔形石器などの定形的な石器と使用痕ある剥片、石核、剥片類からなり、N区ブロック群のなかではもっとも製品組成が充実したブロックである。母岩別資料は7母岩(60点)を識別し、これらはすべて他のブロックにも分布する。

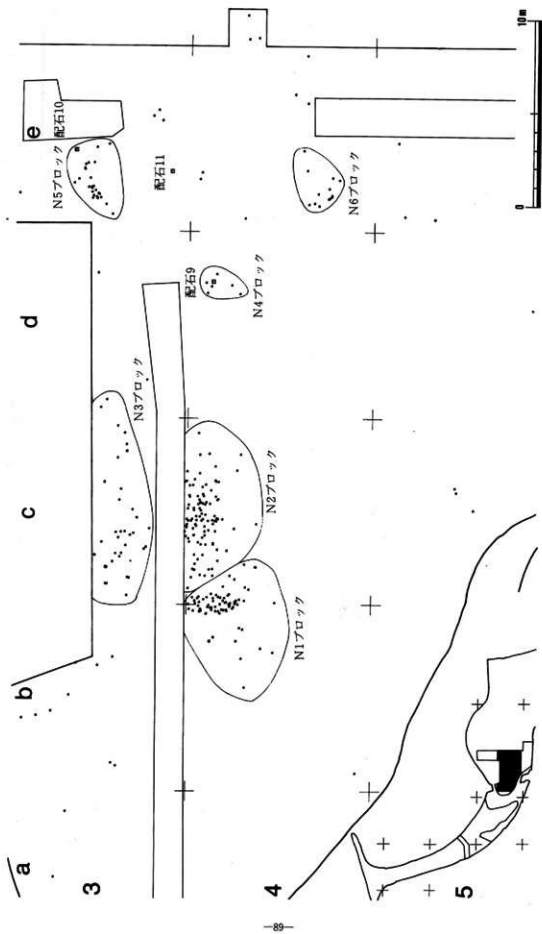
#### N3ブロック(第76図・第77図)

	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	R	F	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
N	287	15	0	2	2	3	1	3	2	2	13	134	39	70	17	285	0	2	
																3830	0	300	
N1	71	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	35	7	23	1	69	0	0
																	221	0	0
N2	102	8	0	1	0	2	1	3	1	0	1	50	11	28	5	102	0	0	
																	385	0	0
N3	37	2	0	0	0	1	0	0	1	0	2	21	5	7	0	37	0	0	
																	383	0	0
N4	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	6	0	0	
																	219	0	0
N5	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	10	1	5	3	25	0	0	
																	753	0	0
N6	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	7	2	1	13	0	0	
																	853	0	0
N外	33	3	0	1	0	0	0	0	0	2	1	14	7	3	5	31	0	2	
																	1016	0	300

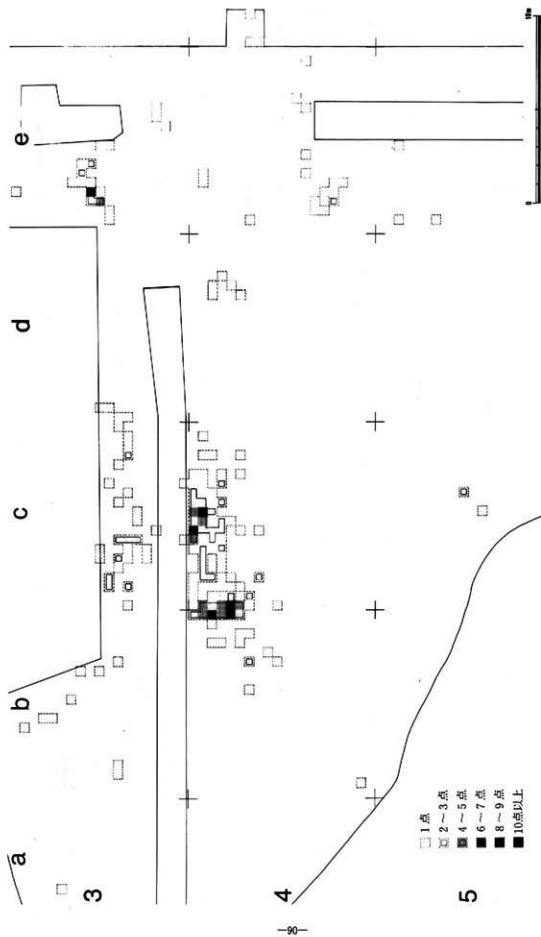
第15表 N区ブロック群の石器組成(石材の下段は重量g)

母岩%	石材	特徴	構							総重量(9)	排番	図号	分布ブロック
			総数	製品	UF	石核	剥片	碎片	チップ				
401	チャート	灰	3				1	2		135.6	76	N1・2	
402	チャート	その他	2					2		3.1	76	N1・2	
403	チャート	灰	2					2		3.6	76	N3	
404	チャート	黒	65	4	5	3	43	7	3	347.6	77	N1・2・3・外	
405	チャート	灰	7				2	5		144.3	76	N1・2・3	
406	チャート	灰	34	4		1	29			66.7	76	N1・2・3	
409	チャート	アメ色	2					2		4.9	76	N3・外	
410	チャート	その他	3					2	1	48.1		N6	
411	チャート	灰色泥質	2					2		4.2	76	N外	
412	チャート	黒	12			2	1	9		413.6	81	N5	
413	チャート	灰	4				2	1	1	290.7		N4	
414	チャート	黒	6			3	1		1	255.0	81	N5	
415	チャート	半透明	2					2		17.1	76	N3	
416	チャート	灰色泥質	3						3	125.6	76	N1	
417	チャート	黒	2			1	1			20.9	76	N1・2	
418	チャート	黒	2			1	1			139.1	81	N5	
419	チャート	灰	7						7	723.9		N6	
420	チャート	灰	2					2		4.2	76	N1・2	
421	チャート	灰	2				1	1		430.5		N外	

第16表 N区ブロック群の母岩別資料

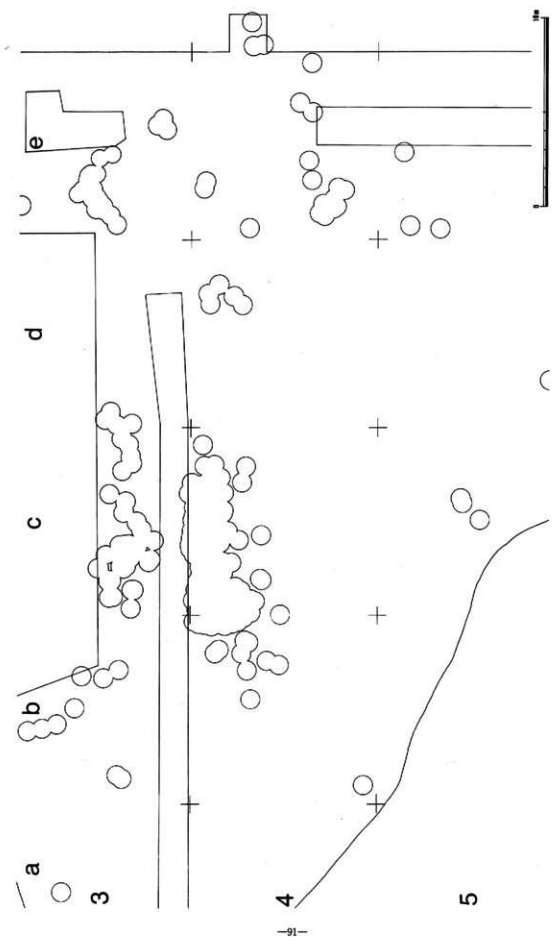


第73図 Nプロック群石器・礎分布図 (●石器, □礎)



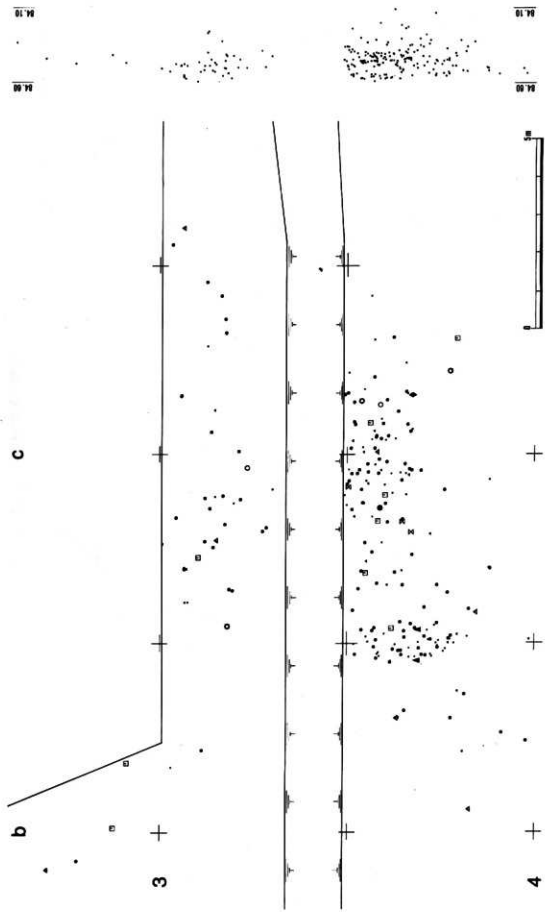
- 1点
- 2～3点
- 4～5点
- 6～7点
- 8～9点
- 10点以上

※74図 N区ブロック群石器守集線図

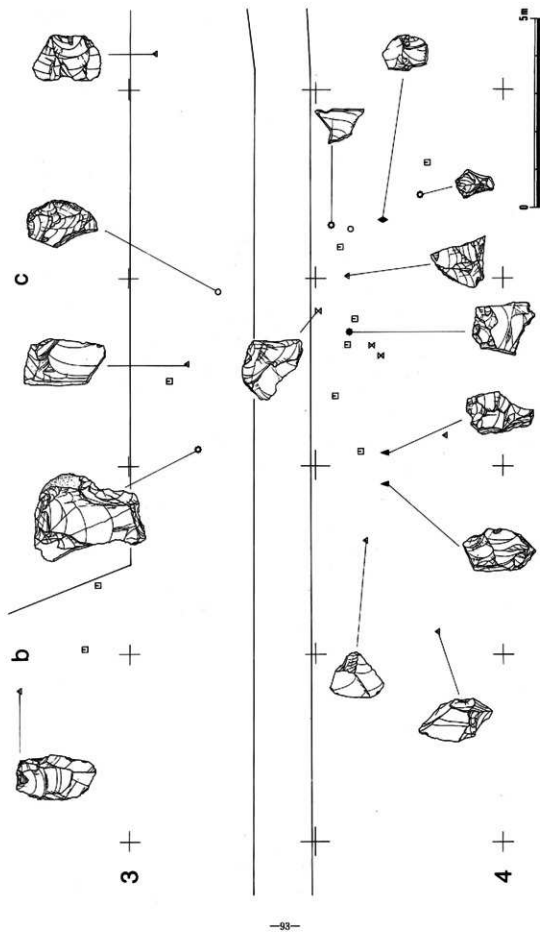


第75図 N区ブロック群石器等距離線図

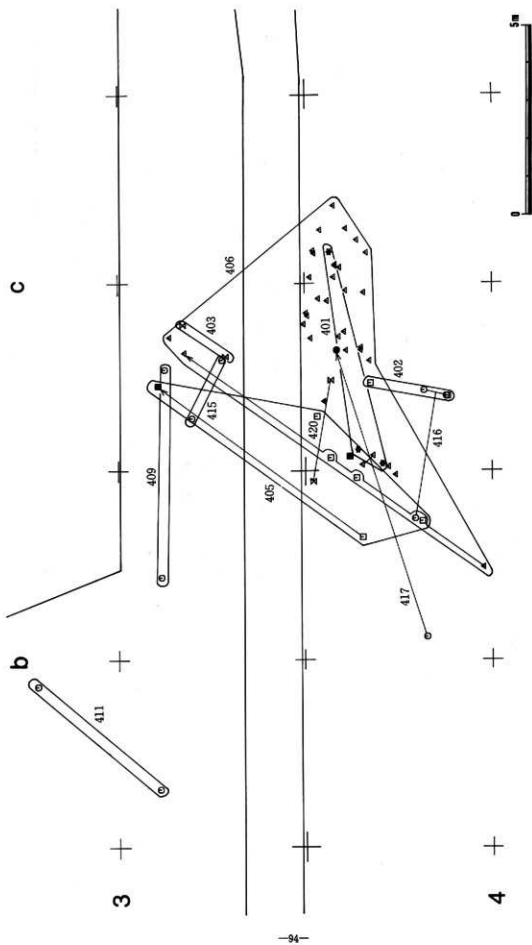




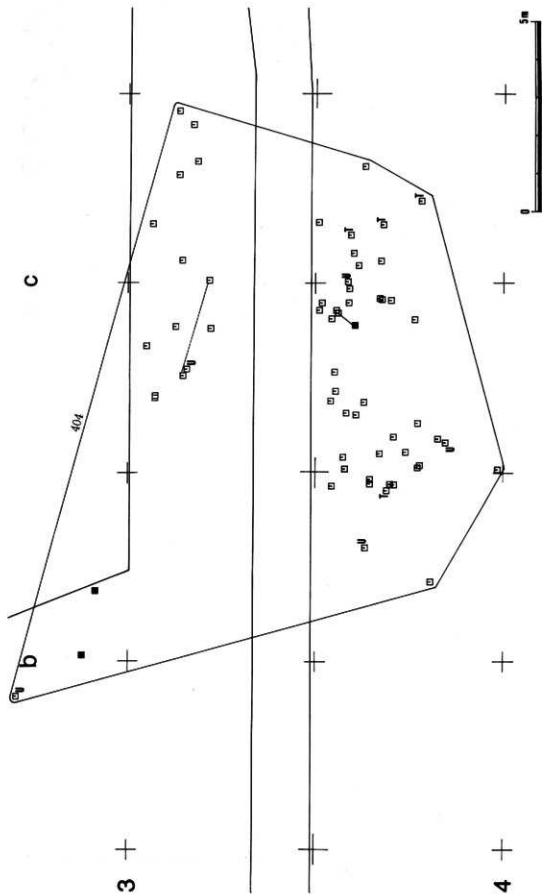
第76図 N1~N3ブロック器種別分布図1



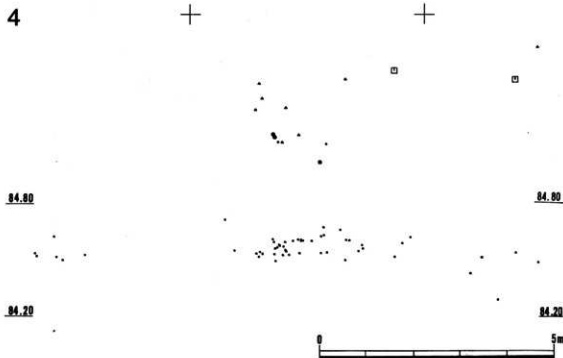
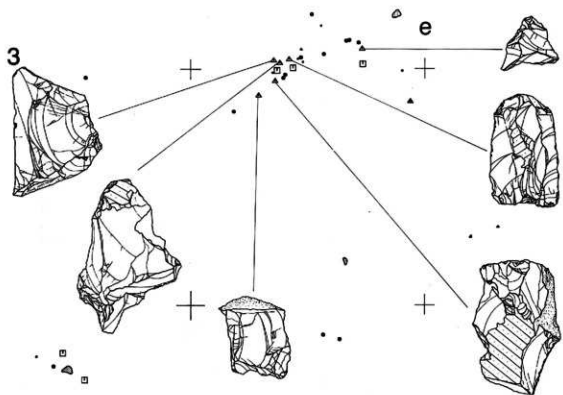
第77図 N1～N3ブロック器種別分布図2



第788図 N1～N3ブロック母岩別分布図1

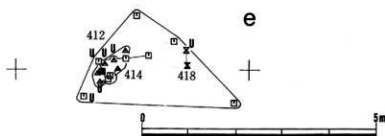


第79図 N1~N3ブロック母岩別分布図2



第80図 N4～N6ブロック器種別分布図

3



第81図 N5ブロック母岩別分布図

北側への広がり調査範囲外のため不明であるが、 $10.7\text{m} \times (3.0\text{m})$  の不整形な範囲に散漫に分布している。石器数は37点で、挟入石器、二次加工ある剥片各1点と使用痕ある剥片、石核、剥片類からなるが、製品の組成率は低くN1ブロック同様、剥片類の割合が高いブロックといえる。母岩別資料は6母岩(22点)を識別し、このうち他のブロックにも分布するものは4母岩(18%)である。

#### N1～N3ブロックの母岩別資料、接合資料(第78図・第79図)

N1～N3ブロックでは12母岩 125点が抽出できた。これらの母岩はN3ブロックの西側のブロック外とした所にも分布しておりここではこれも含めている。

母岩No401～403、409、411、415～417は構成点数が3点以下のものである。ブロック内に分布が完結するもの、あるいはブロック間にまたがっても相互に近接した位置にあるものが多いが、母岩 No401、No417はN1とN2ブロックの両方に分布する。

母岩No404～406はいずれも構成点数が多くN1～N3ブロックにすべてに分布する。No404が3つのブロックにほぼ均等に分布するのに対して、No405はN1ブロックに、No406はN2ブロックに偏りがみられる。この3母岩では接合資料は5例11点を見出したに過ぎず、母岩別資料の構成数が多い割には接合資料が少ない。これは個々の遺物が小さく、石核も小型のもので接合作業が困難であったことにもよる。

#### N4ブロック(第80図)

$2\text{m} \times 1\text{m}$  の範囲に6点がまとまって分布しており、そのほぼ中央に配石3がある。石核2点と剥片類で構成され、製品は含まれない。6点の内4点が同一母岩(母岩No413)に属し、そのうち3点が接合する。一撃のもとに分割された礫片3つが接合するもので2点が石核になっている。この石核の作業量は少ないが、剥離された剥片は調査区内には存在しない。

#### N5ブロック(第80図・第81図)

直径約3mの半弧状にやや密に分布している。北側に接して配石1がある。石器数は25点で製品はまったく含まれないが、使用痕ある剥片が6点ありこれに石核2点と剥片からなる。使用痕ある剥片、剥片には大型のものが多く、小型の剥片が多いN1～3ブロックと対照的である。母岩別資料、接合資料は3母岩(19点)を識別し、識別率は76.0%にのぼる。その半数以上が母岩No412である。この母岩には良好な接合資料が含まれる(図版30)。

#### N6ブロック(第80図)

$3.0\text{m} \times 2.5\text{m}$  の不整形な範囲に散漫に分布している。石器数は13点である。一撃のもとに7個の破片に分割された資料(母岩No419)がブロックの量的中心を占め、定形的な石器や使用痕ある剥片は存在しない。

## 6. S・T区ブロック群

### a. 概観 (第82図)

S・T区ブロック群は3基の石器ブロックから構成され、これに3基の礫群が伴う。礫群は6～7mの間を置いてほぼ等間隔に並んでいる。石器ブロックは礫群2と一部重なってS1ブロックが、約1.5mほど南に離れてS2ブロックが、礫群1と礫群3の間にS3ブロックがある。これらの礫群、石器ブロックは平面分布の上では比較的明瞭に区別できる。

S・T区ブロック群の石器ブロックでは総計53点の石器が出土している。ブロック毎の器種、石材組成は第17表に示すとおりである。いずれのブロックも構成点数は少ないが、ナイフ形石器を中心とした製品が含まれており、器種組成の中で重要な位置を占める。総点数において製品は1割強を、チップを除いた32点では18.8%を占める。石材ではサヌカイトの剥片(図版39-13)とめのうの剥片(図版25-5)が各1点ブロック外に存在する以外はすべてチャートである。

これらの3ブロックは相互に接合資料、母岩別資料を共有せず、この面での関連性は認められない。しかし、いずれもナイフ形石器を有し、石器の点数の割には製品の組成率が高いことが指摘できる。

### b. 礫群

#### 礫群1 (第83図)

最も東に位置する礫群である。構成礫数は27点である。この礫群は弥生時代以降の遺構の調査を行っている際に、遺構検出面であるシルト層から数点の礫がすでに露呈していた。旧石器確認調査の際に、礫の中に赤化の認められるものが存在していたため礫群であると気がついたが、こうした事情からすでに若干の攪乱をうけていた可能性がある。

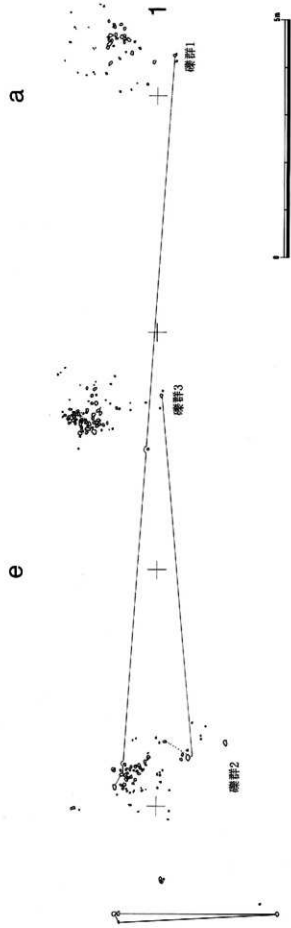
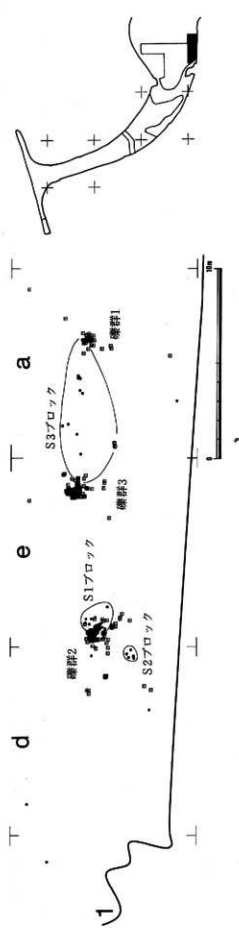
礫の分布は直径50cmの範囲にはほぼ収まるが、構成数が少ないため密度は低く感じられる。礫どうしの接合例は少なく礫群内部ではわずかに1例である。しかし、実際はその場で割れた状態の礫が多く、礫自体はかなり破損しているものが多い。礫のレベルは南北断面では84.6mでほぼそろっているのに対し

	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	RF	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
S	53	6	4	1	0	1	0	0	0	0	1	20	2	21	3	51	1	1
																333	3	9
S1	30	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	18	0	30	0	0
																17	0	0
S2	6	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	2	6	0	0
																145	0	0
S3	13	4	2	1	0	1	0	0	0	0	1	7	0	0	1	13	0	0
																118	0	0
S外	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	2	1	1
																73	3	9

第17表 S・T区ブロック群の石器組成 (石材の下端は重量g)

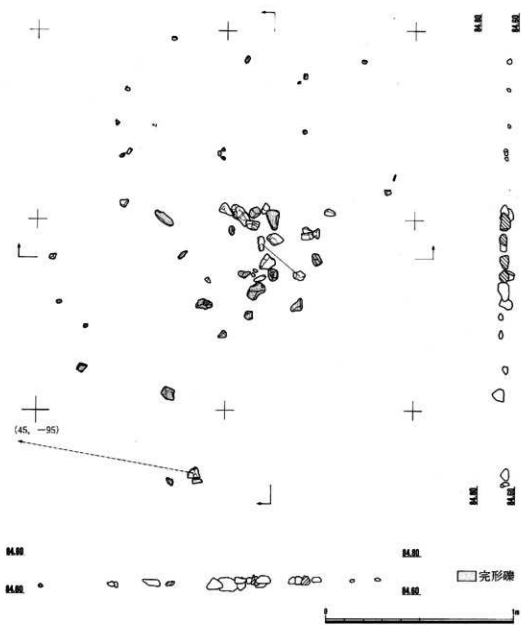
母岩№	石材	特徴	構成						チップ	総重量 (g)	母岩番号	分布ブロック
			総数	製品	UF	石種	剥片	9				
506	チャート	灰色泥質	28	1				9	16	16.3	87	S1
507	チャート	灰	2			1	1			66.4	87	S2
510	チャート	灰	3				3			15.1	88	S3
511	チャート	灰色泥質	3	2			1			4.9	88	S3
516	チャート	灰	2		1	1				85.4	88	S3

第18表 S・T区ブロック群の母岩別資料



第82図 S・T区ブロック群石器・燧分布区、燧群平面図





第83図 礫群1 平面図

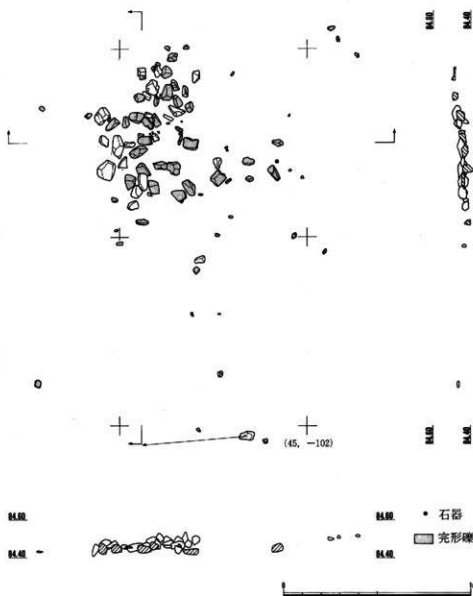
東西断面では東側から西側へ向かってわずかに傾斜している。これは当時の地表面の傾きを反映しているものと思われる。他の礫群とは礫群の中心部から南に外れた1点の礫が礫群2内部の礫と接合する。なお、石器はS3ブロックの石核が1点、礫群の北端から出土している。

礫群2 (第84図)

最も西に位置する礫群である。構成礫数は73点である。礫はいずれもシルト層の最上部にあり、一部はシルトの上に頭を出しているものもあったが、礫群2周辺は風化したATが薄く堆積していたため、遺存状態は良好である。

礫の分布は長径0.7m、短径0.4mの範囲に特に集まるが、その周辺にもかなり広く分布し、長径1.9m、短径1.9mを礫群2の範囲としておきたい。破損礫の占める割合が高く接合例も多い。1個の礫が細かく破損し、広範囲に散らばっているのが特徴で礫群1のようにその場で割れた状態の礫は少ない。





第85図 礫群3平面図

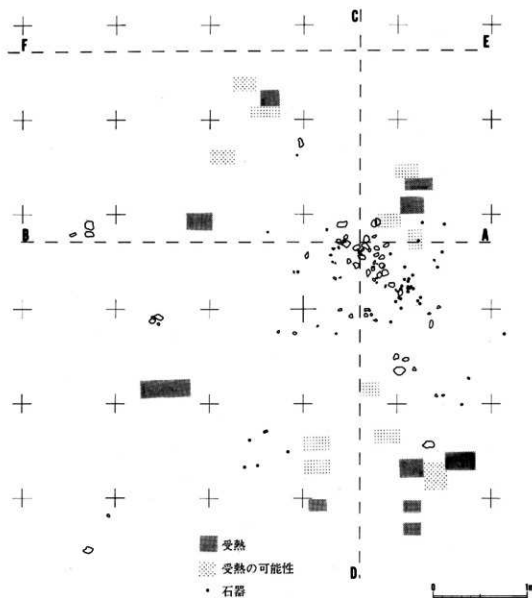
器には火を受けた痕跡がまったく認められない。また、南西に約1.5m離れたところにはS2ブロックが存在する。

#### 礫群3 (第85図)

礫群2と礫群1の間に位置する。構成礫数は55点である。ATの堆積はないが、ほぼシルトに薄く覆われていたため、遺存状態は良好である。

礫の分布は長径1.1m、短径0.8mの範囲に特に集中し、それよりも外側では急激に散漫となる。完形礫の占める割合が高く、礫どうしの接合例はほとんどない。礫のレベルは東西、南北断面とも84.4m付近に集まるが、南北断面では北から南へ向かって、東西断面では東から西へ向かって緩やかに傾斜している。他の礫群とは礫群2と1例の接合関係をもつ。石器ブロックは礫群3と礫群1の間にS3ブロックが存在し、西端の1点の石器が礫群3内に存在する。ただし、S3ブロック自体は石器ブロックとし





第86図 燧群2における推定炉床の位置

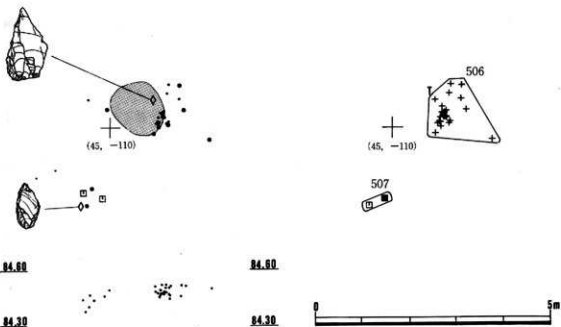
は燧群の使用状況と密接にかかわっているものと思われる。

第86図には燧群2周辺において実施した熱残留磁気分析の結果、推定される炉床の位置と燧群2、石器ブロック1・2との位置関係を示している。分析の方法と結果は付篇4に詳述されているのでそれを参照されたい。これによれば燧群の中心部には炉床と推定される場所は検出されていないが、燧群を取り巻くように複数の炉床が推定されている。こうした状況は、燧群2においてはその場で火が焚かれたのではなく、近接した別の場所で燧が焼かれたことを裏付けることになろう。

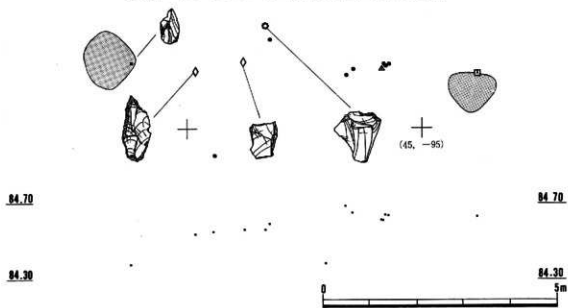
### c. 石器ブロック

#### S1ブロック (第87図)

1.4m×1.0mの不整形な範囲に密集して分布している。石器数は30点である。ナイフ形石器1点と同一母岩の剥片、チップが大部分を占める特徴的なブロックである。剥片のうち4点はナイフ形石器と接合する(図版38)。チップとこのナイフ形石器の接合資料は見出すことができず、これが、ブランティ



第87図 S1・S2ブロック器種別分布図、母岩別分布図



第88図 S3ブロック器種別分布図、母岩別分布図

ングチップであるのか剥片生産の段階に生じたものか、即断できない。この母岩がかなり良質で石器製作に好適であること、チップが5mmにも満たない微細なものであることから、このナイフ形石器あるいは遺跡外に持ち出された製品の製作に伴うものであろうと推定しておきたい。

### S2ブロック (第87図)

0.5m×0.5mの円形な範囲にまとまって分布している。石器数は5点で、構成点数は少ないものままとりの良いブロックである。ナイフ形石器1点と石核2点、剥片2点からなる。石核の1点はチョッピング・ツール状の形の整ったもので(図版21-4)、製品として使用されている可能性がある。この石核と同一母岩の剥片が1点あるが、他は異なる母岩である。

### S3ブロック (第88図)

5.6m×3.0mのやや広い範囲に散漫に分布しており特に集中する部分は認められない。ブロックというよりむしろ散漫分布域とでも呼んだほうが良いかもしれない。石器数は13点で、2点のナイフ形石器を含み、製品の組成率が高い。母岩別資料は3母岩(8点)があるが、接合資料はない。ナイフ形石器の1点は単独母岩であり、もう1点は挟入石器と同一母岩である。

## 7. T・U区ブロック群

### a. 概観 (第89図)

T・U区ブロック群は2つの石器ブロックから構成される。2つの石器ブロックは4m以上離れ、平面分布上、明瞭に分離できる。また相互に同一母岩資料、接合資料をまったく共有せず、組成も剥片を主体とするT1ブロックに対して、石核が主体のT2ブロックというように異なっており、関連性を認めることは困難である。

T・U区ブロック群では総計28点の石器が出土している。2つのブロックの器種、石材組成は第21表に示すとおりである。両ブロックとも、製品を含まないというネガティブな面で共通している。

### b. 石器ブロック

#### T1ブロック (第90図)

5.8m×4.6mの不整形な範囲に散漫に分布しているが、2.8m×1.0mのやや集中する部分がある。石

	総数	製	KN	KB	SC	NO	DE	PE	RF	AX	UF	FL	CL	CH	CO	CH	SN	他
T	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	6	8	3	28	0	0
																946	0	0
T1	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	4	8	0	22	0	0
																49	0	0
T2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	6	0	0
																897	0	0

第21表 T・U区ブロック群の石器組成(石材の下端は重量g)

母岩%	石材	特徴	構 成							総重量 (g)	挿 番 号	分布ブロック
			総数	製品	UF	石核	剥片	砕片	チップ			
508	チャート	その他	2					2		28.1	90	T1
509	チャート	灰	2					2		1.2	90	T1
512	チャート	灰	2					2		2.9	90	T1
513	チャート	黒	3			1	1	1		338.8	90	T2
514	チャート	灰	3				2	1		344.4	90	T2

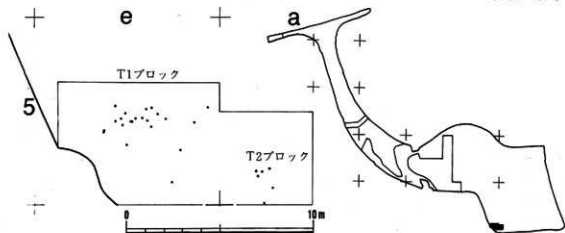
第22表 T・U区ブロック群の母岩別資料

器数は22点ですべてチャートである。剥片、チップが主体で製品や石核は含まない。母岩別資料は3母岩、6点が識別できたが、識別率は低く、接合資料も存在しない。

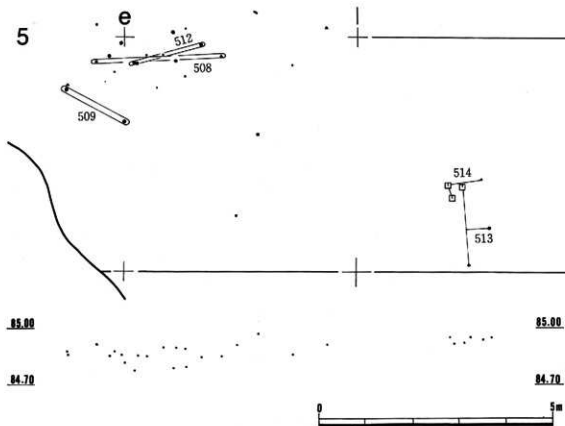
T2ブロック (第90図)

2.0m×1.0mの不整形な範囲に散漫に分布している。石器数は6点ですべてチャートである。石核、破片からなり製品は含まれない。これらは2母岩に分かれ全て接合する。石核に残された剝離面を観察すると何点かは良好な剥片が得られているようであるが、何れも調査区内からは検出されていない。

(久保・藤田)



第89図 T・U区ブロック群石器分布図



第90図 T1・T2ブロック器種別・母岩別分布図